

鏡の国のアリス
with すずめばち

Through the Looking Glass: And What Alice Found There
(with the "Wasp" Episode)

ルイス・キャロル 著 翻訳: 山形浩生¹

平成 12 年 9 月 17 日

¹ © 2000 山形浩生 プロジェクト杉田玄白正式参加作品。本翻訳は、この著作権表示を残す限りにおいて、訳者および著者に一切断ることなく、商業利用を含むあらゆる形で自由に利用・複製が認められる。詳細は <http://www.genpaku.org/> を参照。



目次

著者の序文	3
第1章 鏡のおうち	7
第2章 生きた花のお庭	21
第3章 鏡の国の昆虫たち	31
第4章 トウィードルダムとトウィードルディー	39
第5章 ウールと水	53
第6章 ハンプティ・ダンプティ	65
第7章 ライオンと一角獣	77
第8章 「ぼくならではの発明」	87
第9章 アリス女王	105
第10章 ゆさぶる	121
第11章 目をさます	123
第12章 どっちが夢を？	125
訳した人の言い訳	129

著者の序文

次のページに示した詰めチェス問題が読者の一部をまごつかせたようなので説明しておくけれど、これは駒の動きだけを考えれば正しく作ってあるのだ。赤と白が交互に順番通り動くという点については、まあ実際より多少は厳密でないところもあるし、女王^{クイーン}三つのキャスリングは単に、三人が宮殿に入ったということを表現することばのあやだ。でも六手目の白の王^{キング}さまへの王手、七手目で赤の騎士^{ナイト}が取られ、そして最後の赤の王^{キング}さまの王手詰み^{チェックメイト}は、駒を実際にならべて指示通りに動きをやってみた人ならだれでもわかるように、チェスのルールにきちんとしたがっている。

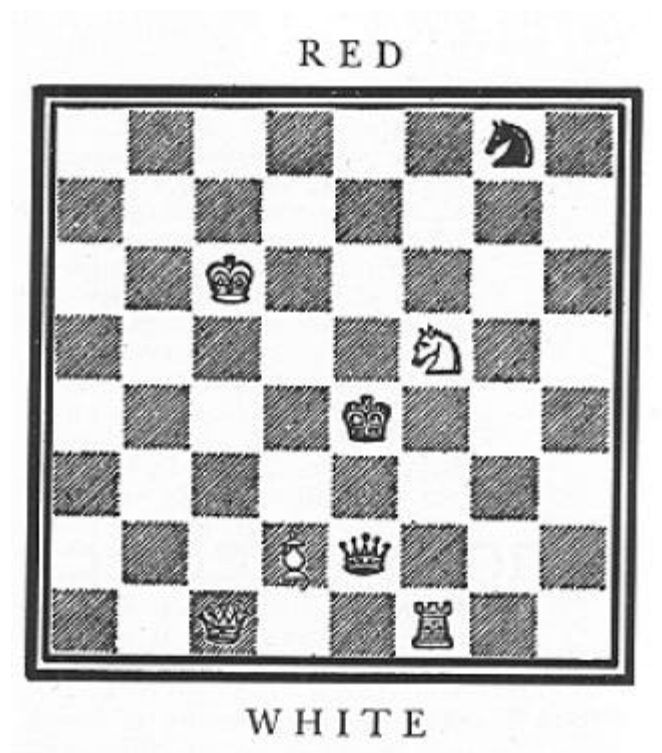
『ジャバウォッキー』の詩に出てくる新語は、どう発音すればいいかについていくつか見解の相違を生んでいるのでこの点についても指示をしておくほうがいいだろう。「slithy (しゅるり)」は、「sly」と「the」の二語をくっつけたような感じで発音すること¹。「gyre (ぎょる)」と「gymble (ぐんぷる)」の G の音は、強く硬い発音で²。それと「rath (トグラ)」は「bath」と韻をふむこと³。

1896 年クリスマス

¹訳注：つまり、「スリジー」ではなく「スライジー」に使い発音で。

²訳注：つまりジャジジュジェジョではなくガギグゲゴの音で。

³訳注：つまり「レイス」ではなく「ラス」に近い発音で。



白のポーン（アリス）を動かして、十一手詰め。

- | | |
|--|---|
| 1. アリス、赤の女王 ^{クイーン} に会う | 1. 赤の女王 ^{クイーン} KR4 へ |
| 2. アリス、Q3 経由（列車）
で Q4（トウィードルダム
とトウィードルディー） | 2. 白の女王 ^{クイーン} QB4 へ
（シヨールを追って） |
| 3. アリス、白の女王 ^{クイーン} に会う
（シヨールと） | 3. 白の女王 ^{クイーン} QB5 へ
（ヒツジになる） |
| 4. アリス、Q5 へ
（店、川、店） | 4. 白の女王 ^{クイーン} KB8 へ
（柵にたまごを置く） |
| 5. アリス、Q6 へ（ハンプ
ティ・ダンプティ） | 5. 白の女王 ^{クイーン} QB8 へ
（赤騎士 ^{ナイト} から逃げて） |
| 6. アリス、Q7 へ（森） | 6. 赤騎士 ^{ナイト} K2 へ（王手） |
| 7. 白騎士 ^{ナイト} 、赤騎士 ^{ナイト} を取る | 7. 白騎士 ^{ナイト} KB5 へ |
| 8. アリス、Q8 へ（戴冠） | 8. 赤女王 ^{クイーン} 、王 ^{キング} の升へ（試験） |
| 9. アリス、女王 ^{クイーン} になる | 9. 女王 ^{クイーン} たち入城 ^{キャスリング} |
| 10. アリス入城（祝宴） | 10. 白女王 ^{クイーン} 、QR6 へ（スープ） |
| 11. アリス、赤の女王 ^{クイーン} を
取って勝つ | |

無垢で曇りなき眉と

不思議の夢見る瞳の子よ！

時は駿く、我ときみとは

半生の歳の差があろうとも

きみの愛しきほほえみは確かに

愛の贈り物たるおとぎ話を勝ち得るはず

きみの輝かしい顔も見ず

銀の笑いも耳にせず

きみの若き人生の将来に

我が思い出の居場所もないはず――

でもいまのきみが、我がおとぎ話にさえ

耳を傾けてくれれば十分

別の日、夏の日差し輝く頃

始まりし物語

ボートを漕ぐリズムに

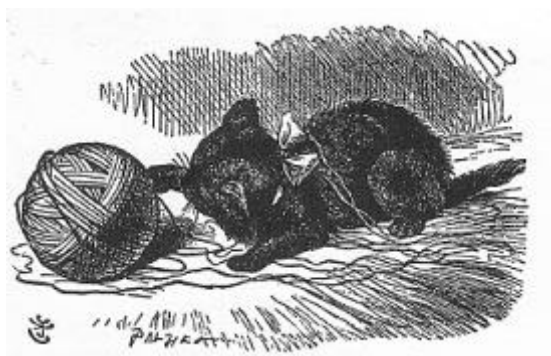
あわせた簡単なチャイム

そのこだまがいまも記憶中に生きる

ねたむ月日が「忘れよ」と言おうとも

第1章 鏡のおうち

一つ確実なのは、白い子ネコはなんの関係もなかったということ：——もうなにもかも、黒い子ネコのせいだったのです。というのも、白い子ネコは年寄りネコに、もう四半時も顔を洗ってもらっていたからです（そしてその状況を考えれば、なかなかがんばって耐えていたと言えましょう）。というわけで、白い子ネコはどう考えてもいたずらにはまったく荷担していなかったのはわかるでしょう。



ダイナはこんなふうにして子どもたちの顔を洗ったのでした：まずかわいそうな子を耳のところで前足片方を使っておさえこみ、そして残った前足で、子どもの顔中をこすります。それも鼻からはじめて変な方向に。そしてちょうどいま、ぼくがこうして話している間にも、ダイナはいっしょうけんめい白い子ネコを片づけています。白い子ネコはほとんど身動きせずに、のどをならそうとしていました——これもみんな自分のためを思っただけのことなんだ、というのを感じていたのはまちがいありません。

でも黒い子ネコは、午後の早い時期に顔を洗ってもらったので、アリスが半分ぶつぶつ、半分眠りながら、大きなソファのすみに丸まっている間に、アリスが巻いておこうとした毛糸の玉とせいだいにじゃれて、あちこちころがしてまわり、やがて毛糸玉はぜんぶほどけてしまいました。おかげで毛糸玉はこの通り、暖炉前のじゅうたんいちめん広がって、そこらじゅうに結び目ができたりからまったりして、そのまん中で子ネコが自分のしっぽを追いかけているのでした。

「まあこのいたずらっ子め！」とアリスはさげんで子ネコを抱え上げ、ちょっとキスをして、しかられているんだとわからせてあげました。「まったく、ダイナがもっとちゃんとしつけてくれないと！ そうでしょ、ダイナ、わかってるわよね！」とアリスはつけくわえながら、非難がましい目つきで年寄りネコのほうをながめて、できるだけきびしい声を出そうとします——それから子ネコと毛糸を持ってソファにかけもどり、また毛糸を巻きはじめました。でも、あまり手早くはありません。というのもときには子ネコに向かって、ときには自分に向かって、ずっとしゃべりどおしだったからです。子ネコちゃんはとてもとりすましてアリスのひざにすわり、毛糸を巻くすすみ具



合を見ているふりをしつつ、ときどき前足を片方出して毛糸玉に軽くさわり、できるものなら喜んでお手伝いするところですが、とでも言うようです。

「明日がなんの日か知ってる、子ネコちゃん？ あたしといっしょに窓のところにいたら、見当ついたと思うけど——でもダイナにきれいにしてもらってたから、窓は見られなかったのよね。男の子たちがたき火用に棒を集めるのを見てたのよ——それで棒がいっぱい集まってね！ ただ、すごく寒くなってきて、しかもいっぱい雪もふって、それでみんな途中でやめちゃったの。でも別にいいわ、子ネコちゃん。たき火は明日いっしょに見に行きましょう」ここでアリスは、毛糸を二、三回子ネコの首に巻きつけました。どんな風に見えるか試してみたかっただけなのですが、これは大騒動になって、おかげで毛糸玉は床に転がり落ちて、何ヤード分もの毛糸がまたほどけてしまい

ました。

「わかってるの、子ネコちゃん」とアリスは、両者がもういちど気持ちよくソファにおさまると同時に口を開きます。「おまえのやってたいたずらを見て、あたしはもうホントに腹がたって、もうちょっとで窓をあけて、おまえを雪のなかに放り出すところだったのよ！　そしてそれは自業自得^{じごうじとく}ってもんよ、このいたずらっ子のおちびちゃんめ！　なにかいいわけはあるの？　さ、だまってるのよ！」とアリスは人差し指をたてて見せます。

「おまえのやったいけないことを全部教えてあげますからね。その一：今朝、ダイナがおまえの顔を洗ってるときに、二回鳴いたわね。ごまかしてもだめよ、子ネコちゃん。ちゃんと聞いてたんですからね！　え？　なんですって？」（と子ネコが口をきいたふりをします）「ダイナの前足が目に入ったんだもん、ですって？　ふん、それはおまえのせいですよ、目を開けてるほうが悪い！　しっかり閉じていれば、そんなことにはならなかったはずでしょ。さ、いいわけはおよし。聴いてなさい！　その二：あたしがスノードロップの前にミルクのお皿をおいたとたんに、スノードロップのしっぽをひっぱってどかせたわね？　なに、のどがかわいてた、ですって？　あの子だっのどがかわいてたかもしれないでしょうに。そしてその三：ちょっとよそ見をしてるうちに、毛糸をぜーんぶほどいちゃったじゃない！

これでおいたが三つよ、子ネコちゃん、そしてまだそのどれについても罰を受けてないでしょう。あたし、おまえの罰は、水曜の週までぜーんぶためてあるのよ——あたしの罰もそうやってためてあったらどうだろ」とアリスは、子ネコよりは自分に向かってしゃべりつづけました。

「そうになったら、年末にはいったいぜんたいどんな目にあわされるかな。その日がきたら、牢屋に入れられちゃうかもしれないぞ。それとも——うーんとそうだな——かりにその罰がみんな、晩ごはんぬきになることだったとしたら：するとその悲惨な日がきたら、あたしは一度に五十回の晩ごはん抜きになるってことか！　うん、それならそんなには気にならないわ。そんなに食べるよりは、ぬきにしてもらったほうがずっといいもん！

ねえ、窓にあたる雪の音がきこえてる？　すごくすてきでやわらかい音よね！　だれかが窓一面、外からキスしてるみたい。雪って、木や野原が大好きなのかな、だってすごく優しくキスするでしょう。それで、白いキルトでしっかりくるみこんじゃうわよね。それで「さあいい子だから、夏がくるまでおやすみ」とか言うのかも。それで夏がきてみんな目をさますと、全身を緑で着飾ってそこらじゅうで踊るの——風がふくところどこでも——うん、それってすごくきれい！」とアリスは叫んで、手を叩いたひょうしに毛糸玉を落としてしまいました。

「これがホントに本当だったらいいのに！　だって森は確かに、葉っぱが茶色くなる秋には眠そうに見えるもん。

ねえ子ネコちゃん、おまえ、チェスはできる？　こら、笑うんじゃない。まじめにきいてるんですからね。だってさっきチェスをしてたら、おまえ、いかにもわかるような顔して見てたじゃない

の。そしてあたしが『王手!(チェック!)』って言ったら、鳴いたでしょ! ええ、たしかにうまい王手だったし、もうちょっとで勝つところだったんだけど、あの意地悪なナイトがこっちの駒の間をぬってやってきたもんだから。子ネコちゃん、ごっこ遊びをしましょうよ!」

そしてここで、アリスがこの「ごっこ遊びをしましょうよ!」というお気に入りのせりふを皮切りに言いだすことの半分でも、みなさんに話せたらと思います。すぐ前の日にも、お姉さんとかなり長いこと言い合いになりました——それというのもアリスが「ごっこ遊びをしましょうよ、お姉ちゃんとあたしで、王さまたちと女王さまたちになるの」と言い出したからで、そのお姉さんはなんでも正確なのが好きだったので、それは無理だ、二人しかいないのにそんなたくさんにはなれない、と言ったからで、言い争ったあげく、ついにアリスがゆずってこう言いました。「わかった。じゃあお姉ちゃんにはだれか一人になればいいわよ。残りはぜんぶあたしになるから」。そして一度なんかアリスは、こんなことを言って年寄りの乳母さんを本当にこわがらせたものでした。「乳母さん! ねえ、ごっこ遊びをしましょうよ! あたしがおなかのへったハイエナになって、乳母さんは骨ね!」

が、子ネコ相手のアリスの話からちょっと脱線しましたね。「ごっこ遊びをしましょう! あなたが赤の女王さまよ、子ネコちゃん! 知ってる? あなたがちゃんと起きあがって腕組みしたら、赤の女王さまそっくりになると思うのよ。さ、やってごらんなさいな、いい子だから!」そしてアリスはテーブルから赤の女王をとって、子ネコの前に見本として置きました。でも、うまくいきません。アリスに言わせると、それは子ネコがちゃんと腕組みしないからだそうです。そこで罰として、アリスはネコを鏡の前に持ち上げて、そのむくれぶりを自分で見られるようにしてやりました——「そしておまえがすぐにいい子にならなかったら、向こうの鏡の国のおうちに入れちゃうぞ。それでもいいの? どう? さて、あなたがちゃんと聴いてるならね、子ネコちゃん、そしておしゃべりしないでいられたら、鏡のおうちについてのあたしの考えを、ぜんぶ話してあげますからね。まず鏡ごしに見えるお部屋があるでしょ——あれはうちの書斎とまるっきり同じだけど、でもなんでも逆になってるのね。いすに登ったら、全部見えるのよ——ただし暖炉の向こうのここ以外はだけど。あーあ、そこんとも見られたらいいのになぁ! 向こうにも冬には火が入ってるのか、すごく知りたいの。だってぜったいにわかんないんですもん、ただしこっちの火が煙をたてたら、向こうの部屋でも煙があがるけど——でもそれって、ふりをしてるだけかもしれないでしょ、火があるように見せかけてるだけで。それとね、本はこっちの本と似てるけど、でもことばが逆向きになってるの。知ってるんだ。だって、本を一冊鏡に向けてみたら、向こうでも一冊こっちに向けるんだもん。

鏡の国のおうちに住んでみたい? あっちだとミルクがもらえるかしらね。鏡の国のミルクはあんまりおいしくないかも——でも、あら! ちょうど廊下のどこまでやってきましたよ。鏡の国のおうちでは、ほんのちょっとだけ廊下をのぞけるのよね、書斎のドアを思いっきり開いておくど。

それで、見えるはんいではこっちの廊下とそっくりなんだけど、でもその向こうはぜんぜんちがうかも。鏡の国のおうちのほうに、ぬけられたらホントに楽しいでしょうね、子ネコちゃん！ ねえ？ もうぜったいに、すごくきれいなものがあると思うんだ！



なんか通り抜ける道があるつもりになりましょうよ。ね、子ネコちゃん。鏡がガーゼみたいにふわふわになったつもりになって、通り抜けられることにしましょう。あらやだ、なんだか霧みたいなものになってきてるじゃない！ これなら簡単に通り抜けられるわ——」こう言うアリスは暖炉の上にあがっていたのですが、自分でもどうやってそこまであがったのか、よくわかりませんでした。そして確かに、鏡は本当に溶けだしていて、明るい銀色っぽい霧のようでした。

次のしゅんかん、アリスは鏡を通りぬけて、ピョンッと鏡の国の部屋に飛びおりていました。まっ先にやったのは、暖炉に火が入っているかを確かめることでした。そして、本物の火が、後にしてきた部屋と同じくらい明るく輝いているのを見て、アリスはととてもうれしく思いました。「これで前の部屋と同じくらいあったかでいられるわね。いえ、もっとあったかくいられるわ、だってここではだれも、火に近寄りすぎてるって叱る人はいないし。みんなが鏡ごしにこっちにいるあたしを見て、でもだれも捕まえられないの。楽しいだろうな！」



それからアリスはあたりを見まわし始めましたが、もとの部屋から見えたものは、ととても見なれたつまらないものばかりだけれど、それ以外の部分とはことんちがっているのがわかりました。たとえば暖炉のとなりのかべにかかった絵は、どれも生きているみたいで、暖炉の上のすぐそこに

ある時計だって（ごぞんじのように、鏡の中では裏っかわしか見えないよね）小さなおじいさんの顔をしていて、アリスににやっとしてみせます。

「こっちのお部屋は、むこうのほど片づいてないのね」とアリスは思いました。炉端に燃えがらがころがって、そこにチェスの駒がいくつか転がっていたのが見えたからです。でも次のしゅんかん、「あら！」というオドロキの声とともに、アリスはよつんばいになってそれを見つめていました。チェスの駒が、それぞれ対になってうろうろ歩いているのです！

「こっちには赤の^キ王さまと赤の^ク女王さまね」とアリスは言いました（ただしこわがらせるといけないので、ひそひそ声でね）。「そしてあっちには白の^キ王さまと白の^ク女王さまが、シャベルのはしにすわってるわ——こっちではキャッスル二つがうでを組んで歩いてるし——どうもあたしのこと、聞こえないみたい」と、もっと頭を近くまで下げました。「それに、あたしが見えないのはまちがいなさそう。どうも目に見えなくなった感じ——」



そのとき何かがアリスの背後のテーブルでキイキイ声をあげはじめました。ふりかえるとちょうど、白のポーンが転がって足をバタバタさせだすところでした。これからどうなるんだろうと、ア

リスはわくわくしながらながめています。

「わが子の声がする！」と白の女王さまは叫んで王さまの横をすごい勢いでかけぬけます。それが勢いよすぎて、女王さまは灰の中につきたおされてしまいました。「かわいいリリーちゃんや！高貴な子ネコちゃんや！」そして女王さまは、猛然と暖炉の囲いをよじのぼりだしました。

「高貴だかホウキだか知らんが！」と女王さまは、たおれたときにぶつけた鼻をさすっています。まあちょっとは女王さまに腹をたてるのも仕方ないでしょう。だって王さまは頭のとっぺんからつま先まで、灰まみれになっちゃっていたのですから。

ぜひともお手伝いしたかったし、それにかわいそうなリリーちゃんが、ひきつけを起こしそうなほど泣き叫んでいたもので、アリスはいそいで女王さまをつまみあげると、テーブルの上のそういった赤ちゃん娘の横に置いてあげました。

女王さまは息をのんで腰をぬかしてしまいました。空中を高速で移動したので、息がつけなくなって、しばらくはだまってリリーちゃんを抱きしめるばかりです。ちょっと息がつけると、女王さまはすぐに、まだ灰の中でふくれっつらをしてすわっている白の女王さまに呼びかけました。「火山にご注意を！」

「火山ってなんじゃ？」と王さまはいっしょうけんめい暖炉の炎をのぞきこみます。そこがいちばん火山の見つかりそうな場所だとでも言うように。

「わたし――を――噴きとばし――た――やつ」と女王さまは、まだ息をきらししていて、あえぎながら言いました。「気をつけて――ふつうに上がってらして――噴きとばされないで！」

アリスは、格子を一本ずつ苦勞しながら登っていく白の王さまをながめていましたが、とうとうこう言いました。「まあ、そんな速さじゃテーブルにたどりつくまで、何時間かかるかわかりやしない。あたしがお手伝いしたほうがずっといいわ、よね？」でも王さまはこの質問にぜんぜん反応しません。王さまにはアリスが見えもしないし聞こえもしないのは、もうはっきりしていました。



そこでアリスは王さまを、とってもそっとつまみあげて、女王さまを持ち上げたときよりもゆっくりと運んであげました。あまり目を白黒させずにすむようにしてあげたからです。でも、テーブルに置く前に、ついでだからちょっとほこりをはらってあげよう、と思いました。すごく灰まみれだったからです。

あとでアリスが話してくれたところでは、王さまは自分が目に見えない手で空中に持ち上げられて、ほこりを払われているときの王さまの顔つきといったら、生まれてこのかた

見たこともないようなものだったそうです。

叫びだすにはびっくりしすぎていましたが、

目と口がどんどんあんぐりしてきて、どんどんまん丸くなっていった、アリスは笑って手がふるえてしまい、王さまをあやうく床に落としてしまうところでした。

「まあおねがいだから、そんな顔しないでちょうだい！」とアリスは、王さまに聞こえないのも忘れて大声で言ってしまいました。「笑いすぎて、落としちゃいそうだわ！ それと、口をそんなにあんぐり開けないの！ 灰がぜんぶ入っちゃうじゃない——よーし、これでなんとかきれいになったかな」とアリスは、王さまの髪をなでつけて、テーブルの女王さまの横に置いてあげました。

王さまはすぐに背中からたおれこんで、まるで身動きせずに横たわっています。そしてアリスは、自分のしでかしたことにちょっと驚いて、王さまにかけの水がないか、部屋の中をさがしまわりました。でも、インキのビンしか見つかりません。そしてそれを持って戻ってきたら、もう王さまは回復したようで、女王さまとおびえたささやき声で話をしていました——ひそひそすぎて、アリスにもほとんど聞き取れないくらいです。

王さまはこう言っていました。「いやまったく、わしはまちがいなく、ヒゲの先の先っぽまで凍りつく思いであったぞ！」

答えて女王さまいわく「あなた、ひげなんかございませんでしょうに」

王さまはつづけます。「あのしゅんかんの恐怖といったら、わしゃ決して、決して忘れやせんぞ！」

「でも忘れますとも、ちゃんとメモっておかないと」と女王さま。

アリスが興味津々で見ていると、王さまはすごくでっかいメモ帳をポケットから取り出して、書きはじめました。アリスはパッとひらめいて、王さまの肩ごしにかなりつきだしていた鉛筆のはしっこをつかまえると、王さまのかわりに書きはじめました。

かわいそうな王さまは、合点がいかないようすであまりうれしそうではありません。しばらく何も言わずに、鉛筆と格闘していました。が、アリスが王さまよりも強すぎたので、ついに王さまは息がきれてしまいました。「おまえ、わしゃどうあっても、もっと細い鉛筆を手に入れんと。こいつはまるっきり言うことをきかん。わしの思ってもいらないようなことをやたらに書きよる——」



「というとうとうたぐいのこと？」と女
王さまは帳面をのぞきこみました（そこにア
リスが書いたのは「白の騎士^{ナイト}が火かき棒をすべりおりています。バランスを取るのがとっても下手
です」だった）。「これはあなたの気持ちのメモじゃありませんわね！」

テーブルの上、アリスのすぐ近くには本がころがっていました。そして白の王^{キング}さまをすわってな
がめながら（というのも、まだちょっとは王さまのことが心配で、また気絶したときのために、す
ぐにでもインキをかけられるようにはしてあったから）、アリスはページをめくって読めるところ
をさがしてみました。「——だって、ぜんぶあたしの知らないへんなことばで書いてあるんだもん」
とアリスはつぶやきます。

こんな具合でした。

一ナツホウハヤシ

なつはまやち木」にる鏡、朝るき葉おれき
更るて庭園の森業アコに心静
ひま樹ち」さじやのさイハエに
更るぬちおはてヌイ露風

アリスはしばらく首をかしげてしまいましたが、やっとひらめきました。「あ、そうか。もちろ
んこれ、鏡の国の本なのよ！ だから鏡に映してあげたら、ことばがまたちゃんとして見えるはず」
アリスが読んだのは、こんな詩でした。

ジャバウオッキー

それは煮そろ時、俊るりしオモゲマたちが
幅かりにて環繰り軀振する頃
ボショバトたちのみじらしさ極まり
居漏トグラがほさめる頃

「息子よ、ジャバーウオックに用心せい！
噛みつく顎^{あご}に、つかむ爪！
呪侮^{ジュブ}呪撫鳥にも警戒を、して
おそかなき犯駄^{ぼんだ}酔那^{すなち}智をも避けよ！」

男子、ねれたる妖剣を手にとり

かねてより追い求めし恨^{こんずい}髓の敵――
 そして男子は凡^ぼ鼓^この木の傍らで休み
 しばし回想しつつ立ちつくす。

そしてけそかき思いにふけるうちに
 炎の瞳のジャバーウォック
 憂騒たる森中よりのそり出で
 呆^{ほうごう}拷^{おそ}しつつ襲^{おそ}むる！

一撃二撃！　ぐさり、またぐさり
 ねれたる刃が舞い踊る！
 男子そやつを屠^{ほふ}り頭を取りて
 闊^{かっぱたいしょう}歩^お大笑して騎ち帰る。

「してジャバーウォックを仕留めたか？
 ほくれし息子よ、わが腕にまいれ！
 嗚呼ゆるばしき日かな！　億歳！　兆歳！」
 父は喜びに高笑い。

それは煮^にそろ時^じ、俊^{しゅん}るりしオモゲマたちが
 幅^{はく}かりにて環^{わん}繰^くり軀^く振^{ねん}する頃
 ポショバトたちのみじらしさ極^{きく}まり
 居^い漏^ろトグラがほさめる頃

「すごくきれい、みたい」と読み終わったアリスは言いました。「でもちょっとわかりにくいけど！」（ほら、アリスは自分自身にむかってでも、いまの詩がまるっきりわからなかったと白状するのはいやだったわけね。）「なぜだか、いろんな考えで頭がいっぱいになるんだけど――でもそれがなんだか、どうもわかんないわ！　だけど、だれかが、なにかを殺したのよ。それだけは、なにはともあれはっきりしてるわ――」

「あ、でもそうだ！」とアリスは急に気がついて飛び上がりました。「急がないと、家のほかのところはどうなってるか見ないうちに、鏡を通して戻らなきゃなんなくなる！　まずはお庭を見てみようっと！」アリスはいっしゅんで部屋を出ると、階段をかけ下りました――というか、まあ正確には走っておりたわけじゃなくて、階段を急いで簡単におりる、新発明のやり方よね、とアリス



は自分でも思いました。指の先っぼだけを手すりにつけて、階段に足でふれさえしないで、ふわふわ静かにおりていったわけです。それからふわふわと廊下をぬけて、そのままドアを出てしまいそうになったところを、入り口の手すりに捕まっておさえます。宙に浮いてばかりいて、ちょっとくらくらしてきたところだったので、またふつうに歩けるようになってアリスはかなりホッとしました。

第2章 生きた花のお庭

「お庭を見るんなら、あの丘のてっぺんにいったほうが、ずっとよく見えるはずだわ。そして丘のてっぺんにまっすぐ向かう道がある——少なくとも、いいえ、まっすぐしてないわ——」（何メートルか道沿いに歩くと、急なかどをいくつか曲がることになりました）「でもいずれ着くはずだけど。でもずいぶんと変にクネクネした道だわ！ 道というより、コルク抜きみたい！ よかった、このかどを曲がれば丘の方にいくはず——ではなかった！ 家のほうにまっすぐ戻っちゃうじゃないの！ ふん、だったら反対方向を試してみよう」

というわけで試してみました。いったりきたりさまよい、次から次へとかどを曲がって、でも何をやっても、必ず家に戻ってきてしまいます。なにせ一回なんか、かどをいつもより勢いよく曲がったら、そのまま止まる間もなく家につっこみそうになったほどです。

「いいえ、議論してもむだよ」とアリスは家を見あげて、それと口論しているふりをしてきました。「まだまだ中に戻る気はありませんからね。そしたらまた鏡を通して戻らなきゃいけないって——もとの部屋に戻って——そしたら冒険もすべておしまいだわ！」

というわけで、アリスは決然と家に背を向けて、まともや道を進みはじめ、とにかく丘につくまでまっすぐ進もうと決めました。数分はまったく思い通りにことが運びます。そしてアリスがちょうど「こんどこそいけるわ——」とつぶやいたとたん、道が急にくねって揺さぶりがかかって（とアリスは後になって表現しました）、次のしゅんかんには気がつく、まさにドアから家に入るところでした。

「あらあら、どうしましょう。こんなに通せんぼばかりする家は見たことない！ 一度も！」とアリスは叫びます。

それでも、丘は目の前にそびえていますし、ですからまた歩き出す以外にどうしようもなかったのです。こんどのアリスは、大きな花壇にやってきました。ふちにはヒナギクが植わり、まん中には柳の木が生えています。

「ああオニユリさん」とアリスは、優雅に風にそよいでいるオニユリに話しかけました。「あなたが話せたらどんなにいいでしょう！」

するとオニユリが言いました。「話せるわよ、まわりに話す値打ちのある人がいればね」アリスは驚きすぎて、しばらく口がきけませんでした。まったく意外で、息をのむしかなかったのです。ずいぶんたって、オニユリがそよいでいるだけだったので、アリスはまた口を開きました——おず



おずと、ほとんどささやくように。「じゃあ、花はみんなしゃべれるの？」

「あなたなみにはね。それにずっと大きな声が出せるな」とオニユリ。

「こっちから話しかけるのも失礼でしょう、ねえ？」とバラが言います。「あたしも、あんたがいつになったらしゃべりだすか、待ってたのよ！ 『あの子、ちょっとは道理をわきまえてそうじゃない、あんまり賢くはないみたいだけど』って思っってえ。でも色はそこそこまともだし、それって結構きくでしょう」

「色はどうでもいいけど、花びらをもうちょっとカールさせたら、ずっとよくなるわよね、この子は」とオニユリもしました。

アリスはあれこれ品定めされるのがいやだったので、こちらから質問をすることにしました。

「こんなところに植わって、だれにもめんどろ見てももらえないで、ときどきこわくなったりしませんか？」

「まん中に木があるでしょうに。あれがなんのためにいると思ってんの？」とバラ。

「でもなにか危険が迫っても、木に何ができるの？」とアリスはたずねます。

「『木をつくれー』って言うにきまってるでしょ！ だから木って言うんじゃないのよ！」とヒナギクが叫びました。

「そんなことも知らなかったの？」と別のヒナギクが叫び、そこでヒナギクどもはいっせいに叫びだしまして、空中が小さな金切り声まみれになったかのようでした。「おだまんなさい、あんたたちみんな！」とオニユリは、顔をまっ赤にして身を左右にゆすり、興奮でふるえています。「こっちが捕まえられないのを知ってるもんだから！」と、オニユリは息をきらして、ふるえる頭をアリスのほうにまげます。「さもなきゃ、絶対にあんな口はきけないはずよ！」

「ご心配なく！」とアリスはさわやかに言うと、またもやししゃべりだしたヒナギクの上に身をかがめてささやきました。「だまんないと、摘んじゅうわよ！」

いっしゅんであたりは静まり、ピンクのヒナギクがいくつかあおざめました。

「そうそう！」とオニユリ。「ヒナギクがいちばんたち悪いわ。一人がしゃべると、みんないっせいに口を開いて、まあそれがべちゃくちゃ続くの聞いているだけで、こっちがしおれそうになっちゃうわ」

「どうしてみなさん、そんなにすてきにしゃべれるの？」アリスはお世辞を言って、なんとかオニユリのご機嫌をとろうとしました。「これまでいろいろお庭には行ったけど、でもしゃべる花なんて一つもなかったわ」

「手をおろして、地面をさわってごらん。そうすればわかるわよ」とオニユリ。

アリスは言われたとおりにしました。「すごくかたいけど。でもなんの関係があるんだか、ぜんぜんわかんないけど」

オニユリが答えます。「ほかのお庭だとふつうはね、花壇をやわらかくしすぎるのよ——だから花がいつも眠っちゃってるわけ」

これはとてもよい理由に思えたので、アリスはそれがわかってとてもうれしく思いました。「まあ、そんなこと、これまで考えたこともなかった！」

「あたしに言わせりゃ、あんたこれまでどころか、まるっきり考えたりできないのよね」とバラがいささかトゲトゲしい調子で言いました。

「そんなまぬけそうな人は見たこともない」とスマレが言いまして、それが実にいきなりだったもので、アリスは文字通りとびあがりました。スマレはこれまでだまっていたからです。

「ちょっとあんた！　だまんなさいよ！」とオニユリが言います。「あんたがだれを見たことあるって言うのよ！　いつも葉っぱの下に頭を隠して、グウグウ寝てばかりで、つぼみの頃からこの

世で何が起きてるのかぜんぜんわかってないじゃないのよ！」アリスはバラの最後の発言を気にしないことにしました。「このお庭に、あたし以外の人がいるの？」

「あんたみたいに、うろうろできる花がもう一人いるわ。あんたたちがどうやってんのか、不思議だけど——」（「あんた不思議がってばかりね」とオニユリ）、「でもそっちのほうが、あんたよりボサボサしてるけど」

「あたしに似てるの？」とアリスは熱心にたずねました。「このお庭のどこかに、女の子がもう一人いるのね！」とふと思ったからです。

「そうね、形はあんたと同じでへんてこだけど、でも色はもっと赤いし——それに花びらももっと短かったはず」とバラ。

「彼女の花びらはもっときっちりまとまってるわ、ほとんどダリヤみたいね」とオニユリが割りこみます。「少なくともあなたのやつみたいに、バサバサになってはいないわね」

「でも、それはあんたのせいじゃないわよ」とバラが親切そうにつけくわえてくれました。「あんた、しほみかけてるからね——そうになったら、花びらにちょっと張りがなくなってしまうわねえ」

アリスはそんなのぜんぜん気に入りませんでしたので、話を変えようとしてきいてみました。「その人、ここに出てきたりするの？」

「まちがいなくもうじき会えるわよ。トゲっぽい種類の人だわね」とバラ。

「トゲって、どこにトゲがあるの？」アリスは不思議に思っていました。

「どこって、頭のまわりにぐるっとよ、決まってるじゃない」とバラが答えます。「あんたはどうしてないのかなって、不思議に思ってたところだったのよ。あるのがふつうだと思ってたわ」

ヒエンソウが叫びました。「いまくるわ！ 足音がきこえる。ズン、ズン、ズンって、砂利道をやってくるわ！」

アリスは熱心にあたりを見まわして、それが赤の女王さまだと気がつきました。「ずいぶんと大きくなったものねえ！」というのが彼女のまっ先に口走ったことでした。確かに女王さまは大きくなっていました。アリスが灰の中で女王さまを見たときには、身の丈ほんの十センチほど——ところがいまの女王さまは、アリス自身より頭半分だけ背が高いくらいです！

「新鮮な空気のおかげよ。こうして外に出ると、空気がすばらしくいいから」とバラが言います。

「ちょっとお目にかかってこようと」とアリスは言いました。花とおしゃべりするのもおもしろかったのですが、本物の女王さまとお話しするほうが、ずっとすごいと思ったからです。

「それは絶対に無理よ」とバラが言います。「あたしなら反対方向に歩くよう忠告しますがね」

これはまったくのナンセンスにしか聞こえなかったもので、アリスは何も言わずに、すぐに赤の女王さまに会いにでかけました。びっくりしたことに、いっしゅんで女王さまを見失ってしまい、気がつくともたもや玄関を入ろうとしているところでした。

ちょっとムツとしてアリスは身をひくと、あちこち女王さまをさがしまわって（やっと見つけた女王さまはずいぶんと遠くにおりました）、こんどはちょっと策を練って、反対方向に歩いてみようと思ったのです。

これは見事に成功しました。ほんの一分かそこら歩いただけで、赤の女王さまと鉢合わせすることになりました。さらに、さっきからいっしょうけんめい行こうとしていた丘もすぐそこです。

「おまえ、どこからきた？」と赤の女王さま。「どこへ行くつもりだえ？ はい、背筋のぼして、はきはきしゃべって、指をそんなもじもじさせるんじゃない！」

アリスはこうした言いつけをすべて守り、なんとかかんとか、自分の行き先がわからなくなったことを説明しました。

「自分の行き先とは、何を申しておるのやら」と女王さま。「この行き先はすべて、このわらわのものなんだからね——でも、そもそもなんだってこんなところへ出てきたのかえ？」と、ちょっとやさしい口調でつけくわえます。「何を言うか考えてる間に会釈をなさい、時間の節約になるから」

これにはアリスもちょっと考えこみました。でも女王さまのご威光におされて、信じないわけにはいきませんでした。「おうちへ帰ったらやってみようっと。晩ごはんにちょっと遅くなったりしたときに使えそうだわ」

「さ、おまえの答える時間だよ」と女王さまは時計を見ながら言いました。「しゃべるときには、もうちょっと口を大きく開けて、それと必ず『陛下』と言うように」

「お庭がどんなふうか見たかっただけなんです、陛下——」

「そうそう、よくできました」と女王さまは、アリスの頭をなでましたが、アリスはそれがまるで気に入りませんでした。「とはいえ、『お庭』と言うけど——わらわが見た庭に比べたら、あんなものただの野原じゃがの」

アリスはこんなことでわざわざ議論するつもりはありませんでした。「——それで、あの丘のてっぺんに行こうかなと思ひまして——」

女王が割りこみます。「『丘』と言っても、このわらわが見せてやれる丘に比べたら、あんなのは谷と呼ぶしかない代物じゃがの」

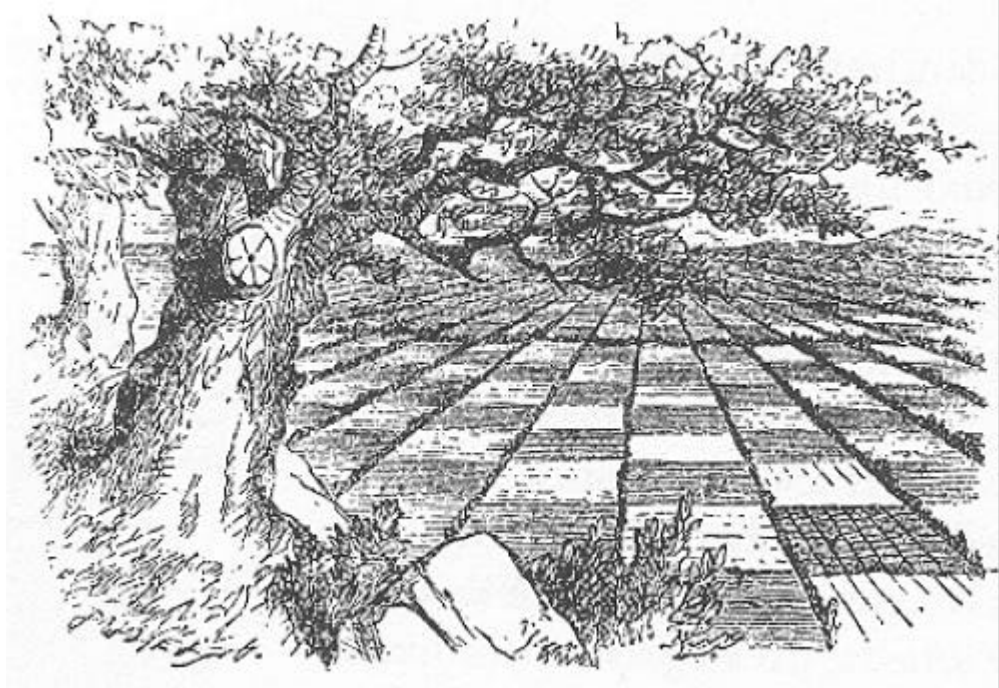


「そんなバカな」とアリスは、びっくりしすぎてつい反論してしまいました。「丘はどうやって谷にはなれませんもの。そんなのナンセンスで——」

赤の女王さまは首をふります。「『ナンセンス』と呼ぶのは勝手だがね、このわらわがきいたナンセンスに比べれば、さっきのなんか辞書なみに正論であるぞ！」

アリスはまた会釈しました。女王さまの口ぶりから、どうもちょっとは機嫌をそこねたらしいな、とこわかったからです。そして二人はだまって歩き続けて、あの小さな丘のてっぺんにたどりつきました。

しばらくの間、アリスは何も言わずに立って、この国の四方八方を見渡していました——そしてそれは、なんとともへんてこな国ではありました。左右にまっすぐ、小さな小川がたくさん走っていて、小川の間の地面は、緑の茂みがいくつか小川から小川へと続いて、正方形に区切られています。



「これって絶対、おっきなチェス盤みたいに仕切られてるわよね！」とアリスはやっと言いました。「駒がどこかで動いてそうなものだわ——ほーらあそこにいるじゃない！」とアリスは大喜びで付け加え、そしてしゃべりながらもわくわくしてきて、心臓がドキドキしてきます。「すごくおっきなチェスの試合をやってるんだわ——世界中で——もしこれがそもそも世界ならの話だけだね。すごく楽しいじゃない？ ああ、あたしもあの中の一人だったらなあ！ 試合に入れるなら、ポーンでもいいや——でももちろん、女王さまになれるものなら、それがいちばんいいですけど」

そういいながら、アリスはちょっともじもじして、本物の女王さまのほうをチラリと見ましたが、

連れはにこやかに笑ってこう言っただけでした。「それくらいならおやすいご用だとも。おまえさえよければ、白の女王のポーンになるといい、リリーはまだ試合には小さすぎるから。そしておまえは、そもそも二升目にいるわけだね。八升目についたら、おまえも女王^{クイーン}になれる——」まさにそのしゅんかんに、二人は走りだしました。

あとから考えてみても、どうやってそれが始まったのか、アリスにはさっぱりわかりませんでした。おもいだせるのは、二人が手をつないで走っていて、女王さまがすごい勢いだったもので、アリスはついていくのがやっとだったことだけです。そしてそれでも女王さまはたえず「もっと速く！ もっと！」と叫びつづけて、でもアリスは、絶対にこれ以上は速く走れないと思い、でも息をきらしすぎていて、そんなことが口にだせる状態ではありませんでした。

なかでもいちばん不思議だったのは、木やまわりのその他のものが、まったく場所を変えなかったことです。どんなに速く走っても、なにも通り過ぎたりしないようでした。「ほかのものも、あたしたちといっしょに動いてるのかしら？」とかわいそうな混乱したアリスは思いました。そして女王さまはアリスの考えていることが見当ついたようです。「もっと速く！ 口をきこうとするんじゃない！」と叫んだからです。

アリスとしても、口をきくつもりはまるっきりありません。とにかく息がきれてきて、もう二度としゃべれないんじゃないかと思ったくらいです。そしてそれなのに女王さまは「もっと速く！ もっと！」と叫びつづけて、アリスを引きずっていきます。「もうそろそろ着く頃でしょうか？」とアリスは、やっとの思いでぜいぜいと言いました。

「そろそろ、だと！」と女王さまが繰り返します。「そんなとこ、もう十分も前に通り過ぎたよ！ もっと速く！」そして二人はしばらくだまって走り続け、アリスの耳では風がうなり、ほとんど髪が吹き飛ばされそうだと、アリスは思いました。

「さあさあ、もっと速く！ もっと！」と女王さまがさけび、二人はあまりに速く走ったので、最後はまるで宙を切るように進んでいて、足がほとんど地面につかない感じです。そして急に、ちょうどアリスが疲れきってしまった頃に二人は泊まり、アリスは地面にすわりこんで、息をきらしてクラクラしていました。

女王さまがアリスを木にもたれさせてくれます。「さあ、ちょっと休んでよろしい」と親切そうに言います。

アリスはあたりを見まわして、おどろいてしまいました。「まあ、まるでずっとこの木の下にいたみたいだわ！ なにもかももとのまま！」

「もちろんそうだとも。ほかになりようがあるとでも？」と女王さま。

アリスは、まだちょっと息をきらしていましたが、答えました。「ええ、わたくしどもの国では、ふつうはどこかよそにたどりつくんです——もしいまのわたしたちみたいに、すごく速く長いこと走ってたら」



「グズな国だね！ ここではだね、同じ場所にとどまるだけで、もう必死で走らなきゃいけないんだよ。そしてどっかよそに行くつもりなら、せめてその倍の速さで走らないとね！」

「それは遠慮したいです、後生ですから！」とアリス。「ここにいられば十分満足ですから——ただ、確かにすごく暑くてのどがかわいちゃって！」

「それなら気に入るはずのものがあぞえ！」と女王さまはとても親切そうに言って、ポケットから小さなはこを取り出しました。「ビスケットをいかが？」

アリスは、ことわるのも失礼だわと思いましたが、でもそんなものがほしいとは、まるで思いませんでした。そこでそれをもらって、できるだけ食べようと思いました。それはすさまじく乾燥していきまして、だから生まれて初めてというくらい、のどにつまって窒息^{ちっそく}しそうになったほどです。

「おまえがそうやって一息ついておる間に、わらわはちょっと寸法を採るとしようかね」と女王さま。そしてインチごとに印がついたリボンをポケットから取りだして、地面を測りはじめ、あちこちに小さなペグを差しこみはじめました。

「二ヤードのおしまいにきたら」と女王さまは、ペグをさして距離をしるします。「道順を教えてください——ビスケットをもう一ついかが？」

「いえ、結構です。一つでもうじゅうぶんです！」

「のどの乾きはおさまったであろうが？」と女王さま。

アリスはどう答えていいかわかりませんでした。ありがたいことに女王さまはこちらの返事をまたずに、しゃべりつづけました。「三ヤード目の終わりにきたら、わらわはそれまでのを繰り返

すでしょう——おまえが忘れるといけないからね。そして四の終わりでは、ごきげんようを言おうぞ。それから五の終わりでは、わらわは去る！」

この頃には女王さまも、ペグをぜんぶ差しこみ終わって、その女王さまが木のところに戻ってくるのを、アリスは興味津々で見守りました。女王さまは、ゆっくりとペグの列にそって歩きだします。

二ヤードのペグまでくると、女王さまはふりかえってこう言いました。「ポーンは最初に動くときだけは二駒進めるのは知ってるね。だから、三升目はとっても高速に通り抜けることになる——たぶん鉄道を使うことになるはずだよ——そしてあっという間に四升目だ。その升は、トゥードルダムとトゥードルディーの升だね——五番目はほとんど水で——六番目はハンプティ・ダンプティのものだね——でもおまえ、ウンとかスンとか言ったらどうだえ？」

「あ——あの、言わなきゃいけないとはぞんじませんで——いんですか？」アリスはまだ息をきらしています。

「おまえはね、『まあいろいろ教えてくださいまして、まことにありがとうございます』と言うべきではあったんじゃが——が、まあ言ったことにしておいてやろう——七升目は森ばかりだね——でも騎士が道案内してくれるじゃろ——そして八升目ではわれらとともに女王になって、そうしたらずっと宴会で楽しかろうて！」アリスは立ちあがって会釈をすると、また腰をおろしました。

次のペグで女王さまはまたふりかえり、こんどはこう言いました。「なにかを指すことばがわからなくなったら、フランス語でしゃべってみるように——歩く時は、内股になってはいけません——そして自分がだれだか忘れないこと！」女王さまは、こんどはアリスが会釈するのを待たず、急いで次のペグまで進むと、いっしゅんだけ振り返って「ごきげんよう」と言ってから、最後のペグに急ぎました。

それがどういうふうにかかったのか、アリスにはまるでわかりませんでした。最後のペグのところにきたちょうどそのしゅんかん、女王さまはいなくなっていました。空中にかき消えたのか、それともすごい速さで森にかけ込んだのか（「確かに、すごく走るのが速いのは事実ですもんねえ」とアリスは思いました）、かいかも見当もつきませんでした。とにかく、女王さまは姿を消し、そしてアリスは自分がポーンで、そろそろ動く順番だということを思いだしはじめたのでした。

第3章 鏡の国の昆虫たち

もちろん真っ先にやったのは、これから旅する国をおおざっぱに見渡すことでした。「地理のお勉強ととってもよく似てるわよね」とアリスは、もうちょっと遠くまで見ようとして、つま先立ちになりました。「主要な河川——ぜんぜんなし。主要な山——あたしが立ってるのが唯一の山だけけれど、でも別に名前はないさそうだし。主要な街——あらあら、下でハチミツを集めてるあの生き物、いったいぜんたいなんだろう？ どう見てもハチじゃないわ——一キロ先から見えるハチなんていないもんね——」そしてしばらくアリスはだまって立ったまま、花の中を飛び回っているその生き物の一匹をながめていました。吸い口を花につっこんだりしています。「まるでふつうのハチみたい」とアリスは思いました。

でも、これはどう見てもふつうのハチなんかじゃありませんでした。むしろ、ゾウでした——アリスもじきにこれがわかりましたが、でも気がついて思わず息をのんでしまいました。「じゃああのお花って、すさまじい大きさにちがいないわ！」とアリスは続いて思いました。「小屋の屋根をとっばらって、くきをくっつけたみたいなの——それに、ハチミツの量もすごいはずよ！ ちょっと下りてってみようかしら——いえ、いまはダメだわ」と、いまにも丘を駆け下りそうになった自分を制します。そして、急にしりごみしたので、なんとかいいわけを考えようと思いました。「追い払うのに、すごく長い枝がないと、あんなのの中に行けないわよね——そしてみんなが、散歩はいかがでしたと聞いたら、すごく楽しいだろうな。こう言うの——『ああ、まあまあでしたわ——』」（そしてここでお気に入りの、頭をちょっとはねあげるポーズ）『『ただいささかほこりっぽくて暑かったのと、それにゾウにいっぱいたかられちゃったのがどうも！』』

しばらく考えてからアリスは言いました。「反対側におりようっと。ゾウはあとで訪ねてみてもいいし。それに、三升目に行きたくてたまらないもの！」

そしてこの口実で、アリスは丘をかけおりて、最初の小川六本を飛び越えたのでした。

*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*

「きっぷ拝見！」と車掌が、まどから頭をつっこんで言いました。すぐさまみんな、きっぷを出していました。きっぷは人間ほども大きくて、車両がそれだけでいっぱいになりそうです。



「さあさあおじょうちゃん、きっぷを見せるんだよ！」と車掌がつづけ、怒ったようにアリスのほうを見ます。そしてすごくたくさんの声がいっせいにこう言いました（「歌のコーラスみたいだわ」とアリスは思いました）、「おじょうちゃん、車掌さんを待たせちゃダメよ！ 車掌さんの時間はお値打ち一分千ポンド！」

「すみません、ないんですけど」とアリスはおびえた声で言いました。「あたしがきたところには、きっぷ売り場がなかったんです」そしてまたもや声のコーラスがはじまります。「この子がきたところには、余裕がなかったのよ。あそこの土地は、お値打ち一ミリ千ポンド！」

「いいわけするんじゃない」と車掌さん。「機関手から買えばよかっただろうが」そしてまたもや声のコーラスが始まりました。「機関車を運転する人だよ。なんと、煙だけでもお値打ち一雲千ポンド！」

アリスは「しゃべってもしょうがないわ」と思いました。声はこんどはコーラスしませんでした。アリスがしゃべらなかったからです。でもすごくおどろいたことに、みんなコーラスで考えたのです（「コーラスで考える」というのがどういう意味か、わかってもらえるといいんだけど——というのも白状しちゃうと、このぼくはさっぱりわからないんだもの）「なににも言わないほうがいい。ことばは一言千ポンド！」

「今夜は千ポンドの夢を見そう、絶対！」とアリスは思いました。

この間ずっと、車掌さんはアリスをながめていました。最初は望遠鏡を使って、それから顕微鏡を使って、それから双眼鏡を使って。とうとう車掌さんは言いました。「旅行の方向がまちがってるぞ」そして窓を閉めて、あっちに行ってしまうしました。

「こんなに小さな子供なんだから、自分の名前がわからなくても、行く方向くらいは知らないダメだね！」と向かいにすわった紳士（白い紙の服を着ています）が言いました。

白い服の紳士のとなりにすわっていたヤギが、目を閉じて大声でいいました。「ABC が暗唱でできなくたって、きっぷ売り場への道くらいは知ってないとダメだね！」

ヤギのとなりには、カナブンがすわっていました（総じて、なかなか風変わりな乗客ばかりいっぱい集まった客車でした）。そしてどうやら、みんな順番にしゃべるとというのが規則のようで、そのカナブンが先を続けます。「この子は、ここから貨物扱いで戻ってもらわんとダメだね」

カナブンの向こうにだれがすわっているのか、アリスには見えませんでしたけれど、次に聞こえてきた声はずいぶん狼狽したようすです。「機関車を換えて——」と言って、そのままとぎれてしまいました。

「ロバみたいな声ね」とアリスは思いました。すると耳元で、とっても小さな声が聞こえました。「いまのでじゃれができるかもね——『ロバ』の『^{ろうばい}狼狽」、でね」

すると遠くのほうで、とてもやさしい声が言いました。「その子には『小娘、取り扱い注意』のラベルをつけないといけませんわ——」

そしてそのあと、次々に声がつづきます（「この客車って、ずいぶんたくさん人が乗ってるのねえ！」とアリスは思いました）。「指先でも切手もらって、郵便で送ったら——」「電信で、電報扱いで送らないと——」「この先、その子に列車を牽かせないと——」などなど。

でも白い紙の服の紳士が身をのりだして、アリスの耳にささやきます。「みんながあれこれ言うのは気にしなさんな、おじょうちゃん。でも電車が止まるたびに、戻りのきっぷを買うこと」

「そんなことするもんですか！」とアリスはちょっとプリプリして言いました。「あたしはそもそもこの鉄道旅行には入ってないのよ——さっきまで森の中にいたんだから——できたらそこに戻るつもりよ」

またさっきの小さな声が耳元で言います。「いまのもじゃれにできるよね。森に戻るつもり、なんちて」

「そんなにからかわないで」アリスは声がどこからきているのか、あたりを見回しましたが、何も見あたりません。「そんなにじゃれが好きなら、自分で言えばいいじゃない！」

小さな声がすごく深いため息をつきました。明らかにとっても不幸で、アリスとしても何かなぐさめるようなことを言ったでしょう「ただし他の人みたいにため息をついてくればね！」とアリスは思いました。でもそれは実に見事に小さなため息だったので、ごく耳元からきたのでなければ、完全に聞きのがしていたでしょう。その結果として何がおきたかということ、耳をすごくくす

ぐって、そのせいでかわいそうな生き物の不幸のことを、アリスはすっかり忘れてしまったのでした。

小さな声が続けます。「きみは友だちだよ。だいたい友だち、昔からの友だち。そしてぼくをいぢめたりしないよね、ぼくが昆虫にはちがいなくても」

「昆虫って、どんな昆虫なの？」とアリスはちょっと心配そうにたずねました。実はほんとうに知りたかったのは、それが刺す昆虫かどうかだったのですが、そうきくのはちょっとお行儀が悪いかな、と思ったのです。

「え、だったらきみは——」と小さな声が言いかけたところで、機関車からの甲高いきしり音でかき消されてしまい、アリスも含め、みんなびくりにして飛び上がりました。

窓から首をつきだしたさっきのロバが、静かに頭を戻して言いました。「小川を飛び越えなきゃならないですよ」。みんな、これで納得したようでしたが、アリスはそもそも列車が飛ぶというだけで、ちょっと心配になりました。「でも、それで四升目に行けるわ、それだけはありがたいわね！」とアリスはつぶやきました。つぎのしゅんかん、客車が宙にまっすぐ飛び上がるのが感じられて、こわくなったアリスは、いちばん手近なものを握りしめました。それはヤギのひげでした。

*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*

でもさわったとたんにひげはとけてしまうようで、気がつくともアリスは木の下に静かにすわっているのです——一方でブヨ（これまで話をしていたのはこの昆虫だったのです）はアリスのすぐ上の小枝でバランスをとって、羽でアリスをあおいでいました。

たしかに、すごくおっきなブヨではありました。「ニワトリくらいあるわ」とアリスは思います。でも、いままでずっと話をしてきたもので、今さらこわくなったりもしませんでした。

「——だったらきみは、昆虫はみんなきらいなの？」とブヨは、なにごともしなかったかのように、静かにつぶやきました。

「しゃべれると昆虫も好きよ。あたしがきたところだと、話す昆虫なんかぜんぜんいないもん」

「どういう昆虫に熱狂するの、きみのきたところだと？」とブヨがたずねます。

「あたし、昆虫に熱狂したりはしないわよ。ちょっとこわいんだもの——特に大きいのは。でも、名前なら少しはわかるけど」とアリスは説明します。

「もちろん昆虫は、名前を呼ばれたら答えるんだよね？」とブヨはなにげなく言います。「あたしはそういうおぼえはないけど」

「呼ばれて答えないんなら、その子たちは名前なんかあってもしょうがないじゃないの」とブヨ。

「そりゃ昆虫には役に立たないだろうけど、でも名前をつけた人間には役にたつんだと思うな。だってそうでなきゃ、なぜそもそもいろんなものに名前なんかついてるのよ」とアリス。

「わかんない。それに、下の方の森では、名前がないんだよ——だけど昆虫の一覧を続けてよ。時間がもったいないし」

「そうねえ、まずウマバエでしょ」とアリスは指折り数えながら名前を挙げはじめました。

「はいはい、あの茂みの半ばくらいのところを見てもらえば、木馬ハエがいるでしょう。全身が木だけでできてて、枝から枝へギシギシ揺れながら動くんだよ」とブヨ。

「なにを食べてるの？」アリスは知りたくてたまりませんでした。

「樹液とおがくず。先を続けてよ」とブヨ。

アリスは木馬バエを興味津々で見上げました。ペンキ塗り立てみたいね、と思いました。色鮮やかでベタベタしてそうだったからです。でも、先を続けました。

「それと、ドラゴンフライね」

「頭の上の枝をみてごらん。スナップ・ドラゴンフライがいるでしょ。からだはプラム・プディングで、羽はヒイラギの葉っぱ、頭はブランデーの中で燃える干しぶどうだよ」¹

「それは何を食べるの？」

「小麦プリンとミートパイ。そして巣はクリスマスのプレゼントの箱の中につくるの」



「それと、黄斑チョウっていうのもいたな」

アリスは、頭の燃えている昆虫をよーくながめて、「昆虫が火に飛び込みたがるのって、このせいかしら——みんな、スナップ・ドラゴンフライになりたがってるのかも！」と思ってから続けました。

「きみの足下をはいずっているのが」（とブヨに言われて、アリスはあわてて足をひっこめました）「バタつきパンチョウね。羽は

薄いバタつきパンで、胴体が耳のところで、頭が角砂糖」

「それでこれはなにを食べてるの？」

「クリーム入りの薄い紅茶」

新しいなぞが、アリスの頭に浮かびました。「もしそれが見つからなかったら？」

¹ 訳注：すみません、これはイラストの都合もあって、別のだじゃれで置き換えるわけにいきませんでした。スナップドラゴンというのはですねえ、西洋のクリスマスの慣習で、ブランデーをお皿に入れて干しぶどうをそこにまいて火をつけて、それを指で取り出すという遊びでございます。

「そしたら死ぬよ、もちろん」

「でも、それってずいぶんよくありそうだけど」とアリスは考えこんで言いました。

「しょっちゅうだよ」とブヨ。

これをきいて、アリスはしばらくだまって考えこんでしまいました。ブヨはその間、退屈しのぎにアリスの頭のまわりをブンブン飛んでいます。最後にまた枝にとまって、こう言いました。「きみって、名前をなくしたりしたくないよね」

「いいえ、まさか」アリスはちょっと不安そうです。でも、ブヨは気軽な調子で続けました。

「うん、でもどんなもんだろうね。名無しで家に戻れたらすごく便利だと思わない？ たえば家庭教師が授業できみを呼びたくても、『始めますよ、――』と言って止めるしかなくて、だって家庭教師が呼べる名前もないし、そうなったらもちろんきみもいなくてすむわけでしょ」

「それじゃぜったいすまないわ、まちがいなく。先生はぜったいにそんなことで、授業をやめたりしないもの。あたしの名前が思い出せなければ、召使いたちを呼ぶときみたいに『ちょっと！』と言うだけよ」

「ふーん。でももし先生が『ちょっと！』とだけしか言わなかったら、もちろん授業もちょっとしか出なくていいんだよね。いまのはだじゃれだよ。きみが言ったんならよかったのに」

「どうしてあたしが言ったらよかったと思うわけ？ ずいぶん寒いじゃれなのに」

でもブヨは深いため息をつただけで、おっきな涙が二つ、ほっぺたを転がりおちてきました。

「そんなに不幸になるなら、だじゃれなんか言っちゃだめよ」とアリス。

そこにまた、あの憂鬱で小さなため息がきて、今回は哀れなブヨも、ため息で自分をはきだしきってしまったようです。アリスが目をあげると、小枝にはなにも目に入るものはなくて、アリスとしてもじっとすわりっぱなしでちょっと寒くなってきたので、立ち上がって歩き出しました。

じきに開けた野原にやってきました、その向こう側に森があります。さっきの森よりずいぶん暗くて、アリスとしてもそこに入っていくのはちょっとだけこわかったんですが、考え直して、森に入ることに決めました。「だって、絶対に戻るのはいやなもの」と思ったし、それに八升目につくには、これが唯一の方法でしたから。

「これが、名前のない森ね」とアリスは考えこみました。「入ったら、あたしの名前はどんなっちゃうんだろう。名前を全部なくしちゃうのはいやだな――そうになったら別の名前がつけられるだ



ろうし、どうせひどい名前になるに決まってるもの。でも、そうしたらあたしのもとの名前をもらった生き物を探すのはおもしろいだろうな！ 迷子の犬を探す広告とかみたいでしょう——『「ポチ」と呼ぶと答えます：しんちゅうの首輪つき』——だれかが返事するまで、会うものを片っ端から『アリス』と呼ぶのよ！ でも、賢ければ呼ばれても返事なんかしないと思うけど」

とかなんとか、いろいろぶつぶつ言っているうちに、森にやってきました。とてもうっそうとして涼しそうです。「なにはともあれ、とっても気持ちよさそうではあるわね」とアリスは木々の下に入りました。「こんなに暑かったところから、こんなひんやりした——ひんやりしたなんだっけ？」とアリスは、ことばが出てこないのにいささか驚いて続けました。「つまりひんやりした——この——この、これの下、なんだけど！」とアリスは、手を木の幹に触れました。「これって、なんて自称してるんだらう。まちがいなく、名前がないんだと思うわ——絶対まちがいなくないわ！」

アリスはしばらくだまって考えこみました。それから急にしゃべりだしました。「じゃあほんとうに起きたんだわ！ それじゃあ、あたしはだれ？ 思い出したいわ、思い出せるものなら！ 絶対がんばって思い出すわ」でもいくらがんばっても大した役にはたちません。そしてさんざん首をひねったあげくに、アリスがやっと言えたのはこれだけでした。『「リ」よ、ぜったいまちがいなく『リ』で始まったはず！』

ちょうど、子鹿がふらりとやってきました。おっきなやさしい目でアリスを見つめました。が、ぜんぜんこわがっていないようです。「おいで！ おいで！」とアリスは手をのばしてなでようとしてました。でもそれはちょっととびのいて、またじっと立ってアリスを見つめています。

「きみ、なんていうの？」子鹿はやっと言いました。とってもやわらかくて甘い声でした！

「それがわかればねえ！」とアリスは思いました。そして、ちょっと悲しそうにこう答えました。「いまはなににもないの」

「それじゃダメだよ。もっとよく考えて」とそれは言いました。

考えましたが、なににも浮かびません。アリスはおずおずとたずねます。「お願い、あなたは何ていうの、教えてよ。そしたらこっちも、思いだしやすくなるかも」

「もうちょっと先までいったら教えてあげる。ここでは思い出せないの」と子鹿。



そこで両者は、森の中をいっしょに歩いていきました。アリスは子鹿のやわらかい首に、愛しげに腕をまわしています。でもやがて、また開けた野原にやってきました。すると子鹿はとつぜん空中に飛び上がって、アリスの腕をふりほどきました。「ぼくは子鹿だ！」と喜びの声をあげます。「そして、わあどうしよう！ きみは人間の子供じゃないか！」その美しい茶色の目に、いきなり警戒の色が浮かんで、つぎのしゅんかんには全速力でかけ去ってしまいました。

アリスはそれを見送って立ちつくしていました。こんなに急に、愛しい小さな旅仲間を失って、ほとんど泣きそうです。「でも、もう自分の名前がわかるわ。それはちょっとは安心だな。アリス——アリス——もう二度とわすれないわ。さて、あの道しるべのどっちにしたがったらいいのかな？」

これはとっても答えやすい質問でした。森をぬける道は一つしかなかったし、二つの道しるべは、どっちも同じ方向を指していたからです。「道が分かれて、道しるべがそれぞれ別の方向を指すようになったら、かたがつくでしょう」とアリスはつぶやきました。

でも、どうやらそんなことにはならないようです。アリスはひたすら前進して、ずいぶん歩いたのですが、道が分かれるたびに道しるべが二つあって、どっちも同じ方向を指しているのです。一つは

トウィードルダムのおうち方面！

と書かれていて、もう一つは

トウィードルディーのおうち方面！

と書かれています。

「これってどう考えても、二人とも同じ家にすんでるんだわ！ どうしていままで思いつかなかったのかしら——でも長居するわけにはいかないわね。ちょっとって、『ごめんください』と言って、森から出る道をきくだけね。暗くなる前に八升目につかないと！」そこでアリスはさらにぶらぶらとすすみ、ぶつぶつ独り言を言っていたのですが、急な曲がり角を曲がると、ちびでデブな二人組に出くわしました。いきなり出くわしたので、思わず飛びのいてしまいましたが、次のしゅんかんには気を取りなおして、これぞまさしく——

第4章 トウィードルダムとトウィードル ディー

——にちがいない、と思いました¹。

二人は木の下に立って、おたがいに相手の首に腕をまわしております。どっちがどっちか、じきにわかりました。片方がえりに「ディー」とししゅうしてあって、もう片方は「ダム」とししゅうしてあったからです。「たぶん二人とも、えりのうしろ側に『トウィードル』って書いてあるんでしょうね」とアリスはつぶやきました。

二人とも、まるで動かなかったので、アリスは二人が生きていることを忘れて、二人ともえりの後ろに『トウィードル』って書いてあるかどうかを見に、後ろにまわろうとしたとき、「ダム」と書いてある方が声をたてて、アリスはびっくりしてしまいました。

「ぼくたちがロウ人形だと思うんなら、見物料を払いなさいよ。ロウ人形は無料で見るもんじゃない、如何様にも！」

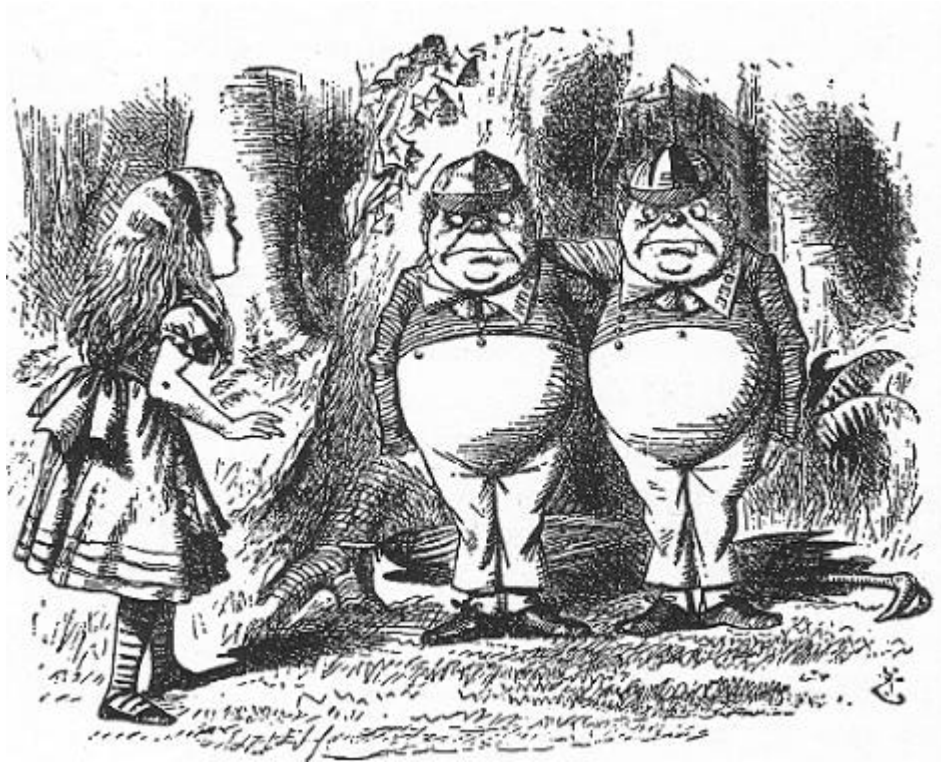
「対照的に、ぼくたちが生きてると思うんなら、なんとか言いなさいよ」と、「ディー」とついたほうがつけ加えました。

「ええ、ほんとに心からごめんなさいね」アリスはそう言うのがやっとでした。あの古い歌の歌詞が、カチカチ言う時計みたいに頭のなかで鳴り響いていて、ついそれを口に出してしまいそうだったからです：——

「トウィードルダムとトウィードルディー
決闘しようと取り決めたわけ
なぜってトウィードルダム曰くトウィードルディー
新品のすてきなガラガラを壊しめたわけ

ちょうどお化けガラスが舞い降りて
墨ツボみたいに真っ黒で
英雄たちはこわがって
口論もすっかり忘れましてさ」

¹訳注：ここ、前の章の最後の文から、章題まで含めて続けて読んだってや。



「きみが何を考えてるかわかるぞ、でもそれはそうじゃないんだぞ、如何様にも」とトウィードルダム。

「対照的に、そうであったなら、そうであったかもしれず、そしてそうであったとすれば、そうであろう。しかしそうでない以上、そうではあらぬのである。それが論理というもの」とトウィードルディーが続けます。

アリスはとってもていねいに申しました。「あたしが考えていたのは、森から出るのにどの道がいちばんいいかってことなんです。ずいぶん暗くなってきたし。お願いですから、教えていただけませんか？」

でも、小さな男たちは、顔を見合わせてニヤニヤするだけでした。

二人とも、まったくの大きな小学生二人組そっくりだったもので、アリスはついついトウィードルダムを指さして、「いちばーん！」と叫んでしまいました。

「如何様にも！」とトウィードルダムは短く叫んで、すぐにぴたりと口を閉ざしてしまいました。

「にばーん！」とアリスはトウィードルディーに移りましたが、どうせ「対照的！」と叫ぶだけに決まってるわ、と確信しておりまして、まさにその通りでした。

「ちがうだろう！」とトウィードルダムはわめきました。「人のところに訪ねてきたら、まっさきに言うのは『ごめんください』で、次に握手をするんだぞ！」そしてここで兄弟二人はお互いに

抱きあって、それからそれぞれ空いたほうの手をのばして、アリスと握手しようとしてしました。

アリスは、片方だけ先に握手するのはいやでした。残ったほうが気を悪くするかもしれないからです。そこでむずかしい状況をきりぬけるいちばんいい方法として、アリスは両方の手を同時ににぎりました。次のしゅんかん、みんなは輪になっておどっていたのです。これはとても自然に思えて（と後からアリスは思い出しました）、音楽が流れてきても、まるでおどろきませんでした。音楽はみんながおどっている頭上の木から流れてくるみたいで、どうも（アリスがなんとかつきとめた範囲では）枝がお互いにこすれあって音楽になっているみたいでした。バイオリンと、バイオリンの弓みたいな感じです。

「でも、ホントすごくおかしかったのよね」（とアリスはあとで、この一件すべてのおはなしをお姉さんにしているときに言いました。）「あたし、いきなり『かごめかごめ（HERE WE GO ROUND THE MULBERRY BUSH）』をうたってるんだもん。いつうたいはじめたのかはわかんないけど、でもずいぶん長いことうたってたような気がしたの！」

アリス以外の踊り手二人はでぶで、すぐに息をきらしてしまいました。「一回のおどりで四周もすればじゅうぶん」とトゥードルダムがぜいぜい言って、みんなははじまったときと同じくらい、いきなりおどりをやめました。音楽も、その同じしゅんかんに止まりました。

それから二人はアリスの手をはなしましたが、一分ほど立ったままアリスを見つめています。これはなかなかきまりの悪い間で、アリスとしても、たったいままでおどっていた人たちとどういふうに会話をきりだしていいのか、わかりませんでした、「いまさら『ごめんください』でもないわよねえ。なぜかもうそんな段階はすぎたみたい！」

「あまりお疲れじゃないといいんですけど？」とうとうアリスは言いました。

「如何様にも。それと、きいてくれてたいへんにありがとう」とトゥードルダム。

「実に感謝感激！」トゥードルディーがつけ加えました。「詩は好き？」

「え、ええ。まあなかなか——全部じゃないですけど」とアリスは、用心しながら言いました。「森から出る道はどっちな教えていただけませんか？」

「この子に何を暗唱してあげようか？」とトゥードルディーは、荘厳な目をぱっちりと開けてトゥードルダムのほうを見つめ、アリスの質問は無視しました。

「『セイウチと大工』がいちばん長いよ」とトゥードルダムが、兄弟を愛情こめて抱きしめながら答えました。

トゥードルディーはすぐに始めました。

「おひさまピカピカ海の上——

ここでアリスは、思い切って口をはさみました。できるだけいねいに申します。「あの、それってものすごく長いんでしたら、まずは森から出る道を教えていただいて——」

トゥードルディーはやさしくほほえむと、最初から暗唱しなおしました。

「お日さまピカピカ海の上
力の限り照らしてる
波浪をすべすベキラキラに
するため全力つくしてた——
でもこれってなんか変
いまは夜のど真中。

お月様、ぷんぷん照らしてる
だってお日さまが昼間のあとで
そこらをウロウロするなんて
ずいぶんでしゃばりと思ったから——
曰く『なんとも失礼なこと
のこのこじゃましにくるなんて！』

海はとことんびしょぬれで
砂はとことん乾いてた。
雲一つ見あたらず、それというのも
空には雲がなかったから：
頭上を飛ぶ鳥もなし——
そもそも飛ぶ鳥なんかいないから。

セイウチと大工が
肩を並べて歩いてた；
こんなにたくさんの砂を見て
二人はおいおい泣いていた：
『こいつさえきれいに掃除すりゃ
なんとも豪勢だろうになぁ！』

『女中七人にモップ七本
持たせて半年掃かせたら
きれいに片づけられると
思うかい』とたずねるセイウチに
『あやしいね』と大工は答え



辛苦の涙を流してる。

『おおカキ諸君、散歩しにおいで！』

とセイウチが差し招く。

『すてきな散歩、すてきな談笑

潮の浜辺に沿って

でも手を貸せるのは、

最高四匹までだよ』

最年長のカキ、セイウチをながめ

でも一言たりとも発しはしない。

最年長のカキはウィンクして

重い頭を横に振る――

カキ床を離れたり

する気はないよというつもり。

でも若いカキ四匹がいそいそと

大喜びで招待に応じ:

コートにブラシ、顔も洗い

くつもきれいにきっちりと――

でもこれってなんか変
だってカキには足がない。

さらにカキが四匹つづき

そしてさらにまた四匹

そして群がりあわててみんなきた

そして次、次、もっと次――

みんな泡立つ波からピョンピョンと

岸辺めがけて押し寄せる。



セイウチと大工は

一マイルほど歩いてから

具合良く低い

石の上にこしかけた:

そしてかわいいカキたちみんな

そこに並んで待っていた。

セイウチいわく『さあいろんなことを話し合う

ときがついにやってきた:
くつだの——ふねだの——封蠟や
王さま——はたまたキャベツなど——
あるいは煮え立つ海の謎——
またはブタの翼の有無』

『でもちょっと待ってよ』とカキたち叫ぶ
『みんなでおしゃべりする前に;
息をきらした子もいるし
ぼくたちみんな、デブちんだ!』
『あわてることはないよ』と大工。
みんなこれには感謝した。

『パンが一斤』とセイウチ曰く
『それがもっぱら必要だ:
さらにはコショウと酢もあれば
それはなおさら好都合——
さあ親愛なるカキくんたちよ
よければ食事を始めよう』

『でもまさかぼくたちを』と叫ぶカキくんたちは、
みんなちょっと青ざめる、
『こんなに親切にしてくれたのに
それはなんともあんまりだ!』
『見事な夜だ』とセイウチが言う
『なんともすてきなながめじゃないか』

『出てきてくれてありがとう
なんとも優しい子たちだね!』
大工の答はただ一言
「パンをもう一切れ頼む:
そんな上の空はやめてほしいね——
二度も三度も言わせるな!』

『こんなペテンをするなんて
これはなんとも恥ずかしい』とセイウチ。

『こんな遠くに連れ出して
あんなに急いで歩かせて！』

大工の答はただ一言
『バターを厚く塗りすぎた！』

『かわいそうなきみたち』とセイウチ、

『心底同情してあげる』

セイウチ、嗚咽と涙に隠れつつ
選ぶはいちばん大きいカキばかり
ポケットからのハンカチで
涙流れる目を隠しつつ。



『おおカキ諸君』と大工が呼びかける。

『なかなか楽しい道中だった！
ぼちぼち帰るとしようかね？』
でもこれに対する返事なし――

そしてこれってどこが変？
だって一つ残らず腹の中」

「あたし、セイウチがいちばん好きだな。だってあわれなカキたちのこと、ちょっとはかわいそうと思ってあげたでしょ」とアリス。

「でも、大工よりもいっぱい食べたんだよ。ハンカチを口にあてて、いくつ食べたかを大工に数えられないようにして。対照的に」とトウィードルディー。

「それ、ひどいわ！　じゃあやっぱり大工がいちばん好き——セイウチほどたくさん食べなかったんなら」とアリスは憤然として言いました。

「でも大工だって食べられるだけ食べたんだよ」とトウィードルダム。

これは悩ましい問題でした。しばらく考えこんでからアリスは口を開きました。「まったく！　どっちもずいぶんといやな連中で——」ここでアリスは、ビクッとしてあたりを見まわしました。ちかくの森から、おっきな^{じょうきかんしゃ}蒸気機関車の音みたいなものが聞こえてきたからです。アリスは、たぶん野獣じゃないかしらと思ったわけです。「このあたりって、ライオンとかトラとかいるのかしら？」アリスはびくびくしてたずねました。

「ありゃただの赤の^{きんぐ}王さまのいびき」とトウィードルディー。

「おいで、ごらんよ！」と兄弟たちは叫んで、それぞれがアリスの手を一つずつにぎると、王さまの眠っているところまでつれてきました。

「なんて美しい姿だろうと思わない？」とトウィードルダム。

アリスとしては、これに心底賛成はできませんでした。長い赤いナイトキャップをかぶって、王杓を持ち、みっともない山みたいに丸まってねっころがり、大いびきをかいているのです——それもトウィードルダムが言ったように「頭がはずれそうなくらいの大いびき」です。

「湿った草の上に寝てるなんて、カゼひいちゃうんじゃないかしら」アリスはとても配慮のいきとどいた女の子だったので、こう申しました。

「夢を見てるんだよ。それで、なんの夢を見てると思う？」とトウィードルディー。

アリスは答えます。「そんなのだれにもわかんないわ」

「いやあ、きみのことだよ！」とトウィードルディーは、勝ち誇った



ように手を叩きながら叫びました。「そして王さまがきみのことを夢見るのをやめちゃったら、きみはどうなっちゃうと思う？」

「別にいまのままここにいていいわよ、もちろん」とアリス。

「きみはちがうね！」とトウィードルディーがバカにしたように切り返します。「きみはどこにもいなくなっちゃうんだよ。だってきみなんか、王さまの夢の中にしかないモノじゃないか！」

「あそこにいるあの王さまが目を見ましたら、きみは——ボーン！——ロウソクみたいに消えちゃうんだよ！」とトウィードルダムがつけくわえます。

「消えるわけないでしょ！」アリスは怒って叫びました。「それにもしあたしが王さまの夢の中にしかないモノなら、そういうあなたたちはなんなのか、ぜひとも知りたいもんだわ！」

「それはこっちのせりふ。知りたいのはこっちだよ！」とトウィードルダム。

「こっちのせりふ、こっちのせりふ」とトウィードルディーも叫びます。

その叫び声がすごく大きくて、アリスはつい言ってしまいました。「シーッ！ そんなに大声でしたら、王さまが目を見まっちゃうでしょう」

「ま、きみが王さまを起こすの起こさないの言ってもしょうがないよ。きみなんて、王さまの夢に出てくるものの一つでしかないんだもん。自分だって、自分がほんものじゃないのはよくわかってるんだろ」とトウィードルダム。

「あたし、ほんものだもん！」とアリスは泣き出しました。

「泣いたって、ちっともほんものになれるわけじゃなし。泣くことないだろ」とトウィードルディー。

「もしあたしがほんものじゃないなら」——アリスは泣きながら半分笑ってました。なんともめっちゃくちゃな話だと思って——「泣いたりできないはずでしょう」

「それがほんものの涙だとも思ってるんじゃないだろうねえ」とトウィードルダムが、すごくバカにした調子で口をはさみます。

「でたらめ言ってるに決まってるわよね。こんなことで泣いてもしょうがないわ」とアリスは思いました。そこで涙をぬぐって、なるべく元気な声で言いました。「とにかくあたし、そろそろ森から出たほうがいいわ。だってすごく暗くなってきたでしょう。雨が降るのかしら、どう思います？」

トウィードルダムは、おっきな傘^{かさ}を自分と兄弟の上にひろげて、それを見あげました。「ううん、降らないと思うよ。少なくとも——この下では。如何様にも」

「でもその外なら降るかもしれないでしょ？」

「かもね——雨の気分しだいで」とトウィードルディー。「ぼくらとしては異議なし。対照的に」

「身勝手な連中ね！」とアリスは思い、まさに「おやすみなさい」と言って二人を後にしようと思ったときに、トウィードルダムが傘^{かさ}の下からとびだして、アリスのうでをつかみました。そして「あれが見えるか？」と、気持ちがたかぶってのどがつまったような声で申します。同時に、目を

いっしゅんでおっきく黄色くしながら、木の下にころがっている小さな白いものを、ふるえる指で示します。

アリスは、その小さな白いものを慎重に調べてから申しました。「ただのガラガラ²よ。ガラガラヘビじゃないからね」と、トゥードルダムがこわがっているのかと思って、あわててつけ加えます。「ただの古いガラガラよ——すごく古いし、こわれてるし」

「そうじゃないかと思ったんだ！」とトゥードルダムは叫んで、足を踏みならし、もうれつに髪の毛をかきむしりだしました。「もちろん壊れてるよな！」そしてここでトゥードルディーのほうをにらみつけます。トゥードルディーは、すぐにすわりこんで、かさの下に隠れようとした。



アリスはトゥードルダムのうでに手をのせて、なだめるように申しました。「古いガラガラのこと、そんなに怒らなくてもいいじゃないの」

「でも古くないんだもん！」とトゥードルダムは、前にも増して怒りくるって叫びました。「新品なんだよ——きのう買ったばっかなんだもん！——ぼくの新品のガラガラが!!」ここで声は完全な金切り声になりました。

²訳注：この「ガラガラ」というのは、赤ちゃんのあのガラガラではなくて、イギリスのサッカーの応援団なんかがよく使う、ふりまわすとギイギイ鳴るあの道具のことであるのだよ。あれは日本語でなんてゆーんだ？

この間ずっとトウィードルディーは、いっしょうけんめいかさをたたんで、自分もその中にたたみこまれようとしていました。これは実に不思議なことだったので、アリスは怒っている兄弟のことをつい忘れてしまいました。でも、さすがのトウィードルディーも、これはうまくいかずに、結局はかさにからまったままころんでしまい、頭だけがつきだすかっこうになりました。そしてそうやって転がったまま、口をばくばく、目をばちくりさせています。「なんというか、魚以外のなにものでもないわよね」とアリスは思いました。「もちろん決闘するのには合意するよな？」とトウィードルダムはもっと落ち着いた調子で申しました。

「まあ仕方ないか」と相方は、かさからゴソゴソ這いだしながら、不機嫌そうに申します。「でも、この子が着付けをてつだってくれないとね」

というわけで兄弟二人は、手に手をとって森の中へと向かい、しばらくしてから腕いっぱいにくたをかかえて戻ってきました——たとえばクッションや毛布、じゅうたんやテーブルクロス、お皿のカバーや石炭ばけつなど。「ピン留めとかひもを結んだりとか、じょうずだといいいんだけど。これ全部、一つ残らずなんとかしてつけてもらわないと」とトウィードルダム。

あとでアリスの話によると、ほかのどんなことについてだって、これほどの大騒ぎなんか見たことない、とのこと——二人ともあーだこーだと文句ばかり——そしてこの二人が身につけたがらくたの量ときたら——さらに、ひもをむすんだりボタンをとめたりするので、すさまじく手がかかるのです——「いやあ、もうなんというか、二人とも準備が整う頃には、古着のかたまりとしか言いようがなくなっちゃうはずだわ!」とアリスは、トウィードルディーの首に石炭入れをゆわえてあげながら思いました。「頭を斬り落とされないようにするんだ」とは当人の言。そして、重々しくこうつけ加えます。

「知ってるかい、これは決闘で起こり得るいちばん深刻な事態なんだよ——頭を斬り落とされるってのは」

アリスは大笑いしてしまいましたが、機嫌を損ねないように、なんとかごまかして咳きこんだふりをしました。

「ぼくってすごく蒼ざめてる？」とトウィードルダムが、ヘルメットのひもをしばってもらいにきて言います（ヘルメットと呼んではいましたが、それはどう見てもソース用のおなべにずっと似ていました。）

「ええ——まあ——その、ちょっとだけね」アリスは優しく答えます。

「ぼくはいつもはとっても勇敢なんだ。でも、きょうに限っては、たまたま頭痛がしてるんでね」とトウィードルダムは声を落としてつぶやきます。

「ぼくなんか歯が痛いんだぞ! ぼくのほうがおまえより不利なんだからな!」とトウィードルディーが、いまのせりふをもれ聞いてもうします。

「じゃあ、二人ともきょうは闘わないほうがいいわよ」とアリスは、争いをおさめるいい機会だ



と書いていました。

「でもちょっとくらいは闘わないと。そんなに長くやんなくてもいいけど。いま何時？」とトゥードルダム。

トゥードルディーは時計を見ました。「四時半」

「六時まで闘って、それから晩ごはんにしよう」とトゥードルダム。

「しかたないか」と相方は、いささか悲しそうに言いました。「そしてこの子は見るといい——でも、あんまり近くにきちゃダメだよ」とつけ加えます。「ぼくは目に入ったものには、片っ端から斬りつけちゃうからね——すごく興奮してきたときには」

「そしてぼくは届く範囲のものならなんでも斬りつけるんだぞ、見えようと見えまいと！」とトゥードルダムがどなります。

アリスは笑いました。「だったら二人とも木にしょっちゅう斬りつけるってことになりそうね」

トゥードルダムは、満足そうな笑顔であたりを見まわしました。「ぼくたちが戦い終える頃には、見渡す限り一面、立っている木は一本もないであろうぞ！」

「ガラガラ一つでそこまでやるの？」アリスは、こんなつまらないことで闘うなんて、ちょっとは恥ずかしいと思わせられるんじゃないか、とまだ思っていました。

「あれが新品でさえなければ、ぼくだってこんなに気にしなかったんだけど」とトウィードルダム。

「お化けガラスが出てきてくれないかなあ！」とアリスは思います。

「剣は一本しかないなあ。でもおまえは^{かさ}傘を使っていいよ——かなり鋭いしね。でも、はやいところはじめよう。とことん暗くなってきたるし」とトウィードルダムが兄弟に言います。

「とことんよりも暗いよ」とトウィードルディー。

すごく急に暗くなってきたので、アリスは雷雨がやってきたんだと思ったほどです。「すごく濃い黒雲だわ！ それもすごいきおい！ まあどうみても翼が生えてるじゃない！」

「あのカラスだ！」とトウィードルダムが警告の金切り声をあげまして、兄弟二人はあっという間にしっぽを巻いて姿を消してしまいました。

アリスはちょっと森の中にかげこんで、おっきな木の下で止まりました。「ここならぜったいつかまらないわ。おっきすぎて、木の中にまで入ってこられないもの。でも、あんなにはでに羽ばたかないでくれればいいのに——森の中に、すごい嵐が起きたみたい——ほら、だれかのショールがとばされてきたわ！」

第5章 ウールと水

そう言いながらアリスはショールをつかまえて、持ち主はだれかな、とあたりを見まわしました。次のしゅんかん、白の女王^{クイーン}が森を猛然と駆け抜けてきました。まるで飛んでいるかのように、両腕を左右に大きくひろげています。アリスは、とっても礼儀正しく、ショールをもって女王^{クイーン}さまに会いにでかけました。

「ちょうど飛んできたところにいられて光栄でしたわ」とアリスは、女王^{クイーン}さまがショールを着るのをてつだってあげながら言いました。

白の女王^{クイーン}は、とほうにくれたような、おびえたような感じでアリスのほうを見つめただけで、なにか小声でブツブツくりかえすばかりです。どうも「パタつきパン、パタつきパン」と言ってるみたいです。会話をしたければ、こっちから始めるしかないな、とアリスは思いました。そこでちょっとおずおずと切り出してみました。「あの、白の女王^{クイーン}さまとお見受けしますが、相違^{そおい}ございませんよね？」

「ええ、まあ確かにこの装^{よそお}いは、ないも同然ですわね。わたくしとしてもこんなの、装^{よそお}いになってないとは思いますよ」と女王さま。

アリスは、会話を切り出したとたんに口論をはじめても仕方ないと思いましたから、にっこりしてつづけました。「陛下、どこから手をつけるのをお望みかおっしゃっていただければ、できる限りのことはしてさしあげますけれど」

「でもわたくしは、ぜんぜんしてほしくなんかございませんですよ」とかわいそうな女王さまはうめきます。「わたくし、自分で過去二時間にわたって、着付けをし続けてきたんでございますから」

アリスの目から見ると、だれか別の人に着付けをしてもらったほうがずっとましなようでした。女王^{クイーン}さまは、まったくどうしようもなくひどい身なりなのです。「なにもかもひんまがってるし」とアリスは思いました。「それにピンまみれ！——ショールをまっすぐにしてさしあげましょうか？」最後のところは声に出して申しました。「まったくこのショール、どこがおかしいのやらぜんぜん」と女王さまは、ゆううつそうな声で申します。「えらくご機嫌ななめでございましてねえ。あっちもこっちもピンでとめてやったのに、ぜんぜん言うことをきいてくれやしないんですの！」

「まっすぐなれって言っても無理ですよ、こんなピンを片側だけでとめたら」と言いながらアリスは、やさしくそれをちゃんと整えてあげました。「それと、あらまあ、髪の毛もひどいことに

なってますね！」

「ブラシがからまってしまいましたし、それにくしは昨日なくしてしまったんでございますものだから」と女王^{クイーン}さまはため息をつきます。



アリスは注意してブラシをはずし、せいっぱい髪をきちんとしてあげました。そして、ピンをほとんど全部動かしました。「さあ、これでかなりよくなりましたよ！でも、ホントに着付け係のメイドを雇われたほうがいいですよ」

「あなたなら喜んで雇ってさしあげますけれど！ お手当は、週に二ペンスと、一日おきにジャムですわよ」と女王さま。

アリスはつつい笑ってしまいました。「いいえ、遠慮させていただきます——それにジャムもいりませんし」

「とっても上等のジャムなんですよ」と女王^{クイーン}さま。

「ええ、でもどのみちきょうはジャムはほしくないですし」

「ほしくても、もらえやしませんよ。ジャムは明日と昨日——でも今

日は絶対にジャムなし。それがルールでございますからね」と女王さま。

「でもいつかは今日のジャムになるはずでしょう」とアリスは反論します。

「いいえ、なりませんね。ジャムは一日おきですからね。今日だと、一日おいてないでしょうに」

「よくわかんないです。とてつもなくややこしくて！」とアリス。

「逆回して生きてるとそうなっちゃうんですよ」と女王さまは優しく申します。「最初はみんな、ちょっとクラクラするみたいで——」

アリスは驚きのあまり繰り返しました。「逆回しに生きる！ そんなの聞いたこともないわ！」

「——でも大きな利点の一つあって、それは記憶が両方向に働くってことなんでございますよ」

「あたしのはぜったいに一方向にしか働きませんけど。何か起きる前にそれを思いだしたりは

できないから」とアリスは申します。

「うしろにしか働かないなんて、ずいぶんと貧弱な記憶でございますわねえ」と女王さま。

「じゃあ陛下は、どんなことをいちばんよく覚えてらっしゃるんですか？」アリスはあえてたずねました。

「ああ、再来週に起こったことですわねえ」と女王さまはあたりまえのように申しました。そして、おっきな絆創膏ばんそうこうをゆびに巻きつけながら続けます。「たとえばいまなんか、王さまの伝令のことか。牢屋に入れられて、罰を受けているんでございますよ。裁判は来週の水曜まで始まらないし、もちろん犯罪はいちばん最後にくるし」

「でも、その人が結局犯罪をしなかったら？」とアリス。

「それは実に結構なことではございませんの、ねえそうでございますしょう？」と女王は、ゆびの絆創膏^{ばんそうこう}をリボンでしばりました。

アリスとしては、確かにそれは否定できないな、と思いました。「確かにそれは結構なことかもしれないけれど、でもその人が罰を受けたのは、ちっとも結構じゃないと思う」

「なにはともあれ、それは大まちがい。あなた、罰を受けたことは？」と女王さま。

「悪いことをしたときだけ」とアリス。

「そして罰を受けて、いい子におなりになったわけでしょう！」と女王さまは勝ち誇ったように言います。

「ええ、そうですけれど、でも罰を受けるようなことを最初にやったわけじゃないですか。ぜんぜん話がちがいますよ」とアリス。

「でも、そういうことをやっていなかったなら、もっとよろしかったわけですよねえ。ねええ！もっとずっとよろしかったですよねええええ！」女王さまの声は、「ねえ」と言うごとにかん



高くなって、最後はキイキイ声にまでなってしまいました。

アリスは「それってどっかおかしい——」と言いかけてましたが、そのとき女王さまがすさまじい叫び声をあげだして、中断するしかありませんでした。「あいたたた、いたたた、いたた！」と女王さまは叫びながら、手を振り落としたいかのように、猛然とふっています。「指から血が出てる！いたたたた、いたたた、あいたたた、いたた！」

その金切り声は、蒸気機関車の汽笛そっくりで、アリスは両手で耳をふさいでしまいました。そして、口をはさめる間ができるとすぐに言いました。

「いったいぜんたいどうしちゃったんですか？ 指を刺したんですか？」

「まださしてはおりませんことよ。でももうすぐ——いたたた、あいたた、いたた！」

「いつ刺すつもりなんですか」とききながらもアリスはついつい笑い出したい気分でした。

女王さまはうめきます。「こんどショールを止めるときですよ。ブローチがポロッとはずれるんでございます。あら、あらら！」そう言う間にブローチがパチンとはずれて、女王さまはあわててそれをつかみ、とめなおそうとしました。

「気をつけて！ 持ち方が曲がってます！」とアリスは叫びながらブローチのほうに手を伸ばしました。でも手遅れです。ピンがずれて、女王さまは指を刺してしまいました。

「いまののおかげで血が出たわけでございますわね。これでここでの物事の起こり方がおわかりになったでしょう」と女王さまはにっこりしました。

「でも、どうしていま叫ばないんですか？」アリスは耳をふさごうと、手をあげたままききました。

「だって、叫ぶのはさっきたっぷりやったじゃござませんの。いまさらやりなおすこともありませんでしょう」と女王さま。

そろそろ明るくなってきました。「カラスは飛んでっちゃったみたいですね。行っちゃってくて、ホントにうれしいな。夜になってきたのかと思った」とアリス。

「わたしもそんなふうにうれしくなれたらよいんでございますけどねえ！」と女王さま。「でも、やりかたを失念してしまったものでして。あなたはこの森に住んで、好きなときにうれしくなれて、さぞかし幸せなんでございましょうねえ！」

「でも、ここはとてもすごくさびしいんです」とアリスはゆううつな声で言いました。そしてひとりぼっちなのを考えると、おっきな涙が二つ、ほっぺたをつたって流れ落ちました。

「あらあら、ちょっとおよしなさいって！」とあわれな女王さまは、困り果てて手をもじもじさせます。「自分がどんなにえらい子か、考えてごらんなさいな。きょう、どれほど遠くまできたか考えてごらんなさいな。いま何時か考えてごらんなさいな。なんでもいいから考えてごらんなさいな、なんでもいいから、とにかく泣くのはおよしなさいって！」

アリスは泣きながらも、これには笑わずにはいられませんでした。「陛下は、ものを考えると泣

かずにいられるんですか？」

「それがやり方なんですよ」と女王さまは、すごく確信をこめて申しました。「二つのことを同時にできる人はいませんからね。じゃあまず、あなたの歳から考えてみましょうか——あなた、おいくつ？」

「ちょうど七歳半です」

「『ちょうど』はなくてよろしい。それがなくても、十分に信じられますよ。さて、じゃああなたに信じられるものをあげましょうか。わたくしの年齢は正確に百一歳五ヶ月と一日なんでございますよ」

「それは信じられないわ！」とアリス。

女王さまは、あわれむような声で言います。「信じられない、ですって？ もう一回やっごらんなさいな。はい、まず深呼吸して目を閉じて」

アリスは笑いました。「やるだけ無駄です。ありえないことは、信じろと言われても無理ですもん」

「言いたくはございませんが、どうも練習が十分でないようすですわね。わたくしがあなたくらいの歳には、毎日三十分必ず練習したものでございますよ。ときには、朝飯前にありえないことを六つも信じたくらい。あら、ショールがまた風に飛ばされた！」

そう言う間にブローチがはずれて、突風がふいて、女王さまのショールを小川の向こうに吹き飛ばしました。女王さまはまたうでをひろげて、ショールを追いかけて飛んでいき、こんどは自分でショールをうまいことつかまえました。「つかまえた！」と女王さまは勝ち誇ったように申します。「さあ見てなさい、こんどは自分一人できちんとピン留めしてみますからね！」

「まあ、そしたら指はもうよくなったんですか？」とアリスは、女王さまを追いかけて小川を渡りながら礼儀正しく申しました。

*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*

「ああ、ずっといいみたいですわね。ねええ！」と女王さまは叫びましたが、声はだんだんキイ声になってきます。「いいみたいですわねええええ！ メエエエエ！」最後の一言は実に長くのびて、すごくヒツジっぽくて、アリスはすごくびっくりしてしまいました。

女王さまを見てみると、なにやらいきなりウールにくるまってしまったようです。アリスは目をこすってもう一度見直しました。なにが起きたのか、まるっきりわかりませんでした。これはお店の中にいるのかしら？ そしてアレは本当に——カウンターの向こうにすわっているアレは、本当にヒツジでしょうか？ いくら目をこすってみても、それ以上のことはまるでわかりません。アリ

スは小さな暗いお店の中にいて、カウンターにひじをついてよりかかっている、その向かいには歳取ったヒツジが、安楽いすにすわって編み物をしていて、ときどき手をやすめて、おっきなめがねごしにアリスをながめめるのです。



「なにを買いたいんだね？」やっとなヒツジが、編み物の手をちょっと止めて目をあげながら言いました。

「まだよくはわからないんだけど。ぐるっと見てまわりたいんですけど、いいですか？」とアリス。

「自分の前を見るのも、左右を見るのも、お好きなように。でもぐるっと見るのは無理だよ――

頭のうしろにも目がついてるんでなけりゃね！」とヒツジ。

でも、残念ながらアリスには、そういうものはついていませんでした。そこでアリスはふりかえって、それぞれの棚の前にきたときに、それをながめるだけで満足しました。

お店はいろいろ変わったものだらけのようでした——でもいちばん変てこだったのは、どのたなも、いっしょうけんめい見つめて何かがのっかっているのか調べようとすると、そのたなだけにはまるで何もなくなってしまうということでした。そのまわりのたなは、思いっきりいっぱい、のるだけ詰めこまれているのに。

「ここじゃ何もかも、まるでじっとしてないのね！」アリスはついに、憤然と申しました。一分かそこら、ときに人形みたいに見えて、特に道具箱みたいに見える、おっきな明るい色の物体を追いかけてやっていたのですが、それはいつも、アリスが見ている一つ上のたなにあるのです。「なかでもこれはいちばん頭にくるわ——でも、そうだ、こうすればいいんだ——」と急に思いついてアリスはつけ加えました。「いちばんてっぺんのたなまで、この調子でおっかけてけばいいのよ。さすがに天井を通り抜けるのはまごつくはずだよね！」

でもこの計画でさえ失敗してしまいました。その「物体」は、思いっきり静かに天井を通り抜けてしまったのです。もう何度もやりつけている、とでもいわんばかりに。

「あんたは子どもか、それともコマかね？」とヒツジは、編み針をさらに一組み手にとりました。「そんな具合にくるくる回ってたら、そのうちこっちの目までまわってしまうよ」いまやヒツジは、編み針を十四組同時に使っています。アリスは感心しきって、思わずヒツジをまじまじと見つめてしまいました。

「あんなにいっぱい、どうして編めるんだろう」と不思議に思った子どもは考えます。「しかも一分ごとにどんどん増えていって、もうヤマアラシみたい！」

「ボートはこげる？」とヒツジは、編み針を一組こちらに手渡しながらかきました。

「ええちょっとなら——でも地面の上じゃなくて——それと編み針でこぐのも——」と言いかけたとき、編み針が手の中でオールに変わり、気がつくと二人は小さなボートに乗って、岸辺の間をただよっているのです。というわけで、アリスとしては精一杯にこぐしかありませんでした。

「^{フェザー}羽根¹！」とヒツジは、またもや編み針を追加しながら叫びます。

これは返事が必要なせりふには聞こえませんでしたので、アリスはなににも言わずに船を出しました。この水って、なんかすごく変だわ、と思いました。というのも、しょっちゅうオールがつかえて、ほとんど出てこなくなってしまうのです。

「^{フェザー}羽根！ ^{フェザー}羽根！ その調子だと、そのうちもろにカニをつかまえちゃうよ²」

「カニなんて、かわいい！ ぜひつかめたいな」とアリスは思いました。

¹訳注：これはいまの英米人だって知らない人がふつうだから、説明しておこう。これはボートを漕ぐときに、オールをあまり深く水につこまずに、表面に近いところで水平に動かせ、という意味で、ボート業界のかけごえなんだって。

²訳注：これもボート業界用語。水にオールがとられて手からはずれ、握りがそのまま胸を強打することなんだって。

「^{フェザー}羽根って言ったのが聞こえなかったのかい？」とヒツジは怒って、編み針をさらに大量に増やしました。

「聞こえましたと。ずいぶん何度もおっしゃったし——それにとっても大声で。ねえ、そのカニって、どこにいるんですか？」

「水の中に決まってるでしょうが!」とヒツジは、手がいっぱいだったもので髪の毛に編み針を刺しています。「だから^{フェザー}羽根って言ってるのに!」

アリスはちょっとムッとしました。「いったいどうしてさっきから『^{フェザー}羽根』ばかりおっしゃるんですか？ わたし、鳥じゃありません!」

「鳥だよ。それもちっちゃなガチョウ」

これでアリスはちょっと腹が立ったのでしばらくは会話がありませんでしたが、その間にもボートはゆっくりとただよい、ときどき水草の茂みの中（こうなると、オールは水の中でびくともしなくなり、いつにも増してひどいことになります）、そして時には樹の下を通りますが、いつでも頭上には、同じ背の高い川岸がそびえているのでした。

「まあお願い！ トウシンソウが咲いてるわ!」とアリスは、いきなり喜びにあふれて叫びました。「ホントにトウシンソウなんだ——それも、すごいきれい!」

「その件でわたしに『お願い』されたって知りませんよ」とヒツジは編み物から目もあげません。「わたしが植えたもんじゃないし、それをどかす気もありませんからね」

「ええ、そうだけど、つまり——お願いですから、ちょっととまって少しつんでもいいですか？ ボートをしばらく止めましょうよ」とアリスはお願いします。

「このわたしにどうやって止めると?」と羊。「あんたがこぐのをやめたら、勝手に止まりますよ」

というわけで、ボートはそのまま流れをただようままにほうっておかれ、やがてゆらゆらと、風にそよぐトウシンソウのしげみに入り込んでいきました。そして小さなそでが注意深くまくりあげられて、小さな腕がひじまでしげみに差しこまれて、トウシンソウをなるべく根っこ近くで折り取ろうとするのでした——そしてしばらくアリスは、ヒツジのことも編み物のこともすっかり忘れて、ボートのふちから身を乗りだして、もつれた髪の毛の先だけが水にふれています——そして目を熱心に輝かせながら、一束、また一束と、愛らしくかぐわしいトウシンソウをつんでゆくのでした。

「ボートがひっくりかえらないといいんだけど! あら、あそこのがすごくきれい! でも、ちょっと手が届かない」とアリスは考えます。そして確かに、それはちょっと頭にくることではありました（「まるでわざとやってみたい」とアリスは思いました）。ボートがただようにつれて、きれいなトウシンソウはいっぱいつんだのですが、でも手の届かないところに、いつももっときれいなやつがあるのです。

「いちばんきれいなのが、いつもちょっと遠くにあるのね!」とアリスは、とうとうあまりに遠くに咲いているトウシンソウの頑固さにため息をついて申しました。ほっぺたを赤くして、髪と手



からは水をポタポタたらしながら、アリスはまたもとの場所に戻ると、見つけたばかりの宝物をならべはじめました。

そのときには、つんだ瞬間からトウシンソウがしおれだし、香りも美しさもなくしつづあったなんてことは、アリスにはまるで気にもなりませんでした。本物のトウシンソウだって、ごく短時間しかもたないのです——そしてこれは、夢のトウシンソウだったのですから、アリスの足もとで束になって転がるうちに、ほとんど雪みたいにとけてしまうのです——でも、アリスはほとんど気がつきもしません。ほかにいろいろ不思議なことで頭がいっぱいだったのです。

ちょっと先に進んだとたん、オールが水の中でつかえて、どうしても出てこようとしません（とアリスは後になって説明いたしました）。その結果として、オールの握りがアリスのあごにあたっ

て、そしてかわいそうなアリスが何度か「あらら！」と叫んでも、そのままアリスは座席から投げ出されて、トウシンソウの山に埋もれてしまいました。

でも、けがはなくて、アリスもすぐに起きあがりました。ヒツジはその間、ずっと編み物を続けています。なにごともしなかったかのように。「なかなかたいそうなカニをつかまえたねえ！」もとの場所にもどって、自分がボートから投げ出されなくてほっとしているアリスに向かって、ヒツジは申しました。

「あらそうでしたか？ あたしには見えませんでしたけど」とアリスは、おそろおそろボートのふちから暗い水の中をのぞきこみました。「だったらオールをはなすんじゃないわ——うちに持って帰れるような、ちっちゃなカニだったらよかったな！」でもヒツジは、バカにした感じでせせら笑うと、編み物を続けました。

「ここらへん、カニは多いんですか？」とアリス。

「カニとか、いろんなものがね。もう選ぶものならたっぷりと。だから腹を決めなさいな。さあ、いったいなにが買いたいね？」

「買いたいって！」とアリスは、半分おどろいて、半分こわがって声をあげます——というのもオールとボートと川は、みんないっしょんで消え失せて、またあの小さな暗い店の中にいたからでした。

「じゃあ、たまごをくださいな。どういう売り方なんですか？」とアリスはおずおずとたずねます。

「一つは五ペンス硬貨一つ——二つなら二ペンス」とヒツジは答えます。

「じゃあ、一つより二つのほうが安いの？」アリスはお財布を出しながらもびっくりして言いました。

「ただし、二つ買ったら、ぜったいに両方食べなきゃダメなんだよ」とヒツジ。

「それなら、一つくださいな」とアリスは、カウンターにお金をおきました。「だって、ぜんぜんおいしくないかもしれないでしょ」と内心想います。

ヒツジはお金を受け取ると、箱にしまいました。それからこう言いました。「あたしはぜったいに物を手渡さないんですよ——それはぜったいダメ——あんたが自分でとらないと」そういいながら、ヒツジは店の反対側にまで行って、たまごを柵にたてました。

「どうしてそれがダメなんだろう」と思いながら、アリスはテーブルや椅子の間を、苦勞しながらきわけて行きました。店は奥のほうにいくほど、すごく暗くなっていったのです。「あのたまご、向かっていけばいくほど遠くにいっちゃうみたい。えーと、これって椅子？ あら、枝がついてるじゃないの！ こんなところに木が生えてるなんて、変なの！ それにこんなところに小川まで！ まあこんな変なお店って、いままで見たこともないわ！」

*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*

そしてアリスは先へ進みました。でも、何もかも近くによったとたんに木に変わってしまうので、どんどん不思議になってきました。だから、たまごも近づくと木になるんだろうと思いこんでいました。

第6章 ハンプティ・ダンプティ

でも、たまごはどんどん大きくなるばかりで、どんどん人間じみてきました。あと数メートルのところまでくると、そのたまごには目も鼻も口もついているのがわかります。そして間近にきてみると、それがまさに他ならぬハンプティ・ダンプティだというのがはっきりわかりました。「ほかに考えられないわ！ 顔中にハンプティ・ダンプティの名前が書いてあるくらいははっきりわかる」とアリスはつぶやきました。

それはそれは巨大な顔だったもので、百回書いてもまだ余ったでしょう。ハンプティ・ダンプティは高い壁のてっぺんに、トルコ人みたいにあぐらをかいてすわっていました——それもすごく薄い壁で、どうやってバランスをとっているのか、アリスは不思議でたまりません——そして目はしっかりとかさっての方向に固定されていて、こっちのほうをまるで見ようとしないので、実はぬいぐるみなんだろうとアリスは思いました。

「それにしても、ほんとにたまごそっくりよねえ！」とアリスは声に出していいながら、腕を広げてかれをキャッチしようとしていました。いまにも落ちてくるものと確信していたからです。

ハンプティ・ダンプティは、ながいこと何も言いませんでした。そして、口を開いたときには、アリスのほうを見ないようにしています。「たまご呼ばわりされるとは、実に不愉快千万——実に！」

「たまごそっくりに見えるって申し上げたんです」アリスはていねいに説明しました。「それに、世の中にはすごくきれいなたまごもあるじゃないですか」とつけくわえて、なんとか自分のせりふをほめことばに仕立てようとしてみます。

「世の中には」とハンプティ・ダンプティは、さっきと同じく目をそらしています。「赤ん坊なみの常識もないようなやつらもいるんだからな！」

アリスは、なんと答えていいやらわかりませんでした。まるっきり会話らしくないわね、だってハンプティ・ダンプティは、あたしに向かってはなにも言わないんだもの、とアリスは思いました。いや、さっきのせりふだって、見た目には近くの木に向かってのせりふです——そこでアリスは立ったまま、静かに暗唱しました：——

「ハンプティ・ダンプティ壁の上
ハンプティ・ダンプティ大転落。
王さまの馬や兵隊総がかりでも
もとの場所には戻せぬハンプティ・ダンプティ」

「最後の行は、この詩にはちょっと長すぎるのよね」とアリスは、ほとんど声に出して言いそうになりました。ハンプティ・ダンプティに聞こえるかもしれないのを忘れていたのです。

「そんな突っ立って一人でブツブツ言ってるんじゃない。名前と用件を述べたまえ」

「あたしの名前はアリスですけど、でも――」

「聞くからに間抜けな名前だ！」とハンプティ・ダンプティは、短気そうに口をはさみます。「それでどういう意味？」

「名前って、意味がなきゃいけないんですか？」アリスは疑わしそうにたずねます。

「いけないに決まってるだろうが」ハンプティ・ダンプティはちょっと笑いました。「わたしの名前はといえば、これはわたしの形を意味しておる――しかも、すてきでかっこいい形であるな。あんたのみたいな名前では、ほとんどどんな形にだってなれそうじゃないか」

「なぜたった一人でこんなところにすわってらっしゃるんですか？」アリスは口論をはじめたいとは思わなかったのこう言いました。

「そりゃもちろん、ここにはほかにだれもないからだよ！」とハンプティ・ダンプティ。「その程度のものに答えられんとでも思ったか！ 次いってごらん」

「地面におりたほうが安全だと思わないんですか？」アリスは、別になぞなぞを続けようと思ったわけではなく、単にこの変な生き物に対し、善意から心配してこう言ったのです。「だってその壁、とってもせまいじゃないですか！」

「なんともまあ、えらく他愛のないなぞなぞばかりをきくもんだな！」とハンプティ・ダンプティはうなるように言います。「もちろんそんなことは思わんとも！ それにもしわたしが仮に本当に落ちたとしても――もちろんそんなことはまったくあり得んことだが――でも、仮にもし落ちたとしたら――」ここでハンプティ・ダンプティは口元を引き締めて、えらく莊嚴でえらそうな様子を見せたので、アリスは笑いをこらえるのが精一杯でした。「仮にもし落ちたとしても、王さまが約束なさってくださいて――えへん、なんならあおざめてくれたっていいんだぞ！ まさか王さまが出てくるとは思ってもいかなかっただろうが、え？ 王さまが約束なさってくださいて――しかももったいなくも御自らの口で――は、は、配下の――」

「配下の馬や兵隊さんを総がかりで送る、でしょ」とアリスは、いささか軽率にもわりこみました。

「いやまったくこりゃひどい話だ！」ハンプティ・ダンプティはいきなり、憤怒にかられて叫びました。「戸口で聞き耳をたててたな――木に隠れて――煙突にもぐって――さもなきゃそんなこと知ってるわけがない！」

「そんなこと、してませんったら！ 本に書いてあります」アリスはとても静かに申しました。

「ああそうね！ そういうことも本になら書くだらうさ」ハンプティ・ダンプティは、もっと落ち着いた口調で言いました。「それがイギリスの歴史ってもんだからね、つまるところ。さ、この



わたしをよっくらん！ わたしは王さまと話したことがあるヤツなんだからな、このわたしが：そんなやつには、ちかってほかにお目にかかったことがあるまい。でも鼻にかけてないのを示すため、あんたと握手してあげようではないの！」そして前にかがむと同時に（そしてそのせいで、ほとんど壁からおっちかけましたが）ほとんど耳から耳へ届くように、にんまりと笑って見せて、アリスに手を差し出します。アリスは、その手を握り返しながらも、ちょっと心配になってハンプティ・ダンプティを見つめていました。「これ以上にんまりしたら、口の端が裏側でくっついちゃうんじゃないかしら。そしたら、頭はいったいどうなっちゃうことやら！ ポロッと落ちちゃうかも！」

「そうとも、配下の馬や兵隊を総がかりでな」とハンプティ・ダンプティは続けました。「たちまちまた拾い上げてくれる、まちがいなくね！ しかしながら、この会話は先を急ぎすぎておる。

もう一つのそのまた一つ前のせりふに戻ろうではないの」

「どうも、はっきり覚えていないんですが」アリスはとてもおぎょうぎよく申しました。

「それならば最初からやりなおそう。こんどはわたしが話題を選ぶ番だ——」とハンプティ・ダンプティ。「これがゲームかなんかみたいな言い方ね！」とアリスは思いました。「そこであなたに質問。あんた、いくつだって言ったっけね？」

アリスはちょっと計算して言いました。「七つ半です」

「ブーッ！ おおまちがい」ハンプティ・ダンプティは勝ち誇ったように言います。「あんたそんなこと、一言も言ってやしないだろう！」

『何歳なの？』っていう意味だろうと思ったんですけど」とアリスは説明しました。

「そういう意味のつもりなら、そういうふうに言ってるよ」とハンプティ・ダンプティ。

アリスはまた口論をはじめめる気はなかったので、なにも申しませんでした。

「七歳六ヶ月とはね！」ハンプティ・ダンプティは考え込むように繰り返します。「なんか落ち着かない年頃だわな。さて、もしこのわたしに相談してくれてたら、『七歳でやめとけ』と言っただろうが——もう手遅れだな」

「育ち方を人に相談したりなんかしません」アリスは頭にきて言いました。

「自尊心が許しませんってわけかい」と相手がつっこみます。

そう言われてアリスはなおさら頭にきました。「そうじゃなくて、人が歳をとるのはどうしようもないでしょうって意味です」

「一人ならそうかもな。でも二人ならどうしようもある。しかるべき助けがあれば、七歳でやめとけたかもしれないのにねえ」とハンプティ・ダンプティ。

「そこにつけてらっしゃるベルト、すごくきれいですね！」アリスはいきなりもうしました。

（歳のはなしはもういい加減たくさんだと思ったのです。そして話題を順番に選ぶというのがほんとうなら、こんどは自分の番だ、とアリスは考えました。）「もとい」と考え直して訂正します。「きれいなチョーカーですね、と言うべきだったかしら——いいえ、やっぱりベルト、じゃなくて——あらごめんなさい！」アリスはがっかりして付け加えました。ハンプティ・ダンプティはすっかり怒ってしまったようで、別の話題にすればよかったとアリスは後悔しはじめたのです。「まったく、どこが首でどこがウェストだかわかったらいいのに！」とアリスはこっそり考えました。

しばらく何も言わなかったものの、あきらかにハンプティ・ダンプティはとても怒っていました。そしてやっと再び口をきいたときにも、それは深いうなり声でした。

「まったく——なんと言ったらいいか——ベルトとチョーカーの区別もつかんとは——実にまったくもって——不愉快なことこの上ない！」

「はい、もの知らずなのはわかってるんですけど」とアリスはじつにへりくだった調子で言ったので、ハンプティ・ダンプティも機嫌をなおしたようです。

「これはチョーカーだよ、お嬢ちゃん。しかもその通り、非常に美しいものだね。白の王さまと女王さまからの贈り物なのだよ。どうだね！」

「まあ、そうなんですか」アリスは、やっぱりこれはいい話題を選んだとわかって、とてもうれしく思いました。

ハンプティ・ダンプティは、片ひざを反対のひざのうえにのせて、それをそれぞれの手でつかみました。そして、考え深そうに続けます。「お二人はこれをだね——非誕生日プレゼントとしてわたしに賜ったのであるのだ」

「あの、すみません」とアリスは、不思議そうに言いました。

「別に怒っちゃいないよ」とハンプティ・ダンプティ。

「そうじゃなくて、いったい非誕生日のプレゼントってなんなんですか？」

「お誕生日じゃないときにもらうプレゼントだよ、もちろん」

アリスはちょっと考えこみました。そしてやっと「あたしはお誕生日のプレゼントがいちばんいいな」と言いました。

「あんた、自分がなに言ってるかわかってんの？」とハンプティ・ダンプティ。「一年は何日？」

「三百六十五」とアリス。

「で、あんたのお誕生日は何回？」

「一回」

「それで三百六十五から一を引いたらなんになる？」

「三百六十四よ、もちろん」

ハンプティ・ダンプティは疑わしそうな顔をします。「紙に書いてもらったほうがいいな」

アリスはメモ帳を取りだして、計算をしてあげながらも、つい笑ってしまいました。

$$\begin{array}{r} 365 \\ i \quad 1 \\ \hline 364 \end{array}$$

ハンプティ・ダンプティはメモ帳をとって、しげしげと見つめ、「正しいように見えなくもないが——」と切り出しました。

「逆さにお持ちですけど！」とアリスが口をはさみます。

「いやはやその通りだ！」とハンプティ・ダンプティは、アリスにメモ帳をひっくり返してもらって陽気に言いました。「どうも様子がへんだとは思ったんだ。で、言いかけていたように、正しいように見えなくもない——が、いまじゅうぶんに目をとおしてる暇がないもんでね——そしてこれで、非誕生日プレゼントをもらえるかもしれない日が三百六十四日あって——」

「そうね」とアリス。

「そしてお誕生日プレゼントの日は一回しかないのがわかる。さあめや歌えや！」

「めや歌えやって、なにをおっしゃってるのかわかんないです」とアリス。

ハンプティ・ダンプティはバカにしたような笑いを浮かべます。「そりゃわかんないだろうよ——わたしが説明してやるまではね。いまのは『さあこれであんたはこの議論で完全に言い負かされたわけだ』という意味だ」

「でも『めや歌えや』って、『これであんたはこの議論で完全に言い負かされた』なんて意味じゃないでしょう」とアリスは反論します。

「わたしがことばを使うときには、ことばはわたしの選んだ通りの意味になるのである——それ以上でも以下でもない」ハンプティ・ダンプティはつっけんどんに言いました。

「問題は、ことばにそんないろいろちがった意味を持たせられるかってことよ」とアリス。

「問題は、どっちがご主人さまかってことだ——単にそれだけの話」とハンプティ・ダンプティ。

アリスはわけがわからず、何も言えませんでしたので、しばらくしてからハンプティ・ダンプティがまた口を開きました。「まあ中には気むずかしいことばもあってね——特に動詞は、これがえらく気位が高い——形容詞はどうにでもなるけれど、動詞はそうはいかん——でもこのわたしなら、全部まとめてめんどろ見切れる！ 不可侵性！ わたしに言わせりゃ、つまりはそういうこった！」

「もうしわけないですけど、それってどういう意味ですか？」とアリス。

「やっとまともな子らしい口をきくようになったな！」ハンプティ・ダンプティはずいぶん機嫌がなおったようです。「『不可侵性』でわたしが意味しようとしたのは、この話はいいい加減もうたくさんで、あんただって残り一生ここに止まってるつもりじゃなかろうし、次にどうするつもりかそろそろ述べたほうがいいぞ、ということだな」

「ことば一つに、ずいぶんたくさんの意味を持たせるんですねえ」とアリスは考え込んでいました。

「ことばにいまくらいたくさん仕事をさせるときには、給料もよけいに払うんだよ」とハンプティ・ダンプティ。

「まあ」アリスはわけがわからず、ほかに何も言えませんでした。

「まったく、土曜の晩にことばが群がってくるところを見せたいよ。給料を受け取りにくるわけでしたらね」とハンプティ・ダンプティは、頭を左右にえらそうにふってみせます。

（アリスはハンプティ・ダンプティが何で給料を支払ったのか、きく勇気がもてなかったんだ。そういうわけで、ぼくもきみに説明できないんだよ。）

「ことばの説明がとってもお上手みたいです。よろしければ、『ジャバウォッキー』という詩の意味を教えてくださいませんか？」

「聞こうではないの」とハンプティ・ダンプティ。「わたしはこれまで発明された詩ならすべて

説明できる——そしていまだ発明されてない詩もかなり」

これはなかなか有望そうにきこえたので、アリスは最初の一節を暗唱しました。

それは煮そろ時、俊るりしオモゲマたちが
幅かりにて環繰り軀振する頃
ポショバトたちのみじらしさ極まり
居漏トグラがほさめる頃

「とっかかりはそのくらいで十分」とハンプティ・ダンプティがわりこみました。「むずかしいことばがたくさんある。『煮そろ時』というのは、夕方四時のことであるな——晩ごはんのために、そろそろ煮はじめる時間である」

「それでじっくりきますね。じゃあ『俊るり』は？」

「うむ、『俊るり』は、『俊敏でぬるりとした』という意味。『俊敏』は『元気がいい』というのと同じことである。おわかりのように、かばんみたくなおるわけ——二つの意味を一つのことばにつめこんであるのだ」

「それでわかりました」とアリスは考え深げにもうします。「じゃあ『オモゲマ』ってなに？」

「そう、『オモゲマ』は、まあアナグマのようなもんだ——トカゲみたいでもある——さらにはコルク抜きのようなもあるな」

「ずいぶんとへんてこな生き物なんですねえ」

「いやホント」とハンプティ・ダンプティ。「それと日時計の下に巣を作るのだね——それと、チーズを食べて生きておる」

「じゃあ『環繰る』と『軀振する』は？」

「『環繰る』のは、環球儀みたいにぐるぐるまわること。『軀振する』は、コルク抜きみたいに穴をグリグリと開けることである」

「じゃあ『幅かり』ってというのは、日時計のまわりの草地のこと、かしら？」と言ったアリスは、自分の賢さにわれながらおどろいてしまいました。

「もちろんそうである。『幅かり』と呼ばれるのはだね、そいつが手前にも奥にも横にも、ずっと幅をとってあるからで——」

「そしていたるところ、葉ばかりだから？」とアリスは付け加えました。

「まさにその通り。さてこんどの『みじらしい』というのは『みすばらしくてみじめ』ってことであるな（ほら、これまたかばんなのだ）。それと『ポショバト』はやせたショボい鳥で羽がそこらじゅうに飛び出しておる——なんか歩くモップみたいなものと考えたらよろしい」

「それじゃ『居漏トグラ』って？ お手数ばかりおかけして本当に申し訳ないですけど」

「『トグラ』は緑のブタみたいなものだな。でも『居漏』となると、わたしもよくわからん。たぶん『居場所から漏れた』を縮めたんであろう——つまりは迷子になった、というわけであるな」



「じゃあ『ほさめる』ってどういう意味？」

「うむ、『ほさめ』ってのは、ほえるのと口笛の中間で、間にくしゃみみたいなのが入ったものであるね。でも、いずれそれを実際に聞くこともあるだろう——森の奥なんかで——いったん聞いたら、もうそれでじゅうぶんすぎるくらいであるな。にしても、こんなむずかしいものをあんたに暗唱して聞かせたというのは、いったい何者かね」

「本で読んだんです。でも、これよりずっとやさしい詩も暗唱してもらいましたよ、えーと——トウイードルディー、のほうだったかな」

「詩となるとだねえ」とハンプティ・ダンプティは、でっかい手を片方のぼします。「そういう話になるんなら、このわたしなら、ほかのだれにも負けないうくらい詩を暗唱してあげられるよ——」

「ああっ、そういう話にならなくてもいいんですけど！」とアリスはあわてて言って、ハンプティ・ダンプティが始めるのをやめさせようとしてしました。

ハンプティ・ダンプティは、アリスの発言をまったく無視してつづけました。「わたしがこれから暗唱する詩篇はだね、あんたのためだけに書かれたものであるのよ」

アリスとしては、そういうことならこれは聞くしかないと思いましたので、腰をおろし、「ありがとうございます」と言いました。ちょっと悲しそうに。

「冬に野原が白い頃
きみのためにこの歌をうたおう――

と言っても、ホントにうたうわけじゃないけど」とハンプティ・ダンプティは説明で付け加えました。

「そうお見受けします」とアリス。

「わたしがうたってるかどうか見たりできるって、ずいぶんいい目をしてるようだねえ」ハンプティ・ダンプティがきつい口調で言います。アリスはだまりました。

「春に森が萌える頃
なんとか意味を説明しよう」

「ありがとうございます」とアリス。

「夏に日が長くなる頃
きみにもこの歌がわかるかも：

葉のしおれる秋の頃
ペンとインキで書き留めて」

「はい、そんなに長いことおぼえてられたらだけど」とアリス。

「いちいちそうやって口をはさまんでよろしい。はさんでもしょうがないし、わたしも気が散るではないの」とハンプティ・ダンプティ。

「ぼくは魚に手紙をだした
『ぼくの望みはこれだ』と言った。

海の小さな魚たち
ぼくに答を書き送り

小さな魚たちの答とは
『遺憾ながらできかねます、それは――』

「なんかよくわかんないんですけど」とアリス。

「先にいけばやさしくなる」とハンプティ・ダンプティは答えます。

「ぼくはもう一度書き送り曰く
『言うとおりにするのが身のためよ』

魚たちはにやりと答え
「ずいぶんご機嫌ななめですねえ！」

一回言ったが、二回言ったが
聞く耳もたぬが魚の性

ぼくはピカピカやかんをとった
目下の仕事にぴったりだった

胸はどきどき心はずみ
自慢のやかんを満たすは泉

そこへだれかがやってくると
「小魚たちは寝ちゃったよ」と

ぼくはそいつにはっきり告げた
「だったらも一度起こしてきてよ」

これは大きくはっきり告げた
耳元間近でどなってやった」

ハンプティ・ダンプティはこのくだりを暗唱するとき、ほとんど金切り声になりましたので、アリスは身震いしました。「あたし、その伝令さんにはぜったいになりたくないわ！」



「でもそいつはがんこで高慢で
曰く『そんな怒鳴らなくてもよろしいので!』

そしてそいつはがんこで高慢で
曰く『起こしてもいいが、まず――』

ぼくは柵からコルク抜きを手に
自分で魚を起こしに行った。

そしてドアに鍵がかかって^{のうく}悩苦
押してはひいては蹴ってはノック。

そして扉がしまっていると見て
ぼくがすかさずまわした取っ手――」

長い間がありました。

「それだけ?」とアリスはおずおずとたずねました。

「これだけ。さよなら」とハンプティ・ダンプティ。

これっていきなりすぎないかしら、とアリスは思いました。が、立ち去れというのをここまでほのめかされると、このままだとかなりお行儀わるいな、という気がします。そこで立ち上がり、手を差し出しました。「さよなら、またお目にかかるまで!」となるべく明るい声で言います。

「またお目にかかることなんか、あったとしてもわたしには見分けがつくまいよ」ハンプティ・ダンプティは怒ったように返事をしながら、指を一本差し出してアリスに握らせました。「あんた、ほかの人間とえらくそっくりだからねえ」

「ふつうは、顔で見分けるものですけど」アリスは慎重にもうします。

「わたしが言ってるのも、まさにそういうことだよ。あんたの顔ときたら、ほかのみんなとおんなじだ――目が二つ、そんな具合に――」(と親指で空中に場所をしるし)「鼻がまんなかで、その下に口。いつだって同じ。たとえば目が二つとも片っぱに寄ってるとかすれば――あるいは口がてっぺんにあるとか――それならちたあ見分けがつこうってもんだがね」

「それじゃみともないでしょう」とアリスは反対しましたが、ハンプティ・ダンプティは目を閉じて「試してもいないくせに」と言っただけでした。

アリスはもうしばらく待って、ハンプティ・ダンプティがまた口を開くかどうか見てみました。でも二度と目を開きもしなかったし、アリスをまったく意に介する様子もなかったので、もういちど「さようなら!」と言ってみました。そしてこれにも返事がなかったので、アリスは静かにそこを立ち去りました。でも歩きながら、どうしてもつぶやかずにはいられませんでした。「まったく、どうしようもなく腹のすえかねる——」（このことばは口に出していいました。こんなに長いことばを言えるのはすごく気が休まったからです）「どうしようもなく腹のすえかねる人にはたくさん会ったけど、その中でもあれほど——」でもこの文は結局最後まで言えませんでした。というのもまさにそのしゅんかん、森中に「グシャッ」というすさまじい音がとどろきわたったからです。

第7章 ライオンと一角獣

次のしゅんかんに、兵隊さんたちが森の中を走ってきました。最初は二人、三人組みで、それから十人、二十人まとまって、そしてついには森全体にあふれそうなるさまじい群衆になって。アリスは、ふみつぶされるんじゃないかとこわくて、木の陰にかくれてみんなが通り過ぎるのを待ちました。

生まれてこのかた、こんなに足下のおぼつかない兵隊さんたちは見たことない、とアリスは思いました。しょっちゅう何かにつまずいたり、おたがいにつまずいたり、そして一人が倒れると、いつもそれにまた何人かがつまずいて倒れるので、やがて地面は人の山だらけになってしまいました。

それから馬がやってきます。四つ足なので、歩兵たちよりはましです。が、馬たちですらしょっちゅうつまずきます。そして、馬がつまずくと、騎手はそくざに転げ落ちる、というのが規則のようでした。いっしゅんごとに混乱はますますひどくなって、アリスは森から出て開けた場所にきて、すごくほっとしました。そこでは白の王さまが地面にすわりこんで、メモ帳にいっしょうけんめいなにやら書き込んでいます。

「総がかりで送ってやったぞ！」と王さまは、アリスを見てうれしそうに叫びました。「おじょうちゃん、森を通ってくるときに、兵隊に出くわしたりはせなんだか？」

「会いました。何千人くらい、かしら」とアリス。

「四千二百とんで七。それが正確な数じゃ」と王さまはメモ帳を見ながら申します。「馬は全部は送り出せなんだ。ゲームで二駒は必要じゃからの。それと伝令二人も送ってはおらん。二人とも街に出かけておる。ちょっと道をながめて、どっちか見えないかどうか教えてはくれんかの」

「うーん、道に見えるのは……だれも」とアリス。

「このわしも、そのくらい目がよければなあ！」と王さまは、いらだたしい声で申します。「だれも見えるなんて！ しかもそんな遠くから！ いやあ、このわしときたら、この光の中ではだれも見えるどころか、おじょうちゃん一人見るのだってやっこさじゃよ！」

でもいまの話を、アリスはぜんぜん聞いていませんでした。まだ片手を眉にかざして、道の向こうを熱心にながめています。「こんどはだれかが見える！ でも、こっちに向かってるけどすごくゆっくり——しかも、ずいぶんとへんてこなふるまいばっかしてるわ！」（というのもその伝令は、こっちに向かいながらもぴょんぴょん跳び上がったり、ウナギみたいにくねくねしたりして、おっきな手を左右にうちわみたいに広げているのです）。「ちっとも」と王さま。「そやつはアングロサ



クソンの伝令なのじゃ——そしてあれは、アングロサクソン式ふるまい。あれをやるのは、あやつが晴れがましいときだけじゃな。そしてあやつの名はヘイヤ」（つづりは Haigha だけれど、発音は mayor と韻をふむように）。

アリスはつつい始めてしまいました。「ハヒフヘホの恋人は、晴れがましいから大好き。ひどいから大きい。食べさせてあげるのは——えーと、あげるのは——あげるのは、ハムサンドに干し草。名前はヘイヤで、住まいは——」

「住まいはほったて小屋じゃ」と王さまはあっさり申しました。自分がゲームに参加したとはつゆほども気がついていません。アリスは、ハヒフヘホで始まる地名が思いつかずに困っていたところだったのです。「もう一人の伝令はボウシャと言うんじゃ。伝令は二人おらんと。行くのに一

人、戻るのにもう一人」

「あの、すみませんけど」とアリス。

「すまないようなことは、最初っからしないことじゃ」と王さま。

「いえ、意味がわからないって申したかったんですけど。行くのに一人、戻るのにもう一人って、なぜですか？」

王さまは、いらだたしそうに繰り返しました。「だから、いま申したであろうが。伝令は二人おらんと——送るのと、取ってくるのとな。取ってくるのに一人、送るのに一人じゃ」

このしゅんかんに伝令がとうちゃくしました。ハアハアヒィヒィと息をきらしすぎていて、一言も口がきけず、手をばたばたふりまわしながら、かわいそうな王さまにむかってすごくおっかない顔をしてみせるばかりでした。

「こちらのお若いご婦人に言わせると、おまえはハヒフヘホの恋人じゃそうな」王さまは、伝令の注意を自分からそらそうとして、アリスを紹介しました——が、むだでした——アングロサクソンのふるまいは、どんどんとんでもないものになるばかりで、でっかい目が左右にはでにギョロギョロいたします。

「びっくりさせよ！」と王さま。「気絶しそうじゃ——ハムサンドをもて！」

そう言われて伝令は、アリスがわくわくして見守る中、首からぶら下がったふくろを開けるとサンドイッチを王さまにわたしました。王さまは、それをガツガツむしゃむしゃと食べました。

「サンドイッチもう一つ！」と王さま。

「もう干し草しか残ってませんぜ」と伝令は、ふくろをのぞきこんで申します。

「じゃあ、干し草」と王さまは、気絶しそうなひそひそ声で言いました。

干し草で王さまがかなり元気をとりもどしたのでアリスはホッとしました。「気絶しそうなときには、干し草はまたとないものじゃな」と王さまはむしゃむしゃ食べながらアリスに申します。

「つめたい水をかけるほうがいいと思うんですけど。それとも気付け薬とか」とアリスは提案してみました。

「干し草よりよいものがないとは申しておらん。干し草のようなものは他にない、と申したのじゃ」と王さま。アリスとしても、あえてこれに反論する気はありませんでした。

「道でだれかおまえを追いたか」と王さまは、もっと干し草をよこせと伝令に手を伸ばしながら申します。

「だれも」と伝令。

「いやまったく。こちらのお若いご婦人も、そいつを見たそうな。だからもちろんそのだれも、おまえほどは歩くのが遅くないわけじゃ」

「あっしだってがんばってるんでさあ。だれも、あっしより大して速くは歩けないはずでっせ！」

「いやいややつに、それはできんじゃろ。もしできるなら、おまえより先にここに着いておるは



ずじゃ。でもそろそろおまえも息切れがなおったようだな。街で何が起きたか話すがよいぞ」

「ないしょ声で」と伝令は、口元にラップみたいに手をあてて王さまの耳に近寄ろうと背伸びします。アリスはがっかりしました。アリスもニュースがききたかったからです。でも、ないしょ声を出すかわりに、ヘイヤは思っきりどなったのでした。「あいつら、またやりあってますぜ！」

「いまののどこがないしょ声じゃ！」とかわいそうな王さまは跳び上がって身ぶるいいたします。「こんどいまみたいな真似をしておったら、貴様をバターにしてくれる！ まったく、頭の中でガンガンこだまして地震みたいじゃった！」

「ずいぶん小さな地震だったのねえ！」とアリスは思いましたが、勇気を出してきいてみました。「あいつらってだれですか？」

「だれって、ライオンと^{ユニコーン}一角獣に決まっとうろが」と王さま。

「王冠めぐるって大げんか、ですか？」

「そうとも、まったくそのとおり。そしてこいつの何とも言えんオチはだな、その王冠が、結局ずっとわしのものだってことなんだよ！ ちょっと出かけて見物してやろう」と王さま。そして一同は、トコトコとかけだし、アリスは走りながら、あの古い歌の歌詞を頭のなかでくりかえしていたのでした――

「ライオンと一角獣^{ユニコーン}

王冠めぐって大げんか

一角獣^{ユニコーン}はライオンに

街中^{ずいしょ}随所でボコボコに

両者に白パンやる人や

黒パンあげる人もおり

すももケーキをあげる人もいて

太鼓で街からたたき出す」

「勝った——ほうが——王冠を——もらうんですか？」とアリスはがんばって聞いてみましたが、走っているせいで、かなり息がきれていました。

「いやいや、まさか！ どっからそんな途方もないことを！」と王さま。

「もし、よ、よろしければ」とアリスは、もうちょっと走ってからやっとのことで、ぜいぜいと申します。「一分かそこら、休ませていただけませんか——せめて——また息がつけるまで」

「よろしいかと言われれば、わしとしてはよろしくはあるがな、でも実際にやるほどの力はないぞ。一分、というのはとんでもない勢いで進んでおるものでな。それを休ませようとするのは、犯駄^{ばんだ}醉^{すな}那^な智^ちを休ませようとするようなもんじゃ！」

アリスは息が切れて、それ以上しゃべれませんでしたので、一行はだまってかけって行きました。やがて大群衆が見えてきて、そのまん中でライオンと一角獣^{ユニコーン}がけんかをしていました。すごくほこりが舞い上がっていて、アリスは最初、どっちがどっちか見分けが付きませんでした。でもじきに、角で一角獣^{ユニコーン}が見分けられるようになりました。

一行はもう一人の伝令ボウシャに近づきました。ボウシャはけんかを見物しつつ、片手にお茶わんと、もう片手にはバタつきパンを持っています。

ヘイヤがアリスにささやきました。「こいつは牢屋から出てきたばかりで、ぶちこまれた時にはまだお茶をすませてなかったんよ。それで牢屋では、カキの貝殻しか食わせないんだぜ——だからこいつ、すっごくおなががすいて、のどがかわいてるの。坊や、元気でやっとなるかね」とヘイヤは、ボウシャの首に愛情込めてうでを巻きつけます。

ボウシャはあたりを見まわしてうなずき、バタつきパンを食べ続けます。

「坊や、牢屋では幸せだった？」とヘイヤ。

ボウシャはもう一回あたりを見まわすと、こんどは涙が一、二滴、ほっぺたをながれました。でも、一言もしゃべりません。

「なんか言ったらどうだい！」とヘイヤがいらいらして叫びました。でもボウシャはパンを食べてお茶をもっと飲んだだけでした。

「なんとか言わんか、え！」と王さまが叫びました。「あやつらのけんかはどんな具合じゃ？」

ボウシャは目を白黒させてがんばって、バタつきパンの大きなかけらを飲み込みました。そしてのどをつまらせながらこう言います。「なかなかうまいこと運んでますがな。どっちも八十七回くらいダウンしてまっせ」



「じゃあ、もうすぐ白パンや黒パンを持ってくるのかしら？」アリスは勇気を出してきいてみました。

「もう用意してありますがな」とボウシャ。「あっしがいま喰ってますのも、その一切れでさあね」
ちょうどこのとき、けんかに間が入って、ライオンと^{ユニコーン}一角獣はハハハいいながらすわりこむ一方で、王さまが「おやつタイム十分間！」と宣言いたしました。ヘイヤとボウシャはすぐにはたらしきだし、白パン、黒パンののったお盆を運んで回ります。アリスも一切れ試してみましたが、すっごく乾いていました。

「きょうはもう、けんかしないであらうと思うのだがな。太鼓を始めるように命令を伝えてまいれ」と王さまはボウシャに申しました。ボウシャは、バツタみたいにぴょんぴょんはずみながら、出かけていきました。

一分かそこら、アリスはだまってボウシャを見送りながら立っていました。急に、パッと元気になりました。「見て、見て！」と熱心に指さします。「白の女王さまが国を横切って走ってる！ あっちから森をつきつて、飛び出してきたわ——女王さまって、ホントにすごく速く走れるのねえ！」

「だれか敵に追われておるのであらうよ、まちがいなく。森は敵だらけじゃからの」と王さまはあたりを見まわしすらすえに申しします。

「でも、走ってって助けてあげないんですか？」アリスは王さまがずいぶんと落ち着きはらっているの、とってもびっくりしてしまいました。

「無駄、無駄！ あいつはこわいぐらいに速く走りよるからの。犯駄酢那智^{ぼんだすなち}でも捕まえようとしたほうがマシなくらいじゃ！ でもお望みなら、あいつについて、メモはとっておいてやろう——あやつは実に善良な生き物じゃからの」とメモ帳を開きながら、王さまは優しくつぶやきました。「生き物の『物』は、手へんじやったかの？」

このとき一角獣^{ユニコーン}が、両手をポケットにつっこんで、一同のところへめつと顔を出しました。「今回はおれが上わ手だったろ？」と、通りすがりに王さまをちらっと見ながら申しします。

「まあまあってどこじゃな——まあまあ」と王さまは、かなり心配そうに申しました。「おぬし、その角で突き通すのはあまりよろしくないぞ」

「向こうだってけがはしてねーよ」と一角獣^{ユニコーン}はどうでもよさげに申しました。そして通り過ぎようとしたとき、ふとアリスに目が止まりました。一角獣^{ユニコーン}はすぐさま立ち止まり、しばらくつつ立ってアリスを見つめ、気持ち悪くてたまらないよ、とでも言いたげでした。

「な、なんだ、こりゃいったい？」一角獣^{ユニコーン}はやっとのことで言いました。

「こいつぁ子どもだ！」ヘイヤはうれしそうに答えて、アリスの前に出て紹介しつつ、アングロサクソンのふるまいで、アリスのほうに両手をひろげて見せました。「きょう見つけたばっかだよ。等身大で、二倍も天然自然！」

「空想上の怪物だとばかり思ってたのに！ 生きてるの？」と一角獣^{ユニコーン}。

「しゃべれますぜ」とヘイヤは莊嚴に申しします。

一角獣^{ユニコーン}は夢見るようにアリスを見つめて言いました。「子供、なんかしゃべれ」

アリスは、口を開きながらも口元がゆるむのをおさえられませんでした。「ねえ知ってた、あたしのほうもずっと、一角獣^{ユニコーン}って空想上の怪物だと思ってたのよ！ 生きてるのを見るのはこれが初めて！」

「ふーむ。じゃあ、こうしてお互いに相手を見たことだし、あんたがおれの実在を信じてくれれば、おれもあんたの実在を信じよう。取引成立、かな？」と一角獣^{ユニコーン}。

「ええ、^{ユニコーン}一角獣さんさえよければ」とアリス。

^{ユニコーン}一角獣は、アリスから王さまのほうに向き直りました。「おい、じいさん、すももケーキを出してくれよな。あんたの黒パンはいただけないぜ」

「はいはい——わかったわかった！」と王さまはつぶやいて、ヘイヤに合図しました。「袋を開け！」とささやきます。「急いで！ そっちじゃない——そっちは干し草しか入ってない！」

ヘイヤは袋からでかいケーキを取り出して、持ってきてくれとアリスにわたし、こんどはお皿と包丁を取り出しました。こんなにいろいろ、どうやってあの袋から出てきたものやら、アリスには見当もつきません。まるで手品みたいだわ、とアリスは思いました。

この間に、ライオンも加わりました。とっても疲れて眠そうで、目が半分とじてます。「なんだあ、こりゃあ！」と、めんどくさそうにアリスに向かって目をぼくりさせながら、おっきな鐘がなるみたい、深いがらんだ調子でしゃべりました。

「さあ、いったいぜんたい何でしょうか！」と^{ユニコーン}一角獣はうれしそうに叫びます。「絶対にあたりっこないね。このおれだってわかんなかったもん」



ライオンは、めんどくさそうにアリスをながめました。「おまえ、動物？——植物？——それとも鉱物？」と、一言おきにあくびをしながら言います。

「空想上の怪物だぜ！」アリスが返事をする前に、^{ユニコーン}一角獣が叫びました。

「じゃあ怪物くん、すももケーキを切り分けてくれよ」とライオンは、ごろごろ横になって、あごを前足にのせます。「それと二人ともすわれよ」（と王さまと一角獣^{ユニコーン}に言います）。「ケーキではフェアプレーな！」

王さまは、でっかい生き物二ひきの間にすわらされて、どう見てもすごくいごち悪そうでした。でも、ほかに場所がありません。

「さ、これでやっと、王冠めぐって本気で大げんかできようってもんだな！」と一角獣^{ユニコーン}が、意味ありげに王冠を見あげながら言いました。かわいそうな王さまは、ぶるぶるふるえすぎて、頭から王冠がほとんど落ちそうになってます。

「おれがあっさり勝つだろよ」とライオン。

「ほう、そいつあどうかな」と一角獣^{ユニコーン}。

「なんだと、街中随所^{ずいしょ}でボコボコにしてやる、この根性なしめが！」とライオンは怒ったように答えつつ、立ち上がりかけます。

ここで王さまが、口論の続くのをとめるためにわりこみました。とっても心配そうで、声がすごくふるえています。「街中随所^{ずいしょ}で、ですと？ それはかなりの道のりであろう。あの古い橋や、市場の横は通ったかな？ 古い橋のたもとがいちばん景色のいいところじゃからの」

ライオンはうなりながら、またねっころがりました。「おれにわかるわけねえだろが。ほこりまみれで、なんにも見えやしねえ。おい怪物くんよお、ケーキ切るのにいつまでかかってんの！」

アリスは小川のほとりにすわりこんで、ひざにおっきなお皿をのせて、ナイフでいっしょうけんめい切っておりました。「すごく頭にくるのよ！」とライオンに答えます（もう「怪物」よばわりされるのはなれちゃいました）。「切っても切っても、またくっついちゃうの！」

一角獣^{ユニコーン}が言います。「鏡の国のケーキの扱いを知らねえな。まずみんなに配って、その後で切るんよ」

これはまったくのナンセンスに聞こえましたが、アリスはさからわずに立ちあがってお皿をまわすと、ケーキは自分で三切れにわかれてくれました。「それから切りなよ」と、空っぽのお皿を持って自分の場所に帰ったアリスに、ライオンが言いました。

「おいおい、こんなの不公平だぞ！」どうやって切ればいいのか、アリスがナイフを手にとほうにくれているところへ、一角獣^{ユニコーン}が言います。「怪物ったら、ライオンにはおれの倍もくれてやるじゃないか！」

ライオンが言います。「だけど、自分にはぜんぜん残さなかったぜ。おい怪物くん、すももケーキは好きか？」

でもアリスがこたえるより先に、太鼓が鳴り出しました。

その音がどこから出てきたのか、アリスには見当がつきませんでした。あたり一面、太鼓の音でいっぱい、それがアリスの頭の中になりひびいて、ほかに何も聞こえない感じです。アリスはこ

わさのあまり、たちあがって小川を飛び越え、

*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*

そして見るとちょうど、
ライオンと^{ユニコーン}一角獣も、宴
会をじゃまされて怒った
表情で立ちあがるところ
でした。アリスはひざを
ついて耳を手で覆い、す
さまじい太鼓の轟音をな
んとか閉め出そうとしま
すが、むだでした。

「ライオンも^{ユニコーン}一角獣も、
あの太鼓で街から叩きだ
されなければ、もうほか
にたたきだしようがない
でしょうよ！」とアリス
は思いました。



第8章 「ぼくならではの発明」

しばらくすると、騒音はだんだん小さくなってくるようで、やがてあたりはシーンとしずまり、アリスはびくっとして顔をあげました。あたりにはだれ一人見あたらず、最初に思ったのは、ライオンや一角獣やあのへんてこなアングロサクソン伝令たちのことは、ただの夢だったんじゃないか、ということでした。でも、あのおっきなお皿がまだ足下にくっついていました。あのすももケーキを切ろうとしていたお皿です。アリスはつぶやきました。「じゃあ、あれは夢じゃなかったんだわ。ただし——ただしこれがみんな、同じ夢の続きなら別だけど。でもこれがあたしの夢で、赤の王さまの夢じゃありませんように！ ほかの人の夢の中にいるなんて、いやなもの」そしてちょっと文句を言うような調子でつけ加えました。「いって起こしてみて、何がおこるかぜひとも見てみたいわ！」

このとき、おっきな声になり声がして、アリスの考えが中断しました。「アホイ！ アホイ！ 王手！」そして真紅の甲冑を着た騎士が、おっきなこん棒をふりまわしながら、馬でパカパカとこっちにやってきます。目の前まできたときに、馬が急にとまりました。「これできみはぼくの捕虜だ！」と言いながら、騎士は馬からころげおちました。

びっくりはしていたものの、その時のアリスは、自分のことよりも騎士の身を思って縮み上がって、馬にのりなおすのをずいぶんと心配しながらながめたのでした。しっかりと鞍にまたがりなおすと同時に、騎士はまた「これできみは——」と繰り返しはじめましたが、そこで別の声が「アホイ！ アホイ！ 王手！」とそれをさえぎって、アリスはちょっとおどろいてあたりを見まわして、新しい敵をさがしました。

こんどやってきたのは白の騎士でした。アリスのとなりに馬をつけると、赤の騎士とまったく同じように、馬から転げ落ちました。それからまたまたがりなおし、そして騎士二人は、なにも言わずにしばらくにらみあっていました。アリスはちょっとうろたえつつ、二人を交互に見つめます。

「この子はぼくの捕虜なんだからな！」とうとう赤の騎士が申しました。

「うん、でもそこへぼくがやってきて、この子を救いだしたんだぞ！」と白の騎士が答えました。

「ふん、それならこの子をめぐるって決闘だな」と赤の騎士はかぶとを手に取り（これは鞍の横にぶらさがっていて、なにやら馬の頭みたいじゃなかった）、それをかぶりしました。

「決闘の規則はもちろん守るだろうな」と白の騎士もかぶとをかぶります。

「いつも守る」と赤の騎士。そして二人はお互いにすさまじい勢いでなぐりあいはじめたのでア



リスは木の陰にかくれて、ふりまわすこん棒に当たらないようにしました。

アリスは、おっかなびっくり隠れ場所からのぞいて、決闘を見物しながらつぶやきました。「さてさて、決闘の規則ってなんなんだろ。規則その一は、片っぱの騎士の一撃が相手にあたったら、相手は馬から転げおちて、はずれたら自分が馬から転げ落ちるってことみたい——それと別の規則は、どっちもこん棒を、指人形みたいに腕で持つってことみたいだわ——転げ落ちるとき、どっちもすごい音をたてるんだなあ。まるで火かき棒の束をまるごと鉄格子の中に落としたみたい！

それと、馬たちはすごくおとなしいのね。まるでテーブルみたいにじっとして、二人が落ちたりまたがってりしてもぜんぜん動かないわ！」

アリスの気がつかなかったもう一つの決闘の規則は、落ちるときには必ず頭から落ちるということのようでした。そして二人がそうやって、仲よくならんで落っこちて決闘は終わりました。そして二人は立ちあがると、握手して、そして赤の騎士は馬にまたがると、パカパカと走り去っていき

ました。

「輝かしい勝利だっただろう！」と白の騎士^{ナイト}は、ぜいぜい言いながら近寄ってきました。

「わかんない」とアリスは疑わしそうに言いました。「あたし、だれの捕虜にもなりたくない。女王さまになりたいの」

「うん、なれるよ。次の小川をこえればね。ぼくが森のはしまで安全に送ってあげよう——そしたらぼくはもどんなきゃ。それがぼくの動きのおしまいだから」と白の騎士^{ナイト}が申します。

「ありがとうございます。かぶとをぬぐの、おてつだいしましょうか？」明らかに、騎士^{ナイト}一人では手にあまることのようにでした。が、アリスはなんとかいっしょうけんめいゆすって、やっと騎士^{ナイト}のかぶとをぬがせるのに成功しました。

「これでやっと楽に呼吸ができる」と騎士^{ナイト}は、ぼさぼさの頭を両手でうしろになでつけて、やさしそうな顔と、おっきくておだやかな目をアリスのほうに向けました。こんな変なかつこうの兵隊さんは、これまで見たことないや、とアリスは思いました。

身につけた甲冑はブリキで、どうもぜんぜんからだにあっていないようです。さらに肩からは変な形の木の小箱がかかっていて、それが逆さまで、ふたがぶらぶらと開いたままぶら下がっています。アリスは、すごくおもしろがってそれをながめました。

「見たところ、ぼくの小箱に感動してるようですね。それ、ぼくならではの発明なんですよ——服とかサンドイッチとかを入れとくんです。さかさにして運ぶのはですね、雨が中に入らないようにするためなんです」

「でも、中のものが外に出ちゃうでしょう。ふたが開いてるの、知ってました？」とアリスが優しく指摘しました。

「知らなかった」と騎士^{ナイト}は、ちょっと困ったような顔色を浮かべて申しました。「じゃあ、中のものも全部こぼれちゃったはずだ！ 中身がなけりゃ、箱もなんの役にもたたない」と言いながら騎士^{ナイト}は小箱を鞍からはずして、まさにしげみに投げ込もうとしたところでいきなり何か思いついたらしく、慎重に木にぶら下げました。そして「なぜああしたか、わかる？」とアリスに申します。

アリスは、首を横にふりました。

「ハチが中に巣をつくるといいな、と思ったから——そうしたらハチミツが手に入るでしょう」

「でも、ハチの巣ならもう持ってるじゃないですか——少なくともそれらしいものを。ほら、鞍にゆわえてある」とアリス。

「うん、それもすごくいいハチの巣なんだよ」と騎士^{ナイト}は、不満そうな声でいいました。「もう最高級品。それなのに、ハチの一匹たりとも、近寄ってきさえしないんだよ。それともう一つ、ねずみ取りも。ネズミのせいでハチがこないのかも——それともハチのせいでネズミがこないのかな。どっちかわからないけど」

「ええ、ねずみ取りはちょうどふしぎに思ってたところです。馬の背にネズミがいるなんて、あま

りありそうにないと思ったから」とアリス。

「あまりありそうにない、かもしれないけど、でも万が一きたら、そこらじゅう走り回られちゃかなわないでしょうに」と騎士^{ナイト}。そしてちょっと間をおいてから続けます。「つまりね、あらゆる事態にそなえておくのがだいじなわけ。だからこの馬は、足のまわりにあんなに金具をつけてるんだよ」

「でも、なんのためのものなんですか？」アリスは興味津々といった声でできました。

騎士^{ナイト}は答えました。「サメにかまれるのをふせぐため。ぼくならではの発明なんだよ。さあ、馬に乗るのをてつだって。森のはしまで送ってあげよう——そのお皿はなんのお皿？」

「すももケーキ用だったんですけど」とアリス。

「いっしょに持ってたほうがいいね。すももケーキが見つかったときに便利だから。このふくろに入れるのを手伝ってよ」

これはずいぶんと長い時間がかかりました。アリスはとっても気をつけて袋の口を開いていたのですが、騎士^{ナイト}がお皿をいれるのに、まったくとんでもなくぶきちょだったからです。最初の二、三回は、お皿を入れようとして自分が袋の中におこちてしまいました。「なかなかおさまりがきついからねえ」やっと入れ終えたときに騎士^{ナイト}が申します。「袋の中にはロウソクがいっぱい入ってるもので」そして袋を鞍にぶらさげました。そこにはすでに、ニンジンの束や暖炉の金具や、その他いろいろなものでいっぱいです。

「きみの髪の毛は、しっかり頭にくっついてるといいけど」また動き出したときに、騎士は続けて申しました。

「まあ、ごくふつうにくっついてますけど」とアリスは、笑いながら答えます。

騎士は心配そうです。「それじゃじゅうぶんとは言えないな。だってここでは、風が実にものすごく強いんだよ。もうスープみたいに強いんだからね」

「髪が吹き飛ばされないようにする計画は発明なさったんですか？」とアリスはきいてみました。

「いやまだ。でも、髪の毛が落っこちないようにするための計画ならあるよ」

「ぜひ聞かせてくださいな」とアリス。

騎士は申します。「まず、棒を立てるよね。それから、髪の毛をそれに沿って、こう上向きにつたい上がらせるんだよ、果物の樹みたいに。さて、髪が落ちるのは、それが下向きにぶら下がっているからだろう——上向きに落ちるものなんてないからね。こいつはぼくならではの発明による仕組みだよ。気に入ったら試してくれていい」

あまり快適な仕組みじゃあなさそうね、とアリスは考え、数分ほどこのアイデアに頭をなやませつつ、だまって歩いていましたが、でもしゅっちゅう立ち止まっては、かわいそうな騎士を助け起こしてあげなきゃなりませんでした。この騎士は、どう見ても馬に乗るのがへたくそです。

馬がとまるたんびに（というのはかなりしゅっちゅうでした）、騎士は前に転げ落ちます。そし

て馬が動き出すたびに（馬はこれを、かなり急にやるのでした）騎士はうしろに転げ落ちます。それ以外は、そこそこ馬に乗っていられるのですが、ただクセなのか、なんだかんだと横に転がり落ちるのです。しかも転がり落ちてくるのは、たいがいアリスの歩いている側だったので、アリスはじきに、あんまり馬の近くを歩きすぎるのは、やめといったほうがいいな、とわかったのです。



「馬に乗るの、どうもあんまり練習なさってないんですね」
五回目にころげおちた騎士を、馬上に助け上げながら、アリスはついに思い切って言ってみました。

騎士はこう言われてとってもびっくりしたようすで、それにちょっとムツとしたようです。「どうしてそんなふう思うね？」そういいながら騎士は鞍になんとか戻り、その間片手でアリスの髪の毛をつかんで、反対側に落ちないようにしていました。

「だって、いっぱい練習した人は、そんなにしょっちゅう落っこちたりしないもの」

「ぼくだって、たっぷり練習はしてる」と騎士^{ナイト}はとっても重々しく申しました。「それはもうたっぷりとね！」

アリスは「まあそうですか」以上のせりふを思いつきませんでした。これをなるべく心をこめて申しました。二人はその後ちょっとばかりだまって進みました。騎士^{ナイト}は目を閉じてぶつぶつぶつぶやいていますし、アリスは、いつまた騎士^{ナイト}が転げ落ちるか、ハラハラしながら見守っています。

突然、騎士は右腕をふりまわしながら大声を張り上げました。「乗馬の極意というものはだね、こうして――」そこで文章は、始まったのと同じくらいいきなり終わりました。というのも騎士は、まさにアリスの道筋の真ん前に、頭から思いっきりころげ落ちたからです。こんどはアリスもかなりおびえました。そして騎士を助け起こしながら、心配そうに申します。「骨、折れたりしてませんか？」

「あえて言うほどのものは一つも」と騎士は、二三本なら折ってもかまわないとでも言いたげに

申しました。「乗馬の極意というのはだね、さっきぼくが言いかけていたように——こう、バランスをしっかりと保つことなんだ。ほら、こんなふう——」

騎士は手綱を放して、両手をひろげて見せ、アリスに言わんとするところを示そうとします。そしてこんどは、背中からベタッと、馬の脚の間に落っこちてしまいました。

「練習ならたっぷり！」アリスに立ちあがらせてもらながらも、騎士は繰り返し続けました。「練習ならたっぷり！」

「ちょっとどうしようもなさ過ぎるわ！」アリスはもうがまんできなくなって叫びました。「車輪のついた木馬にすればいいのよ、まったく！」

「それってガタガタしないで進む？」と騎士は、ひどく興味を覚えたようにたずねます。そしてそう言いつつも、馬の首にあわてて抱きついて、かろうじてまた落っこちるのを防いだのでした。

「ええ、生きた馬よりはずっと」とアリスは、必死でこらえながらもつつい笑い声をあげてしまいました。

「一つ手に入れることにしよう」と騎士は、考えこんでつぶやきました。「一つか二つ——いくつか」

その後、しばらく沈黙が続いて、それから騎士がまた続けます。「ぼくは発明にかけてはすごい腕のもちぬしなんだ。で、気がついたと思うけれど、さっき引っ張り上げてくれたとき、ぼく、ちょっと考え深そうな様子をしてただろ？」

「そういえばちょっと重々しかった」とアリス。

「うん、ちょうど門を乗り越える新しい方法を発明してるところだったわけ——聴きたい？」

「ええ、ぜひぜひ」アリスはとても礼儀正しいのです。

「どうして思いついたか話してあげよう。つまりね、こう考えたわけ：『むずかしいのは足だけだ。頭はもうじゅうぶん高いところにあるから』。だから、まず頭を門のてっぺんにのっける——それからさかだちをする——すると、足もじゅうぶんにも高くなるよね——そしたら門を越えられたことになる」

「ええ、それができたら、越えたことになるでしょうねえ」アリスは考えこんで申しました。「でもそれって、ちょっとむずかしいと思いませんか？」

騎士は重々しく答えます。「まだ試していないから、確実なことは言えないけど——でも確かに、ちょっとはむずかしいかもしれないねえ」

騎士はそれを考えてずいぶんいらだっているようだったので、アリスはあわてて話をそらしました。「すごく変わったかぶとですねえ！ これもご自身の発明なんですかあ？」と明るくたずねます。

騎士はほこらしげに、鞍からぶら下がっているかぶとを見おろしました。「そうだよ。でも、これよりもっといいのを発明したことがある——おさとうのかかったパンみたいなやつ。それをか

ぶっていると、馬から落ちて、それが直接地面にふれてる。だから、落ちる距離もすごく短くてすんだわけ——でも、確かにそのかぶとそのものの中に落っこちる危険は確かにあってね。一度そういうことがあって——しかも最悪だったのは、ぼくがそこから出られる前に、もう一人の白の騎士^{ナイト}がやってきて、それをかぶっちゃったんだ。じぶんのかぶとだと思って」

騎士はこれをずいぶんと荘厳な様子で申しますので、アリスは死んでも笑っちゃいけないと思いました。でも、つつい声^{つつい}がふるえてしまいます。「そしたら、相手の方をけがさせちゃったんじゃないですか？ だってその方の頭^{あたま}のてっぺんにいたんですもの」

「もちろん、けとばさなきゃダメだった」騎士はもう真剣そのものです。「そしたらあいつもかぶとを脱いでくれたんだけど——でも、ぼくを出してくれるのに、もう何時間もかかっちゃってね。もうはまりかたがきつかったもので——お酢^{すく}のにおいみたいだね」

「でもそれって、『きつい』がちがうでしょう」アリスは反論します。

騎士は首を横にふりました。「ぼくの場合は、いろんなきつさだったんだよ、これは保証してもいい！」こう言いながら、ちょっと興奮して両手をあげ、そしてすぐさま鞍から転げて、深いみぞに頭からつつこんでしまいました。



アリスはみぞの縁にかけていって、騎士を捜してみました。いまの落下にはちょっと驚かされたのです。というのも、その前のしばらくは、なかなか上手に馬にのったままになっていたし、こん

どこそはけがをしたんじゃないか、と思ってしまったからです。でも、見えるのは騎士の足の裏だけでしたが、でもいつもの調子で騎士がしゃべっているのがきこえて、アリスはとてもほっとしました。「いろんなきつさ、ね。でもあいつも他の人のかぶとをかぶるなんて、不注意もはなはだし——それも中に人が入ってるのをかぶるなんて」

「頭を下にして、いったいどうしてそんなにおちついてしゃべってられるんですか？」とアリスは、騎士の足をつかんでひきずり出して、土手にぐったりと横たわせてあげながらきいてみました。

騎士は、この質問におどろいたようでした。「ぼくの体がたまたまどこにあったって、関係ないでしょう。頭はぜんぜん変わらずにはたらき続けるんだよ。いや実は、頭が下にあればあるほど、新しいものをどんどん発明できるんだよ」

ちょっと間をおいて、騎士は続けます。「さてぼくがやったその手のことでいちばん賢いのが、ごはんで肉料理を食べてる間に、新しいプリンを発明したことだったのね」

「そのごはんのデザートに間に合うように思いついたんですか？」とアリス。

「いや、そのごはんのデザートは無理だよ」と騎士は、ゆっくり考え深げに申します。「いやいや、まさかそのごはんのデザートはね」

「じゃあ、その次の日になっちゃったんですね。一回のごはんで、デザート二回は無理ですね」

「うん、いいや次の日でもなかったな」と騎士は、さっきのように繰り返します。「いやいや次の日ではね。いや実は」と頭を下げて、そして声をどんどん落としてしながら続けます。「実はあのプリンが実際に料理されたことはないと思うんだよ。それどころか、そのプリンはこれからだって、ぜったい料理されることはないと思うよ！ それでも、発明するのに実に巧みなプリンではあったわけ」

「それって、何でつくるつもりだったんですか？」とアリスは、騎士を元気づけようとしてきいてみました。かわいそうな騎士さんは、このことでかなり落ち込んでいるみたいだったからです。

「まずは吸い取り紙を用意しまして」と騎士は、うめきながら答えます。

「それじゃあんまりおいしくなさそう——」

「それだけなら、そりゃおいしくないよ」騎士は喜々としてわりこみました。「でも他のものと混ぜると、もうぜんぜんちがってくるんだよ——火薬とか、封蝋なんかと混ぜるの。で、ここでお別れだ」二人はちょうど森のはずれまでやってきたのでした。

アリスは、ぽかーんとした顔をするしかありませんでした。なんせ、プリンのことを考えていたもので。

「悲しいんだね」と騎士は心配そうに申します。「歌をうたってなぐさめてあげよう」

「すごく長いですか？」とアリスはたずねました。その日は、もうずいぶんたくさん詩をきかさ

れてきたからです。

騎士^{ナイト}は言いました。「長い。でも、それはそれはきれいなんだ。ぼくが歌うのを聞いた人はみんな——みんな目に涙を浮かべるか、それとも——」

「それともなに？」とアリス。騎士^{ナイト}が急に口を止めたからです。

「それとも浮かべないか、だよ。この歌の名前は『タラの目』と呼ばれてるんだ」

「ふーん、そういう名前なんですかぁ」とアリスは、なんとか興味を持とうと努力して申しました。

騎士^{ナイト}はちょっといらいらしたようすで言います。「いやちがうよ、わかんないかな。それは歌の名前がそう呼ばれているっていう話。名前そのものは『すぐく歳寄りの男』なんだ」

「じゃあ、『その歌はそう呼ばれてるんですかぁ』って言うべきだったのね、あたしは」とアリスは自分を訂正しました。

「いいや、べきじゃない。そりゃまったく別の話だよ！ 歌は『方法と手段』って呼ばれてるんだ。でも、これはそれがそう呼ばれてるってだけなんだよ、わかる？」

「じゃあそれなら結局、歌そのものはいったいなんなの？」この時点でアリスは、もう完全に頭がこんがらがっていました。

「いま説明しようとしてたところ。歌そのものは『門にすわって』なんだよ。そしてメロディはぼくならではの発明なんだ」

そう言いながら、騎士は馬を止めて、手綱をはなして馬の首にかけました。そして、片手でゆくりと拍子を取りながら、自分の歌の音楽を楽しんでいるかように、優しいへんてこな顔を軽い微笑でかがやかせつつ、歌い出したのでした。

鏡の国の道中で、アリスはいろいろふうがわりなものを見てきました。でもずっと後までいちばんくっきり心に残ったのが、この光景でした。何年もたってからでも、アリスはこの場面を丸ごと、ついきのうのできごとみたいにそっくり思い出せたのです——騎士^{ナイト}の穏やかな青い目と優しいなほほえみ——夕日^{ナイト}がその髪の毛ごしにぎらついて、甲冑にはねかえった強い光で目がくらくらしたこと——馬が静かにうろうろして、手綱をゆるく首からぶら下げつつ足下の草をかじっているところ——そして背後の森の黒い影——そのすべてを、アリスは写真みたいにとりこんだのでした。片手を額にかざして、木にもたれながらその不思議な騎士^{ナイト}と馬のペアをながめ、夢うつつで歌の悲しげな音楽に耳を傾けながら。

「でも、この曲ってぜったいにこの人ならではの発明なんかじゃないわ。これって『I GIVE THEE ALL, I CAN NO MORE』の曲だもん」とアリスは思いました。そして立って、いっしょうけんめい聴いたのですが、目にはぜんぜん涙が浮かんでできませんでした。

「汝になるべくすべてを話そう

伝えることはほんの少し。
ぼくは門にすわった
すごく年寄りの男を見かけた。
『お年寄り、あなたはだれ』とぼくはたずねる
『そしてあなたのお仕事は？』
そしておじいさんの答はぼくの頭を
ざるに入れた水みたいに流れ落ちる。

おじいさん曰く『わしは小麦の中に眠る
チョウチョたちを探しとる。
それをマトンのパイにして
道ばたにて売りさばく。
そしてそれを売る相手たちは
嵐の海をわたる男たち
そうやってわしは糊口をしのぐ——
ちょいとばかり、とというものの』

でもそのときぼくが考えてたのは
ヒゲを緑に染めること
そしてなるべくでかいうちわを使い
それをいつも隠すこと。
だからおじいさんのことばに対し
ぼくは返すことばもなく
『ねえ、あなたのお仕事は？』と叫び
そしておじいさんの頭をたたく。

するとやさしい口調で始まるお話：
『わしはあちこちでかけて
山の小川を見つけると
そいつをはでにふき飛ばし
ロランド・マカサー育毛油なる
代物をこしらえる——
それだけ苦労してもらえるのは

たったの二ペンス半ばかりなり』

でもそのときぼくが考えてたのは

練り粉を食事にして

毎日毎日そうやって

ちょっとずつ太ること。

ぼくはおじいさんが青くなるまで

左右にゆすりまわし

『ねえ、どういう暮らしをしているの？

どんなお仕事か教えてよ！』と叫ぶ。



『わしはまばゆいヒースの中で

タラの目を探す
そして静かな夜に
それをチョッキのボタンに仕上げ
それは金でも売らないし
ピカピカ銀貨でも売りゃしない
お代は銅貨たったの半ペニー
それだけで九個も買えるのじゃ』

『ときにはバターロールを探して地面を掘り
あるいはトリモチ枝をカニに仕掛け
ときにはハンサム馬車の車輪を求め
草しげる小山を探す。
そしてわしはそうにして』（とここでウィンク）
『富を得ておりまして――
そして貴殿の尊き健康を祈って
喜んで一杯おごられましょうぞ』

やっとおじいさんの話がきこえたのは
メナイ橋をワインで煮立て
さびないようにするために
仕掛けをついに完成させたから。
富の得かたを教えてくれて
ぼくはおじいさんにお礼を述べた
でもそれは主に、ぼくの尊き健康に
乾杯したいという願いのためだったけど。

そしていま、ふとしたひょうしに
指をのりにつっこんだり
いっしょうけんめい右足を
左のくつにおしこんだり
すごく重たいものを
つま先に落としたりするたびに
ぼくはかつて知っていたあの

おじいさんを思い出しては泣く――

その姿やさしく、口振りのろく
 髪は雪よりも白くて
 顔はまるでカラスみたいで
 目はストーブみたいにランランと
 心労で胸がいっぱいみたいで
 体を前へ後ろへとゆすり
 口に練り粉が詰まったみたいに
 ぶつぶつ小声でつぶやく
 バッファローみたいなびきの

あのずっと昔の夏の午後
 門にすわってたあのおじいさんを」

騎士^{ナイト}は、バラッドの最後のせりふを歌い終えると、手綱をまとめて馬の首を、これまで来た道の方
 方向に向かせました。「きみはあと数メートル行けばいいだけだよ。丘をおりて、あの小川を越え
 たら、そしたらきみは女王さまだ――でも、まずちょっと残って、ぼくを見送ってもらえないかな」
 指さした方向へ、アリスがいそいそと向き直ったのをみて、騎士^{ナイト}はつけくわえました。「そんなに
 長くはかからないよ。待ってて、ぼくがあの曲がり角まできたら、ハンカチをふってくれるよね。
 そうしたら、ぼくも元気が出ると思うんだ」

「もちろん見えなくなるまで待ちます。それと、こんなに遠くまできてくれてホントにありがと
 う――それとあの歌だけど――すごく気に入りました」とアリス。

「そうだといいいんだけど。でもきみ、思ったほど泣かなかったよね」と騎士^{ナイト}は疑わしそうに申し
 ます。

というわけで二人は握手して、騎士^{ナイト}はゆっくりと森のなかへ馬を進めました。「単に見えなくな
 るまでなら、実はすぐかもね。どうせまた落っこちるだろうから」とアリスは、立って見送りなが
 らつぶやきました。「ほーらまた！ 例によって頭から！ でも、馬にのりなおすのはかなり楽み
 たい――あんなにいろいろ馬にぶらさげてあるおかげだな――」こんな具合につぶやきながら、ア
 リスはゆっくり歩み去る馬と、そして騎士^{ナイト}が片方へ、そしてまた反対側へと転げ落ちるのをながめ
 ました。四回目か五回目に落ちた頃に曲がり角についたので、アリスはハンカチをふってあげて、
 そして騎士^{ナイト}が見えなくなるまで待ったのでした。

「あれで元気を出してくれたらいいんだけど」とつぶやきながら、アリスは身をひるがえして丘をかけおりました。「そしてこれが最後の小川、それで女王^{クイーン}さまになるんだ！　すごく豪華なひびき！」ほんの数歩で、小川のふちまでやってきて、そしてまさに跳びこえようとしたときに、深いため息が聞こえたのでした。どうやら後ろの森の中から聞こえてくるようです。

「あそこに、すごく不幸せな人がいるんだわ」とアリスは、心配そうにふりかえって、どうしたのかなと見てみました。なんだかとてもお歳よりみたいな男の人（といっても顔はむしろすずめばちみただったのですが）が地面にすわりこんで木にもたれ、うずくまって、とても寒いみたいにふるえています。

「たぶんあの人には、なんの役にもたってあげられないと思うんだけど」というのが、小川を跳びこえようとしてまたふり返ったアリスの頭にまず浮かんだことでした——「でも、どうしたんですか、くらいはきいてあげよう」とアリスは小川のふちギリギリのところで思いなおしてつけくわえました。「いったん跳びこえちゃったら、なにもかも変わっちゃって、そしたらもう助けてあげられないもの」

そこでアリスはすずめばちのところに戻りました——あまり気乗りはしませんでした。だって、すごく女王さまになりたくてたまらなかったからです。

「ああ、我が老骨や、老骨や！」アリスが近づくと、すずめばちはブツブツ言っています。

「たぶんリューマチ、でしょうねえ」とアリスは思って、すずめばちの上に身をかがめて、とても親切な声で言いました。「痛みがあまりおひどくないといいんですけれど？」すずめばちは肩をふるわせて、ぷいっと顔をそむけただけでした。「ああわれながら情けないねえ」とひとりごとを言ってます。アリスは続けました。

「なにかお役にたてることはありませんか？　ここだとちょっと寒くないですか？」

すずめばちは不機嫌そうに申しました。「まったくさっきからごちゃごちゃと！　あーでもないこーでもない！　こんな子、見たことないよ！」

アリスはこの答えにちょっとばかりむかっとして、ほとんどそこを歩み去ってすずめばちを後にするところでした。でもそこで「痛いから機嫌が悪いだけかもしれないわよね」と思って、もう一回試してみることにしました。

「お手伝いしますから、向こう側に回るだけでもなさいませんか？　そこならつめたい風もあたりませんから」

すずめばちはアリスの手をとって、おとなしく手助けしてもらいながら、木の向こうに回りしました。でも落ちつくともた、前と同じようにこう言っただけでした。「あーでもないこーでもない！　こんな年寄りなんざ、ほっとくれりゃいいものを！」

「これ、ちょっと読んでさしあげましょうか？」とアリスは続けながら、すずめばちの足下にあった新聞を手に取りました。

スズメバチは、かなりつつけんどんに申します。「読むだけの頭があるんなら、読んだらいいだろうに。だれがじゃましてるわけでなし、少なくともワシの知る限り」

そこでアリスはスズメバチの横にすわって、ひざに新聞をひろげて読み出しました。「最新ニュース。探検隊はまたもや食品だなに遠征を行って、新たな白砂糖のかたまり五つを発見。いずれも大きく、良好な状態だとのこと。帰還途中には――」

「黒砂糖はなかったかの？」スズメバチが割りこみます。

アリスはいそいで新聞に目を走らせました。「いいえ。黒砂糖のことは何も書いてないです」

「黒砂糖なし、だと！ いやはや大した探検隊なこと！」スズメバチはぶつくさと申しました。

アリスは先を読み続けました。「帰還途中には、一行は糖蜜の湖を発見。湖の岸辺は青と白で、瀬戸物製のように見受けられた。糖蜜を試食中に、一行は悲しい惨事に襲われた。隊員二名が湖にぬみこまれ――」

「湖になんだって？」スズメバチが、とっても怒ったような声でたずねました。

「ぬ、み、こ、ま、れ」とアリスは、ことばを一文字ごとに切ってくり返しました。

「そんな日本語、ありゃせんわい！」とすずめばち。

「でもこの新聞にはあります」とアリスは、ちょっと自信なさそうに言いました。

「そんなくらいで、もうやめ！」とすずめばちは頭をいらだたしように、ぷいっとそむけます。

アリスは新聞をおきました。そして、なだめるような口調で申します。「あの、お加減が悪いようですね。なにかあたしにできることって、あったりします？」

「なにもかも、このかつらがことの起こりでな」とすずめばちは、ぐっと優しい声で言いました。

「かつらがことの起こり、ですか」とアリスはくり返しながら、機嫌がなおりはじめているのでうれしく思いました。

「あんただって腹もたつわな、ワシのみたいなかつらをしてりゃあ」とすずめばちは続けます。「もの笑いのタネよ。んでもってこっちは悩んじまう。んでもって腹もたってきちまう。んでもって寒くなってきちまう。んでもって木の下にきちまう。んでもって黄色いハンカチ出しちまう。んでもって顔をしばっちまう――いまこうやってるみたいにな」

アリスはかわいそうに、という顔つきですずめばちを見ました。「顔をしばるのって、虫歯の痛いのもすごくいいんですよね」

「んでもって、ゴーマンにもすごくいいぞ」とすずめばちがつけ加えます。

アリスは、そのことばがよくわかりませんでした。「それって、虫歯の一種ですか？」

すずめばちは、ちょっと考えこみました。「うーん、ちゃうな。あれは、頭を持ち上げるじゃろ――こーんな具合に――んでもって首を曲げないことじゃ」

「ああ、首のつっぱりのことですか」とアリス。

「いまどきのしゃれた言い方じゃそうかもしれんが。わしの頃には、ゴーマンと叫ぶとった」

「ゴーマンならぜんぜん病気じゃないでしょう」とアリス。

「病気だとも。あんたもかかったらわかる。んでもって、かかったときには、顔を黄色いハンカチでしばって見ろや。たちまちなおちまうっから！」

そう言いながらすずめばちはハンカチをほどきました。アリスはその下のかつらを見て、すぐくびくりました。ハンカチと同じ真っ黄色で、海藻のかたまりみたいに、もつれてぼさぼさです。「くしで^す梳けば、そのかつらもずっときちんとなりますよ」とアリス。

「なに、あんたみつばちか、え？」とすずめばちは、急に興味を示してアリスをながめました。「んでもって、巣がどうしたって？ はちみつはいっぱいあるんか？」

アリスはあわてて説明しました。「そういう巣じゃないです。だから、髪を、くしで梳けば——そのかつらって、かなりぼさぼさですもん、ね？」

「どうしてこのかつらをするようになったか、話しちゃろ。わしが若い頃はな、巻き毛もふさふさと——」

アリスは、かわったことを思いつきました。これまで会った人たちはみんな、詩を暗唱してくれましたので、このすずめばちもやってくれるかな、と思ったのです。「それ、詩にして言っただけませんか？」アリスはとつてもていねいにお願いしました。「わしもあんましやりつけちゃいねえんだが、でもやってみようかね。ちょい待ってな」そしてしばらくだまってから、すずめばちはまた口を開きました——

「わかい頃には、巻き毛もふさふさ
頭のうえでカールし波うつ
するとみんなが『頭を刺って
かわりに黄色いかつらをしねえ』

でもわしがそのとおりにしたら
そしてそれをみんなが見たら
みんなが期待したほどには
わしがそんなにすてきじゃないだと

かつらが頭にあってなくて
だからすごく平凡に見えると
でもわしにいったいどうしろと、え？
巻き毛は二度とははえちゃこぬ

そしていまや老いたるこの身
 そして髪もほとんどなくなり
 やつらはわしのかつらを奪い
 『なんでこんなクズをしてる?』だと

なのにまだ、わしが姿を見せると
 やつらはわしを笑って『ブタ!』と
 そしてやつらがそうするわけは
 わしが黄色いかつらをしてるから」

「それあとおてもお気の毒です」とアリスは心から申しました。「それに、かつらがもうちょっときちんとあってたら、そんなにみんなにからかわれないんでしょうね」

「あんたのかつらはとおてもおさまりがいいな」とすずめばちはつぶやきながら、感心したような顔つきでアリスをながめます。「あんたん頭のカッコがおかげかね。あごはあんた、あんましいカッコじゃねえな——あんましじょうずに噛めないと思うが、どうじゃ?」

アリスはかん高い笑い声をあげましたが、それをできるだけうまく、せきにしてごまかしました。「なんでも噛めますよ」

すずめばちはゆずりません。「そんなちっこい口で噛めるもんかい。あんたがけんかしてたとするわな——相手の首のうしろを、そのあごでおさえこめるもんかいな」

「無理でしょうね」とアリス。

「それみい、そりゃあんた、あんたのあごが短かすぎっからじゃよ」とすずめばちは続けました。「でも頭のとっぺんは、すてきにまんまるだな、あんた」そう言いながら、すずめばちはかつらをとって、アリスのほうにツメをのぼして同じようにアリスの髪の毛をむしり取りたいようでした。でもアリスは、手の届かないところに立って、その誘いにはのらないようにしました。そこですずめばちは、批評を続けます。

「それとあんたの目だが——前んほうにつきすぎてんのはまちがいないやね。そんなくつついてるんなら、二つなくったって一つでじゅうぶん——」

アリスは、自分についてこんなにあれこれ個人的なことを言われるのはいやでしたし、それにすずめばちがかなり元気になってきて、そしてずいぶんとおしゃべりになってきたので、そろそろお別れしてもだいじょうぶかな、とも思いました。「そろそろいなくなっちゃ。さよなら」

「さいなら、それとあんがとよ」とすずめばちは申しまして、アリスはまた丘をとことこと下りてゆきました。戻って数分かけて、あのかわいそうなお歳よりの生き物の機嫌をなおしてあげたことで、とてもうれしかったのでした。

「ついに八升目！」と叫びながら、アリスは小川をとびこえ、

* * * * * *

* * * * * *

* * * * * *

そしてあちこち小さな花壇のち
らばった、コケのようにやわらかい
芝生に転がって休みました。「ここ
までこれですごうれしい！ それ
と、この頭の上のものはいったいな
に？」アリスはうろたえて声をあげ
てしまいました。頭に手をやると、
なにかとっても重くて、頭にぐるっ
とぴったりはまったものがあったか
らです。

「でも、そうやってこんなもの
が、あたしの知らないうちに頭に
のっかれるのかしら？」とアリスは
つぶやいてそれを持ち上げてはず
し、ひざに載せて、いったいぜんた
いそれがなんなのか見きわめよう
としました。

それは黄金の王冠でした。



第9章 アリス女王

「まあ、これはたしかに豪勢だわ！」とアリス。「こんなにすぐに女王さまになれるとは思わなかった——そして女王陛下、それならあえて申し上げます」ときびしい調子で続けます（アリスはいつだって、自分をしかるのがちょっと好きなのでした）。「そんなふうには、草の上でゴロゴロしてるなんて通りませんよ！　女王さまってもっと威厳がないとダメなんですからね！」

というわけで、アリスは立ちあがって歩き回ってみました——さいしょは、王冠が脱げちゃうんじゃないかと思って、ちょっとぎこちなかったのですが、でもだれも見ている人はいないし、と思って自分を安心させました。そして、またすわりながらこうつぶやきました。「それにもしあたしがほんとうに女王さまなら、いずれこれも立派にできるようになるはずよね」

なにもかも、すごくへんてこに起こっていたので、気がつくやうに赤の女王さまと白の女王さまが、右と左の間近にいつの間にかすわっていても、ぜんぜんおどろきませんでした。いつのまにやってきたんだか、ぜひともきいてみたいとは思いましたが、でもちょっと失礼なんじゃないかな、とこわかったのです。でも、たぶん試合が終わったのか聞いてみても、いけないことはないかな、と思いました。『あの、ちょっと教えていただけないでしょうか——』おずおずと赤の女王さまを見て口を開きます。

「話しかけられるまで口を開くんじゃない！」女王さまは、ぴしゃりとアリスを制しました。

「でも、もしみんながその規則どおりにしたら、そして自分も話しかけるまで口を開かなかったら、そして相手もいつもこっちが口を開くのを待っていたら、ほら、だれも何も言わなくなっちゃって、それで——」アリスはいつだって、ちょっとした議論は大好きなのでした。

女王さまは叫びます。「ばかばかしい！　子供よ、わからぬのか——」ここで顔をしかめて、せりふがとぎれました。そしてしばらく考えこんでから、急に話をそらしました。「さっきの『もしあたしがほんとうに女王さまなら』というのは、どういう意味だえ？　なんの権利があって女王を名乗る？　しかるべき試験に合格するまでは、女王にはなれぬのだからな。そして、ことわざにも言うとおり、試験は急げ。すぐ始めるとしよう」

「『もし』って言うただけです！」かわいそうなアリスは、あわれっぽい調子でうったえました。

女王さま二人は顔を見合わせて、そして赤の女王さまが、ちょっと身震いしながら述べます。「この子は、自分が『もし』と言っただけだと述べておるが——」

「でもそれよりはずっといろんなことを発言しましたわよね！」と白の女王さまが、手をもみく



ちゃんにしながらうめきます。「ほんとうにもう、とてもじゃないけどいろいろと！」

「まさしくその通り、であろうが」と赤の女王さまがアリスに申しました。「いつも正直におっしゃい——口を開く前によく考えて——そしてあとで書き留めておくこと」

「あたしだって別に本気でそんな——」とアリスが切り出しましたが、赤の女王さまがそれをすぐさまえぎります。

「いまそのことで苦情を申しただけであろうが！ ちゃんと本気でなくてはいかんのじゃ！ 本気なしの子供なんて、なんの役もたたないであろう。冗談にすら、多少の本気はあるべきだし——そして子供は、願わくば冗談よりはだいじであってほしいものだがね。おまえだって、たとえ両手を使ってみても、それを否定することは能うまい」

「あたし、手で否定したりしません」アリスは反論しました。

「だれもするなどとは申しとおらぬわ。単に、使っても否定はできないと申したのじゃ」と赤の女王さま。

「その子はねえ、そういうお年頃なんでございますよ。なにかを否定したくてしょうがないんだけれど——でも、何を否定していいかわからない、という！」と白の女王さま。

「性悪で始末におえない気質じゃね」と赤の女王さまが述べます。そして、一分かそこら、とても居心地の悪いだんまりが続きました。

だんまりを破ったのは赤の女王さまで、白の女王さまにこう申しました。「本日午後の、アリス

の晚餐パーティーにご招待しましょう」

白の女王さまは弱々しくほほえみました。「ではわたしも陛下をご招待いたしますわ」

アリスが申します。「あたし、自分が晩餐パーティーをやることになってるなんて、ぜんぜん知りませんでした。でも、もしあるなら、お客様をご招待するのは、あたしのはずだと思んですけど」

「それをやる機会は与えてやったのじゃがの、でもおまえ、あえて申せばまだ礼儀作法の授業はあまり受けておらぬであろうが」

「礼儀作法は、授業で教わるものじゃありません。授業では計算とか、そういうのを教えるんです」とアリス。

「じゃあ足し算はおできになるわねえ」と白の女王さま。「一足す一足す一足す一足す一足す一足す一足す一足す一足す一足す一足す一足す一足す一はいくつ？」

「わかりません。途中でおいでかれて」とアリス。

「足し算はできない、と」と赤の女王が割り込みます。「引き算はできるかえ？ 八引く九」

「八から九を引くのは無理です、そうでしょう」アリスは待ってましたとばかりに答えます。「でも――」

「引き算もおできにならないのねえ」と白の女王さま。「じゃあわり算はいかがかしら？ パンをナイフで分割すると――答えはなあに？」

「それはたぶん——」とアリスが言いかけたところで、赤の女王さまがかわりに答えました。「バターパンだよ、もちろん。引き算をもう一つやってみるがいい。犬から骨をとったら、なにが残る？」

アリスは考えました。「骨は残らない、わよねえ、もちろん。だって取るんだから——そして犬も残らないでしょう、あたしにかみつきにくるもの——そしたらあたしだってぜったに残らないわ！」

「じゃあ何も残らないと思うわけじゃな？」と赤の女王さま。

「それが答えだと思います」

「ちがうな、毎度ながら」と赤の女王さま。「犬の正気が残る」

「でもいったいどうして――」

「やれやれ、少しは考えるがよいぞ!」と赤の女王さまが叫びます。「骨をとられたら、犬は怒って正気を失うであろうが、え?」

「そうかもしれませんわねえ」アリスは慎重に答えました。

「そうしたら、犬が去ったら、正気のほうがあとに残っているわけじゃろうが！」女王さまは、勝ち誇ったように叫ぶのでした。

アリスは、なるべく重々しい声を出そうとしました。「残らずに別の方向に向かうかもしれないじゃないですか」でも、つつい考えてしまうのです。「まったく、どうしてこんな、とんでも

なくわけのわかんない話をしてるんだろう！」

「この子、計算はカケラもできないときた！」と女王さまたちは声をあわせ、思いっきりそれを強調してみせました。

「陛下は計算はおできになるんですか？」とアリスは、いきなり白の女王さまに向き直って申しました。こんなにあれこれ粗さがしをされるのがいやだったからです。

女王さまは息をのんで、目を閉じました。「もし時間さえいただければ、足し算はできますのよ——でも引き算は、どんな場合でもできませんの！」

「もちろん A B C はわきまえておるな？」と赤の女王さま。

「それはもちろんまちががなく」とアリス。

「わたくしですよ」と白の女王さまがささやきます。「わたくしたち、いっしょに暗唱したりしましょうねえ。それで、これは秘密なんですけれど——わたくし、一文字だけの単語なら読めますのよ！ これってなかなかすごくございせんこと？ でも、あまりがっかりなさらないでくださいな。あなたもいずれ追いつかれますわよ」

ここで赤の女王さまがまたしゃべりだします。「実用問題なら答えられるかの？ パンの作り方は？」

これには、アリスは大喜びで叫ぶように返事をいたしました。「あ、それなら知ってます！ えーと、まず強力粉を用意して——」

白の女王（クイーン）さまがたずねました。「強力とおっしゃいまして、どのくらい お強うございしますの？ ライオンくらいですかしら、それともゾウくらいかしらねえ？」

「いえ、それはそういう強さじゃなくて、なんか小麦粉の種類的一种みたい——」

「見たいとおっしゃいまして、何がごらんになりたいのかしら？ そんないろいろ話をお飛ばしになると、こちらといたしましてもねえ」と白の女王さま。

「頭をあおいでやろう！」赤の女王さまが心配そうに割り込みます。「考えすぎで、熱っぽくなってるはずじゃ」そこで二人は葉っぱをたくさん使って、がんばってアリスをあおぎはじめて、やがてアリスはやめてくださいとお願いしなくてはなりませんでした。髪の毛があちこち吹き流されたいへんだったからです。

赤の女王さまが申します。「これでまた大丈夫だろうて。おまえ、語学はできるかえ？ あっちゃんぶりけをフランス語で言うと？」

「『あっちゃんぶりけ』なんて日本語じゃありません」アリスは重々しく答えました。

「だれも日本語だなんて申してはおらぬ」と赤の女王さま。

アリスは、こんどこそこの面倒から逃げ道を見つけたと思いました。「『あっちゃんぶりけ』が何語か教えてくださいましたら、それをフランス語で言うとうどうなるか申しますけど！」と勝ち誇って申します。

でも赤の女王さまは、ちょっとツンとした様子で身を引いてこう申しました。「女王たるもの、取引などはせぬ」

「女王たるもの、質問もしないでくれたらいいのに」とアリスは思いました。

白の女王さまは、心配そうなようすです。「もう口論はよしませうよ。稲妻の原因はなあに？」

アリスは、これは絶対確実にわかってるわと思ったので、きっぱりと答えました。「稲妻の原因は雷で——あ、ちがった！ いまのは逆でした！」と、あわてて訂正します。

「訂正には手遅れだわい。おまえが何か言ったら、それはもう確定して、その結果を受け入れるしかないのじゃ」と赤の女王さま。

「それで思い出しましたけれど——」と白の女王さまは目を伏せて不安そうに、手をにぎりしめたり離したりしています。「こないだの火曜日に、すごい雷雨がございましてねえ——というか、こないだの火曜日の一群の一つで、ということですけど」

アリスにはちんぷんかんぷんでした。「あたしの国では、一日は一度に一つずつしかないんですけど」

赤の女王さまが申します。「それはなんとも貧相でうすっぺらいやり方じゃの。さてここでは、昼も夜もたいがい一度に二つ三つ同時にこなして、冬になるとときには、最高で五夜くらいまとめてこなすね——もちろん暖をとるためじゃが」

「五夜まとめてとると、一夜よりあったかいんですか？」アリスはあえてたずねました。「五倍あったかじゃ、とうぜんであろう」

「でもその同じ規則によると、五倍寒くなるわけで——」

「まさにその通り！ 五倍あったかで、しかも五倍寒い——ちょうど、わらわがおまえより五倍裕福で、しかも五倍賢いのも同じじゃ！」と赤の女王は叫びます。

アリスはため息をついて降参しました。「まさしく、答えのないなぞなぞみたいだわ！」と思って。

「それ、ハンプティ・ダンプティも見たんですよ」と白の女王さまは小さい声で、まるで独り言みたいに続けました。「コルク抜きを手にとアにやってきて——」

「そやつ、望みはなんじゃ？」と赤の女王さま。

白の女王さまは続けます。「どうしても入ってくると申しまして、というのもカバを探しているとか。さて、ことの次第を申しますと、そんなものは家の中にはおりませんでね、その朝は」

「いつもはいるんですか？」アリスはびっくりした口調でききました。

「ええ、まあ木曜だけですけれどね」と女王さま。

「あたし、ハンプティ・ダンプティの望みなら知ってます。お魚をこらしめたかったのよ、だって——」

ここで白の女王さまがまた口を開きました。「とにかくものすごい雷雨でして、ものを考えることもできないくらい！」（「彼女の場合、もともと考えたりできぬたちでな」と赤の女王さま）「そ

して屋根が一部はずれてしまったんですよ、そして雷がいっぱい家に入って参りましてねえ——そしてこんなおっきなかたまりになって、部屋の中をころげまわりますんですよ——テーブルとかいろいろひっくり返しまして——わたくし、もうおびえすぎて、自分の名前も思い出せなくなってしまったんですよ！」

「そんな事故の最中に、自分の名前を思い出そうなんて、そもそもやらないほうがいいな、だって何にも役にたたないじゃない！」とアリスは思いましたが、かわいそうな女王さまの気持ちを傷つけまいとして、これは口には出しませんでした。

「陛下はこの方に寛大でなくてはなりません。悪気はございませぬのじゃが、一般にいて、この方はまぬけなことを言わずにはいられんのじゃ」と赤の女王さまは、白の女王さまの片手をにぎり、やさしくなでながらアリスに申しました。

白の女王さまはおずおずとした様子でアリスを見つめます。アリスとしても、なにか言った方がいいにちがいない、とは思いましたが、ここでは何も言うことを思いつきません。

赤の女王さまは続けます。「もともとあんまり育ちはよくない方なのですじゃ。でも、この気だてのよさは驚くほど！ 頭をなでてやっごらんなされ、すごく喜びますぞ！」でもこれは、さすがのアリスも勇気がありませんでした。

「ちょっとの優しさ——それと髪を紙にくるんでやること——それでこの方はおどろくほど——」

白の女王さまは深いため息をついて、頭をアリスの肩にもたせかけます。「もうとても眠いのです」とうめきます。赤の女王さまが申しました。

「かわいそうに、疲れておられるのじゃ。髪をなでておやり——ナイトキャップを貸してあげて——そして気持ちのよい子守歌を歌ってさしあげるのじゃ」

アリスは、最初の指示だけには従おうとしました。「でもナイトキャップは持ってません。それに、気持ちのいい子守歌も知らないです」

「ではわらわが自らやるしかないな」と赤の女王さまは、歌い始めました：

おやすみご婦人、アリスのひざで！

宴の支度が整うまでお昼寝

宴が終われば舞踏会

紅白女王とアリスとみんな！

「さあこれで歌詞がわかったじゃろ」と赤の女王さまは、アリスの反対側の肩に頭をのせます。「こんどはわらわに歌うのじゃ。わらわも眠気をもよおしてきたでな」次のしゅんかん、女王さま二人ともぐっすり眠っていて、しかも大いびきをかいています。



「あたし、どうすればいいのかしら！」とアリスは、丸い頭が一つ、また一つと、肩からすべりおちて、重たい固まりみたいにひざに転げ込んできたので申しました。「こんなことって、これまで一度もなかったはずよ、寝ている女王さま二人もいっしょにめんどろ見なきゃならないなんて！」

いいえ、イギリス史上一人も——だってありえないもの、女王さまって一度に一人以上はいなかったから。重たい人たちね、起きてちょうだいしたら！」とアリスは、いらいらした口調で続けました。でも、返事はなく、軽いいびきだけ。

いびきは、一分ごとにますます強烈になってきて、だんだん曲のように聞こえてきました。とうとう、歌詞までききとれるようになってきました。そしてとても熱心に耳を傾けていたので、でかい頭二つがひざから消えたときにも、ちっとも名残惜しいなんて思いませんでした。

アリスは、おっきなアーチになった戸口の前に立っていました。そのアーチにはおっきな文字で「アリス女王」ということばがかかっている、アーチの左右には呼び鈴のハンドルがついていました。一つは「お客用呼び鈴」、もう一つは「召使用呼び鈴」とふだが出ています。アリスは思いました。

「歌が終わるまで待とうと。それから呼び鈴を鳴らす——といっても——どっちをならせばいいのかな？」札に書いてあることで、ずいぶん混乱してしまったのです。「あたしはお客じゃないし、召使いでもないし、『女王』って書いたのがあってしかるべきよねえ——」

ちょうどそのとき、ドアが細く開いて、長いくちばしの生き物がいっしゅん頭をつきだし「再来

週まではだれも入れませんよ！」と言って、またドアをバタンと閉めてしまいました。

アリスはながいこと、ノックしたり呼び鈴を鳴らしたりしていましたが、何も起きません。やっと、木の下にすわっていたとっても年寄りのカエルが、立ち上がってゆっくりよたよたと、アリスのほうにやってきました。明るい黄色の服をきて、巨大なブーツをはいています。そして低いしゃがれたささやき声で申しました。

「やれやれ、こんどはなにごとですかいな？」

アリスはふりかえりました。だれでもいいからやつあたりしたい気分です。「このドアに応えるのは、どの召使いの仕事ですか！ その者はどこにおりますか！」とアリスは、怒った調子で申しました。



「ドアって、どのお？」とカエル。

アリスはカエルのゆっくりまのびしたしゃべりかたでいらいらして、足を踏みならしたい気分でした。「このドアに決まっているでしょうが！」

カエルはそのおっきなどんよりした目で、一分かそこら、そのドアをながめていました。それから近くによって、親指でこすってみて、ペンキが落ちないか試しているようでした。それからアリスのほうを向きます。

「ドアに答えるって？ こいつが何を質問していましたかね？」声がしゃがれすぎて、アリスがほとんど聞き取れないほどです。

「なにを言ってるんだかさっぱり」とアリス。

「あっしゃふつうにことばをしゃべっちゃうでしょうが、え？ それともあんた、つんぼ？ このドアが何か質問しましたかいな？」とカエルは続けます。

「何も！ ノックしてたのよ！」とアリスはいらいらして申します。

「それやっちゃあいかんよ——それはいかんよ——機嫌そこねちまうもんね」とつぶやいて、カエルはドアに歩み寄ると、でかい足でドアを一発けとばしました。「あんたが手をださなけりゃ、こっちも手を出さんでくれるんだから」と、またよたよた木のところに戻ります。

このしゅんかんに、ドアがサッと開くと、かんだかい声がこんな歌を歌っているのが聞こえました：

「鏡の国にアリスが語る
『我が手には杓^{しゃく}、頭上には王冠
鏡の国の生き物たちよ、なんであれ
紅白女王と我との晩餐^{ばんさん}にくるがよい』

そして何百もの声が合唱に加わりました：

「ではグラスを急いで満たそう
ボタンと bran をテーブルにふりまき
コーヒーにはネコを入れ、紅茶にはネズミを——
そして女王アリスに三の三〇倍の歓迎を！」

そして歓声のごちゃごちゃした騒音がきこえて、アリスは考えました。「三の三〇倍って九〇よね。だれが数えてるんだろう？」一分ほどしてまた静かになって、同じかんだかい声が次の歌を歌うのでした。

『『鏡の国の生き物たちよ、近う寄れ！』とアリス

『我が姿を見るは栄誉、聞くは幸甚

食事とお茶をともにするは誇りなり

紅白女王と我との晩餐^{ばんさん}にくるがよい』

そしてまたコーラスが続きます：――

「ではグラスに糖蜜^{とうみつ}とインクを満たし

その他飲むに快いもの何でも満たし

サイダーを砂に、ワインをウールにまぜ――

そして女王アリスに九の九〇倍の歓迎を！」

「九の九〇倍！ そんなのいつまでたっても終わらないわ。いますぐ入ったほうがいいわね――」とアリスは思いました。そして入ったしゅんかんに、みんな死んだように、しーんとしずまりかえってしまいました。

アリスは大きな広間を歩いていきましたが、ずっと不安そうにテーブルに沿ってながめていきました。お客は全部で五〇人ほど、それもいろいろです。動物もいれば鳥もいて、中には花もいくつか混じっています。「招待される前にでてきてくれてよかったわ。あたしだったら、だれを招待したらいいかさっぱり見当つかなかったでしょうから！」

テーブルのいちばん上座には、いすが三つありました。赤と白の女王さまがそのうち二つにすわっていましたが、真ん中のがあいています。アリスは、だれもなにも言わないのでちょっとまごまごしながらそこにすわりました。だれかしやべらないかな、と思っています。

とうとう赤の女王が口を開きました。「もうスープと魚は下げられてしまったぞえ。ひざ肉を持って！」すると給仕たちが、マトンの脚をアリスの前に置きました。アリスは心配そうにそれをながめます。関節肉を切り分けるのなんて、これが初めてだったからです。赤の女王が申します。

「引っ込み思案のようじゃな。マトンの脚に紹介してつかわそう。アリス、こちらマトン。マトン、こちらはアリス」マトンの脚は皿の中で立ち上がり、アリスに軽くおじぎをしました。アリスもおじぎを返しました。おびえるべきなのか、おもしろがるべきなのか、見当もつきません。

「一切れお取りしましょうか」とアリスはナイフとフォークを手にとって女王二人を交互に見比べます。

「まさか、何を申しておるか」と赤の女王さまがきっぱりと申しました。「紹介された相手を切るなんて、エチケットに違反しておるではないの。ひざ肉をお下げ！」すると給仕たちがそれを運び去り、かわりにおっきなすももプリンを持ってきました。

アリスはいささかあわてて言いました。「プリンには紹介していただかないで結構ですから。そうでないと、晩ごはんが一口も食べられないでしょう。少しおとりしましょうか？」

でも赤の女王さまは冷たい目つきでアリスをにらむと、うなるように申します。「プリン、こちらはアリス。アリス、こちらはプリン。プリンをお下げ！」そして給仕たちの下げかたがすばやすぎて、アリスはおじぎを返すひまもありませんでした。

でも、命令を出すのが赤の女王さまだけというのは、アリスとしても納得がいきませんでしたので、試してみようと思って、アリスは叫びました。「給仕！ プリンを戻してちょうだい！」そして、まるで手品みたいに、プリンがいっしゅんのうちに戻っていました。すぐくおっきなプリンで、アリスとしてもマトンのときのように、ちょっとはたじろがずにはいられませんでした。でもいっしょうけんめいがんばってそれをおさえこんで、プリンを一切れ切ると、赤の女王さまに渡しました。

「なんとまあ失礼千万！」とプリン。「あんたからわたしが一切れ切ったりしたら、どれほどお気に召すか知りたいもんだよ、このいきものめが！」

プリンの声は、ねばっこい、脂肪っぽい感じの声で、アリスは返すことばもありませんでした。ただすわってそれをながめ、息をのむばかり。

「なんとか申すがよいぞ。プリンばかりにしゃべらせておくなど、とんでもないことじゃ！」と赤の女王さま。

「そうですね、今日はすごくたくさん詩を暗唱してもらったんですよ」とアリスが言い始めた。とたんに、あたりは死んだような沈黙がただよい、みんなの目がこちらを見つめるので、アリス



はちょっとこわくなってしまいました。「そして、すごくおもしろかったんですけど——どの詩も、なにかしらお魚と関係があったんです¹。なぜここではみんな、そんなにお魚が好きなのかご存じですか？」

アリスはこれを赤の女王さまに向かってきいたのですが、その答えは、ちょっと見当はずれなものでした。女王さま、とてもゆっくりと重々しく、アリスの耳に口を寄せて申します。「魚といえ、白の女王陛下はすばらしいなぞなぞをご存じなのじゃ——それもぜんぶが詩になっておる——しかもぜんぶ魚のこと。暗唱していただくのか？」

「赤の女王陛下、それをおっしゃってくださるとはなんとご親切な」と白の女王さまは、アリスの反対側の耳にぶつぶつと申します。その声は、まるで鳩の鳴き声みたいでした。「実にすばらしいもてなしでございますわ！ よろしいでしょうか？」

「ぜひに」とアリスはとても礼儀正しく申します。

白の女王さまはうれしそうに笑って、アリスのほっぺたをなでます。そして始めました：

「『まずは魚をつかまえなければ』
これは簡単、赤ん坊でもできるはず。
『つぎに、魚を買いましょう』
これも簡単、ペニーで買えるはず。

『さあ魚を料理して！』
これも簡単、一分もかからない。
『お皿に入れて！』
これも簡単、もともとからお皿に入っているもの。

『持っておいで、食べるから！』
お皿をテーブルにのせるは簡単。
『お皿のふたをとっておくれ！』
さて、これはむずかしすぎて、できません！

ふたは糊づけみたいにしっかりくっつき——
ふたをお皿にくっつけて、お魚は間に横たわる
さて簡単なのはどちらかしら
魚のふたを解明するか、なぞなぞの謎を開けるか？」

¹訳注：欧米では、貝も魚の一種と考えることに注意。だから『セイウチと大工』の詩も、魚関連なのだ。

「一分かそこら考えてみてからあててみるがよいぞ。その間に、こちらは陛下の健康を祈って乾杯いたそう——アリス女王の健やかならんことを！」と赤の女王さまは、思いっきり金切り声をあげて、お客たちはみんなすぐに乾杯して、しかもとってもへんてこなやり方で飲んだのでした。あるモノはグラスを消化器みたいに頭のとっぺんにのっけて、顔に流れ落ちてきたのを全部飲み干しました——デカンターをひっくり返して、テーブルのふちから流れ落ちるワインを飲んでいます——そして三人（カンガルーみたいです）はローストマトンのお皿にわれさきによじのぼって、うれしそうに肉汁をなめだすのです。「かいばおけのブタみたいね」とアリスは思いました。赤の女王さまが、アリスに向かって顔をしかめながら申します。

「お返しに、見事なスピーチをするがよいぞ」

そしてアリスが、とてもすなおに、でもちょっとびくびくしながら立ち上がると、白の女王さまがささやきます。「わたくしたちが、支えてさしあげないといけませんですからねえ」

「ありがとうございます。でも、支えていただかなくても、だいじょうぶだと思いますから」とアリスもささやき返しました。

「そんなことですむと思っておるのかえ？」赤の女王さまがきっぱりと申します。そこでアリスは、なるべく優雅にその役目を果たそうとしたのでした。

（「それで、二人ともすっごく押してくるの！　まるであたしをペシャンコにおしつぶしたいみに！」とアリスは、あとでこの祝宴の様子をお姉さんに話してあげたときに言いました。）

確かに、スピーチをしながらアリスとしては、その場にじっとしているのがなかなかむずかしくなっていました。女王さま二人はそれぞれ右と左から猛烈に押してきて、アリスはほとんど空中に持ち上げられそうなくらい。「感謝の念で天にも昇る思いです——」とアリスは切り出しましたが、そう言いながら、アリスはほんとうに何センチか宙に上ってしまいました。でも、テーブルのふちをつかまえて、なんとか自分を引き下ろしたのでした。

「用心なさいな」と白の女王さまは、アリスの髪の毛を両手でつかんでわめきました。「何か起こりますわよ！」

そしてそのとき（とアリスはあとになって表現しました）いろんなことが一気に起きました。ロウソクがみんないっせいに天井までのびあがり、まるでとっぺんに花火のついたイグサのしげみみたいになりました。そしてびんはといえば、みんなお皿を二枚ずつ取って、それを急いで翼として自分にくっつけました。そしてフォークを脚としてくっつけると、あちこちめがけてパタパタ飛び回り始めたのでした。「ほんとうにまるで鳥みたいに見えるのねえ」とアリスは、始まりつつあるこのとんでもない混乱の中で、やっとのことでそう考えました。

このしゅんかんに、アリスのとなりから、耳ざわりな笑い声がして、アリスは白の女王さま^{クイーン}に何があったのかと思いました。でも女王さま^{クイーン}のかわりにそこにすわっていたのは、マトンの脚肉で

す。「わたくし、ここですわよ！」とスープ入れの中から声が叫び、アリスが向き直ると、ちょうど女王さまのおっきい人のやさげな顔が、器のふちからいっしゅんアリスに向かってニヤリとして、すぐにスープの中に消えてしまうところでした。

もういっしゅんも無駄にはできません。すでにお客さまの何人かは、お皿の上に横になっているし、スープのおたまがテーブルの上をアリスに向かって歩いてきて、そこをどけとせっかちに合図をよこしています。

「もおがまんできない！」とアリスは叫んで飛び上がり、両手でテーブルクロスをわしづかみにしました。そのままグイッと強力にひっぱると、大皿小皿、お客さま、ロウソクがぜんぶ、床にガシャンといっしょくたに落ちて、山づみになりました。

「そしてあなたはといえば」とアリスは、カンカンになって赤の女王さまのほうを向きました。彼女こそがこのバカ騒ぎの大もとだと思ったからです——でも女王さまはもう隣にはいませんでした——いきなり小さな人形くらいの大きさに縮んでしまって、いまではテーブルの上にのっかり、自分が背後にひらひらさせているショールの後を、うれしそうにグルグルとおっかけているのでした。

ほかのときなら、アリスはまちがいなくこの光景にびっくりしていたはずですが。でも、この瞬間には、もう何をみても驚くどころではないくらい、アリスは頭に血が上っていました。「そしてあなたはといえば」と繰り返しつつ、ちょうどテーブルの上で燃えだしたびんを、まさに飛びこえつつあったその小さな生き物を捕まえました。「ゆすって子ネコにしちゃうからね、まったく！」



第10章 ゆさぶる

そういいながらアリスは赤の女王^{クイーン}さまをテーブルから持ち上げると、思いっきり前後にゆさぶりました。

赤の女王^{クイーン}さまは、まるでなんの抵抗もしません。ただ顔がとても小さくなってきました。目が大きく緑になってきます。そしてさらに、アリスがどんどんゆさぶりつづけると、どんどん小さく――そして太って――そしてやわらかく――そして丸っこくなってきて――そして――



第11章 目をさます

——そしてそれは結局ホントに子ネコ、だったのです。



第12章 どっちが夢を？

「陛下、そんなに大きな声で鳴くもんじゃありませんわ」とアリスは目をこすり、子ネコに向かって敬意ときびしさをこめて申しました。「もう、とってもすてきな夢を見ていたのに、目がさめちゃったでしょう！ でも、おまえもいっしょだったわよね、子ねちゃん——鏡の国の世界中ずっと。知ってた？」

子ネコたちのとっても不都合なクセとして（というのはアリスがまえに言ったせりふですが）、こちらが何を言っても、必ずミャアと言うことがあります。「『イエス』だけがミャアで、『ノー』がニャアとか、そういう規則があればいいのに。そうすれば会話が続くでしょう。でも、いつだって同じことしか言わない人と、話のしようがないじゃない！」

この時にも、子ネコはミャアと言っただけでしたので、それが「イエス」の意味か「ノー」の意味かを当てるのは不可能でした。

そこでアリスはテーブルの上のチェスの駒をさがしまわって、赤の女王^{クイーン}を見つけました。それから炉端のじゅうたんの上にひざまずいて、子ネコと女王^{クイーン}をご対面させました。そして、勝ち誇ったように手をたたきます。「さあ子ネコちゃん、おまえが変身したのがそれだと白状なさい！」

（「でも、駒を見ようともしないのよ」とあとでお姉さんにすべてを話しているときにアリスは言いました。「顔を背けて、見ないふりをするの。でも、ちょっとはうしろめたい感じだったから、たぶん赤の女王^{クイーン}さまだったのよ、ぜったいに」）

「もうちょっと背筋をのぼしてすわんなさい！」とアリスは楽しげな笑い声をたてます。「それに、何を——何を鳴こうか考えてる間、会釈なさい。時間の節約になる、でしょ！」そしてアリスは子ネコを抱き上げると、小さくキスしてやりました。「赤の女王^{クイーン}となった名誉をたたえて」だそうです。

「かわいいスノードロップ！」とアリスは続けて、肩越しに白の子ネコをながめました。白の子ネコはまだじっと洗面中です。「白の閣下、ダイナはいったいつになったら、おまえを洗い終わるのかしらねえ。夢の中でおまえがあんなにみすばらしかったのも、そのせいにちがいないわ——ダイナ！ おまえ、白の女王さまの顔を洗ってるって知ってた？ 不敬罪だよ！」

じゅうたんに片ひじをついて、あごに手をあてて心地よく寝っ転がり、子ネコたちをながめながら、アリスはさらに続けました。「そしてダイナはいったいなんになったんだろう？ ねえダイナ、おまえ、ハンプティ・ダンプティになったの？ たぶんそうだと思うな——でも、まだお友だちに



は言わないほうがいいわよ。あたしもまだはっきりしないし」

「ちなみにね、子ネコちゃん、おまえがほんとにあたしの夢の中にいたんなら、おまえがぜったい楽しんだはずのことが一つはあるわ——すごくたくさん詩を朗読してもらったんだけど、それがみんなお魚のことなの！ 明日の朝にはほんとうにおごちそうよ。朝ごはんを食べてるとき、ずっと『セイウチと大工』を暗唱してあげるわ。そうしたら、朝ごはんがカキだってつもりになれるでしょう！」

「さあ子ネコちゃん、こんどは、あれをすべて夢にみたのがだれだったかを考えてみましょう。まじめにきいてるんだから、そんなに前足をなめてばかりいるんじゃない！ ダイナに朝、洗ってもらったばかりでしょう！ つまりね、夢を見たのは、あたしか赤の王さまかのどっちかにまちがいないのよ。赤の王さまはあたしの夢の一部よね、もちろん——でも、そのあたしは、赤の王さ

まの夢の一部でもあったのよ！ だからほんとに赤の王さまだったのかしら、子ネコちゃん？ おまえは赤の王さまの奥さんだったんだから、知ってるはずでしょう——ねえ、おねがいだから、考えるのを手伝ってよ！ 前足なんかあとでいいでしょうに！」でも意地悪な子ネコは、反対側の前足をなめはじめただけで、質問が聞こえないふりをするばかりでした。

あなたはどっちだと思いますか？

|

A boat beneath a sunny sky,
Lingering onward dreamily
In an evening of July{

晴れた夏空の下のボートが
夢見るように漂い進む
七月の夕暮れどき——

Children three that nestle near,
Eager eye and willing ear,
Pleased a simple tale to hear{

近くに群がる子供ら三人
きらめく瞳に熱心な耳
簡単なお話を聞いて喜び——

Long has faded that sunny sky:
Echoes fade and memories die.
Autumn frosts have slain July.

あの晴れた空はとうに色あせ
こだまは消えて記憶は薄れ
秋の霜が七月を斬る。

Still she haunts me, phantomwise,
Alice moving under skies
Never seen by waking eyes.

それでも彼女が亡霊的につきまとう
覚めたる目に見られたこともない
空の下でうごくアリスが。

Children yet, the tale to hear,
Eager eye and willing ear,
Lovingly shall nestle near.

子供たちはまだお話を聞こうと
きらめく瞳に熱心な耳で
いとおしくも近くに群がる。

In a Wonderland they lie,
Dreaming as the days go by,
Dreaming as the summers die:

みな不思議の国に横たわり
日が流れるにつれて夢を見
夏の衰えの中で夢を見る。

Ever drifting down the stream{
Lingering in the golden gleam{
Life, what is it but a dream?

果てしなく流れを漂い下り
黄金の輝きの中で戯れ
人生、まさに夢ならんや？

おしまい¹

¹訳注：蛇足ながら、上の詩は英語のほうの頭の一文字を拾って読んでいただいたりするとおもしろいかと。

訳した人の言い訳

というわけで「不思議の国のアリス」²に続いてルイス・キャロル著「鏡の国のアリス」なのである。Through the Looking Glass: And What Alice Found There (1896) の全訳だ。このバージョンには、最終的に削除されてしまった「かつらをかぶったすずめばち」のエピソードも復活させてある。人民大衆よ、髄喜の涙にむせびつつ、法悦郷に全身をけいれんさせながらのたうちまわるがよろしいのだ。

頼まれもしないのに、われながら物好きな話ではある。でも頼まれたってこんなこと、ホイホイやりゃあしませんがな。この「アリス」シリーズには、テッキーなおたく心に訴える独特の魅力がある。それがなんなのかは、いろんな人がいろんなことを言っていて、まあそれぞれあたっている部分もあるんだろう。Web が普及してしまったせいでいまではかつてほどの輝きはないけれど、Voyager 社がマッキントッシュのハイパーカードを使った expanded book を出しはじめたとき、まっさきに出たのはアリスの定番注釈書 Annotated Alice だったとか、確かプロジェクト・グーテンベルグ³でも、アリスが最初期の登録作品の一つだとか、こういう電子っぽいプロジェクトになにかとつぎ出されるのもこのアリスの特徴だ。Voyager のアリスの場合、ハイパーカード的な形式が、小説のありとあらゆる場所にマニアックな注釈がついて、という Annotated Alice の形式⁴に実にうまくマッチしたものだだったってこともある (逆にそれ以外のやつって、あんまりハイパーカードで読んでもおもしろくなかったんだよね。ギブスン Neuromancer の Voyager 版とか買いはしたけれど、結局読まなかったな。あと、注釈の注釈の注釈の……とつきまくってる、タルムードとか仏典とか、ぜったいこの手のハイパーテキスト向きだし、ぜったいだれかがハイパータルムードとかハイパー中論とか作ってるはずなだけだな。どっかにないかな)。でも、それ以上にこの作品そのものの力があつたはず。ぼくもプロジェクト杉田玄白⁵をはじめるにあたって、やっぱりまっさきに目玉でほしいと思ったのは、このアリスだった。それまでずいぶん長いこと、アリスなんか読み返してなかったのにね。

もちろんニーズの大きさは無視できない。これは、SF の人も、純文学の人も児童文学の人もミ

²<http://www.genpaku.org/alice01/alice01j.html>

³<http://promo.net/pg/>

⁴付記：そうそう、この翻訳版アリスも、勝手にどんどん注釈つける人とか出て来てくれるとおもしろいになあ。自分でこのファイルを持ってって加工してくれてもいいし、「ここにタグをいれてくれ」とかいう要望があればいくらでも応じるからさあ。

⁵<http://www.genpaku.org/>

ステリーの人も、ありとあらゆるジャンルの人が共通に読んでいて、しかもかなりはっきり記憶に残っているという、ある種の接点になっている。だからこそ「白いうさぎについていけ」というのがあの「マトリックス」でも使えるわけだわな。ほかにこんなポジションを持つ作品は一つもない。プロジェクト杉田玄白にしても、すでに技術っぽい文書なら、エリック・レイモンド⁶の論文をはじめいくつかあったけれど、それを含めてもっと広い範囲に遡及力を持つものってえと……やっぱこれしかないのよ。

さらにこの Annotated Alice を書いたマーチン・ガードナーが数学者なのは、常識だろう。このアリスは別に、科学解説書ではないけれど、各種へ理屈を通じていろいろ論理学の勉強っぽい話も出てくる。こいつのおかげで、いろんな人に変な国を旅させて夢オチをつけるという科学解説書の形式が一気に開花している。たとえばジョージ・ガモフ「不思議の国のトムキンス」とかね。いやもちろん、主人公が変なやつに案内されて変なところをめぐる話なんていくらもあって、ダンテだって形式としては似たようなもんじゃねーかよ、とか言えないこともないのだけれど、でもアリスは、ちょっと頭のいいやつなら「あ、あたしにもこのくらいならでっちあげられそう」と思わせるような、そんなとっつきやすさもあるんだろう。

そうそう、翻訳の底本には、プロジェクト・グーテンベルグに入ってるやつと、さらに Annotated Alice の本やら、その他オンラインでみつけた文やら、いろいろ参照していて、とくにこれってのはないのだ。

翻訳のこと

「不思議の国」よりこっちのほうがむずかしいかな、とぼくは思っていたんだけど、必ずしもそうではなかった。その原因の一つは、アリスがちょっと大きくなって、全体に使う単語のレベルも高くなっているのだから、「不思議の国」よりちょっとむずかしい訳をしてもかまわないところにある。鏡の国のアリスは、七歳半。不思議の国から鏡の国までの時間はというと、不思議の国時代は子ネコだったダイナが、いまでは自分の子ネコを持っているんだから、まあ三年くらいだろうか。不思議の国時代のアリスは、カラシというのが鉱物か植物かも知らなかった。鏡の国のアリスは、そのくらいのことは知っている。マナーも知っているし、肉の切り分けも、やったことはなくても、だいたいのは知っている。女王さまのえらそうなしゃべりかたも知っている。たぶん、日本で育てば、漢字もそこそこ知っているだろう。

というわけで、今回の訳では、漢字を増やしてみた。その分、いろんなことがやりやすくなっている。ちょっと増やしすぎたかもしれない。でも不思議の国のアリスだと、漢字が少なすぎてかえって読みにくい、という指摘があった。そうかもしれない。このくらいだと、どうかな。まあ漢字の多い少ないも、なれの問題ではあるのだけれど。

⁶<http://www.tuxedo.org/esr/>

途中で、また既存の訳をいろいろ見てみたけれど、みんな……下手だな。「不思議の国のアリス」をやったときには、高橋訳とか矢川訳とか、まあまあうまいと思った。でもこの「鏡の国」だと、もうそうは思わない。自分で訳してて、自分の訳がインプリンティングされたので、ほかの訳が不自然に思えるだけなのかもしれないけれど。なんというか、「不思議の国」と同じ方針で訳そうとするあまり、そういう不自然さが出てくるんじゃないかと思う。原文のレベルがちょっと上がっている、その雰囲気から鈍感だから、どうしてもそうになってしまうんだと思う。

そしてもう一つ、それにも関連しているけれど、さっき書いた漢字とひらがなのバランスの問題。たとえば、『ジャバウォッキー』の訳もいろいろあるけれど、高橋康也はこう訳している。

そはゆうとろどき、ぬらやかなるトーヴたちが

ぼくはこれではダメだと思う。なぜかという、ひらがなまみれだから。ふつう、子どもが（いやぼくたちでも）何かを見て、むずかしい、よくわからないと思うときって、なによりも知らない漢字が使ってあるというのが大きい。ひらがなだけで、一見荘厳でもっともらしく、しかもでたらめ、というのをつくるのはとても困難だ。「美味しんぼ」で「まったり」というのが出てきたとき、関東圏の人々はかなり面食らうと同時に、つい笑ってしまったはずだ。あんなふうに、ひらがなだけの知らないことばが登場することは、めったにないし、あればそれはギャグだ。だから「北斗の拳」の「ひでぶ!」「あたわ!」「あべし!」というのがギャグとして大いに流行った。でもあのジャバウォッキーは、とりあえずギャグではいけないのね。なんかもっともらしくないと。

これ以外の多くの訳でも、まずあとのハンプティ・ダンプティの解説にあわせた、だじゃれのつじつまをあわせることにばかりみんな頭が回っていて、『ジャバウォッキー』それ自身を詩として「らしく」しようという努力が欠けていると思うのだ。

さらにそれ以外にも、前々から気になっているアリスのしゃべりかたもある。みんな、世の中のふつうの女の子がどんな口をきくか、ちゃんと観察していないんじゃないか。前回でもそうだけれど、アリスは上流階級でちゃんとした教育を受けていて、すごく物知りではある。だからここでの「ふつう」というのは、日本の七歳半の女の子的な「ふつう」ではない。なんとなく中学生くらいの雰囲気を入れないと、うまくいかない。それでも、既存の訳で見られるような異様な気取ったしゃべり方や、文語でしかお目にかかれなようなことば使いはしていないはず。もちろん訳は慣れの問題もあるし、好き嫌いもあるけれど、ぼくはいまここで自分がやったやつこそが、現時点ではいちばんバランスがとれて優れた翻訳だと思う。

おはなしそのものについて

今回、訳している間にちょっとアリス論とか、ルイス・キャロル論みたいなのをいくつか読みなおした。ぼくがアリスをまじめに読んだのは、柳瀬尚樹の『ノンセンソロギカ』（朝日出版社）を読んでからのことだった。さらに別冊現代詩手帖『ルイス・キャロル』を読んで、「アリス」というのはなんつー深い含意を持った小説であることか、とおそれいったのであった。そしてそれに気がつけるこの人々はなんとえらいのであろうか。そう思って、ぼくはいっしょうけんめい深読みしようとしながら、アリスをかたくるしく読んでいったのだった。

さて今回、現代詩手帖別冊のほうをちょっと見てみたんだが——ゴミクズのかたまりだった。みんな、ほんとにばかみみたいなことしか書いていない。アリスの世界では、ふつうの現実の法則が通用せずに夢の論理が云々。そんなことは、読めばわかる。この国では、夢の（非）論理が現実の論理に勝利して云々。だってこれは夢の中なんだから、あたりまえではないの。

いまこうして見ると、こういうブンゲーヒーローロンカの人たちとかは、とっても頭が悪くて、あたりまえのことしか実はいえないのだ、ということがよくわかる。その一方で、ぼくが小説を読むときにほんとうにだいじだと思うことには、ちっとも触れてくれない。小説そのものについてはまるでしゃべらない。それは単に、しゃべりやすいことからとりあえずしゃべろうとしているんだろうか、それとも単に鈍感で、そもそも小説そのもののおもしろさを感じる力がないんだろうか。ぼくはどうも、後者の人が多すぎるんじゃないか、という気がする。

ぼくがだいじだと思うのは、たとえばこういうことだ：なぜ「不思議の国のアリス」に比べて「鏡の国のアリス」のほうが暗くて不気味な感じがするのか。なぜ読みながら、こう、まわりついてくる感じが強いのか。それは、「不思議の国のアリス」が、夏の昼下がりの川辺で夢見られた物語で、ストーリーのほとんどが、かなり開けた場所で展開するのに対して、この「鏡の国のアリス」は、冬の午後に暖炉の横で夢見られた物語で、ストーリーの多くが暗い森の中で展開する、ということもあるんだろう。さらにさっき言った、鏡の国のほうが漢字をたくさん使える、というのもあるはず。あくまで一般論としてだけれど、文章を書いていて、漢字の多い文章はその分、印象が暗くなる。でも、これは逆かもしれない。印象が暗いから漢字に違和感がない、ということかもしれない。

そしてもう一つ、不思議の国のアリスのほうが、比較的自由に思いつきで構築されたお話になっているのに対して、鏡の国はもっともっと計算ずくなのね。アリス自身にとっては、不思議の国の場合と同じように、次々に変なキャラクターと出会うだけなんだけれど、不思議の国の場合には、次にだれに会うかは特に理由があるわけじゃない。でも、鏡の国では、ストーリー全体の外側に、冒頭で説明してあるチェスの試合という大きな枠組みがあって、アリスは常にその中で一つの駒として動かされているだけなのね。そういうストーリー的な構造、逆にいえば制約が、「鏡の国」を

ちょっと息苦しく、暗い感じにしているのだ。それを、少女アリスを自分の手のひらの中で支配したいというロリコン中年男ルイス・キャロルの性欲のあらわれ、というふうに解釈するのは、それはもうあなたの自由だ。

イラストを描いたテニエルも、全体に漂う暗さを感じている。だからかれのイラストは、「不思議の国」に比べてかなり全体が暗いものになっている。それとも、かれの暗めのイラストの印象のおかげで、小説そのものの印象が暗くなっているのだろうか？ これはぼくにもわからない。

で、まあいいがいはここで、「鏡の国」と「不思議の国」のどちらが好きか、なんてことを考えるのが定石だろうな。うん、ぼくは昔は、鏡の国のほうが好きだった。全体をチェスの試合として構築してあるのがなんとも賢く思え、ジャバウォッキーの発想は天才的だと思ったし。ただ——訳したあとで考えてみると、やっぱり不思議の国のほうが好きだな、という気はする。それは、作品全体の構成に関わることで、チェスの試合というしぼりをかけたせいで、鏡の国のほうはとても直線的な構造になっている。不思議の国みたいに、前の方の登場人物があとにも出てきて話をかきまわしたりはしない。一回消えた登場人物は、二度と出てこない。そして、いくつか有望そうな伏線があっても、それが活用されることもない。たとえば赤の女王さまが、アリスに指示を出すときに「なまえがわからなくなったらフランス語で考えろ」と言うところとか、その直後の、花のみつを吸うゾウとか。

さらに——不思議の国では、アリスはもっと真剣だ。自分がどこにいるかわからないし、ここから出られなかったらどうしよう、と本気で悩んで泣いたりする。鏡の国では、アリスは自分がいずれここから出られるもの、と完全にたかをくくっている（赤の王さまの夢の話で、自分が本物かどうかわからなくなるところ以外は）。そして自分がチェスの駒であることも承知している、というか自分から志願をしている。このせいで、アリスの感情的な起伏、ぼくたち読者の移入の程度も、限られたものになってきている。あまりまじめではないな。とちゅうでしょっちゅう「後でお姉さんに話したところでは」とか出てきて、ああいずれまた同じ夢オチで終るんだな、というのが読者にもはっきりしている。そして彼女自身には、もう大きなイベントは起きない。不思議の国では、アリス自身がおっきくなったりちっちゃくなったり、首がのびたり、というイベントがいろいろ起きる。鏡の国では、アリス自身にはなにも起きないでしょう。何も起きないといえば、不思議の国ではいろいろ飲み食いしていたアリスは、鏡の国で何一つ口にしないことにも注意。そういう、アリス自身の小説への参加のしかたがちょっと疎遠なことも、鏡の国が全体に薄い感じをつくっているのだ。

いずれ茂木健一郎のクオリア研究がちょっとでも成果をあげれば、こんなことももっときちんとわかるようになるだろうね。ぼくはいまのかれのクオリアの話って、大風呂敷を広げすぎていて無節操なだけに見えるから期待はしていない。でも、いつかかれの言うようなことが実現すればな、と思う。そのとき、既存の文学研究と称するものも、美術ヒョーロンとかもすべて消え去る

だろう。そしてぼくたちがほんとうに小説を読んだりしてだいじだな、と思うことがすべて解明される、かもしれないのだけれど。

ほかにも、たとえば名前のない森の子鹿との話や、ヒツジとボートに載っているときの花をつむエピソード（特に後者）が妙にエロチックで、しかもナラティブとしても浮いているでしょう。あれをもっとなんかきちんと表現できないものか。あれは「鏡の国」、いや「不思議の国」まで含めてもいちばん変なところだと思う。あと、「不思議の国」の子犬の話は、あれはちょっと変なのだ。あれはなぜあそこにあるんだろう。そういうのを考えてほしいのだ。でもまあ、できないんじゃないかな。

すずめばちとキャロルのこと

実は正式発表された「鏡の国」は、これより短かったんだ。アリスが女王さまになる直前のすずめばちのエピソードは、最終的に発表されたものからは削られていた。イラストのテニエルが、イラストの描きようがないと言って削除提案をしたのが受け入れられたみたいだ。

みんなその章は、もう完全に失われてしまったと思っていたんだが、1989年に、キャロルの遺品が競売に出てきて、その中にこの章の試し刷りが混じっていたもんだから、もう大騒ぎ。このバージョンでは、それも復活させてみた。もっとも、これが独立した章だったのか、それとも白騎士の章のつづきだったのか、実はよくわからない（たぶん独立した章ではなかっただろうとは予想される）んだけど。ゲラが残っているので、頭のところがどう入るかはわかる。でも、この後、小川をとびこえるところで、なんか途中に入るのかはわからない。このゲラを削除してから、ほかの部分にいろいろ手直しが入ったんだろうと予想されるから。でもまあ、こんなもんだろう。本当にテニエルが言うほど悪かったか、通常バージョンもあるからくらべてみるといい。

ルイス・キャロルは無駄がきらいな人で、「ジャバウォッキー」も昔妹たちのためにつくっていたファンジンに原型が載っていると、いろいろ昔のアイデアを使い回している人だったんだって。このすずめばちの話も、いずれどこかでまた使うつもりだったのかもしれない。でも、結局はつかわずじまいだった。不思議の国の解説には書かなかったけれど、この人の本名はチャールズ・ラトウィッジ・ドジソン。数学の、特に論理学の先生だった。このあと、キャロルは主立ったと作品として「スナーク狩り」という変な詩を書いて、それから「シルヴィーとブルーノ」「シルヴィーとブルーノ完結編」というのを書く。そして独身のまま死んだ。

確かにこの人は、ロリコン以外のなものでもなかった。ただ「不思議の国」のあとがきではちょっと茶化した書き方をしたけれど、でもカメラ小僧みたいな卑しさはこの人には全然なかった。女の子をどうしたいわけじゃなくて、まわりにいてくれるのがうれしかっただけみたい。そして「鏡の国」の最初のところの詩でこの人は、いつかこうしてお話をしてあげている女の子たちもおっきくなって、よそにいつてしまっただけで自分のことなんか忘れちゃうんだろうな、と悲しく思っていた。

第8章の白騎士は、ドジソン先生がいちばん自分の姿を投影しているキャラクターだろう（いろいろ変なことを思いついたりしては悦に入っていて、論理に妙にこだわっているでしょう）。この白騎士が詩を朗読してあげる直前に、アリスがその光景をずっとずっと忘れなかった、というくだりがある、これはドジソンが、本当にそうになってくれたらな、こうしてお話をしてあげている自分の姿を忘れないでいてくれたらな、というのをちらっとのぞかせているんだ。その光景をいつまでも忘れなかったのは、アリスじゃなくて、ドジソン先生だったんだね。こことか、トウシンソウのところとか、「鏡の国」の一つの特徴は、ドジソン先生自身がかなり心情を吐露してしまっている部分が多いことだ。トウシンソウのところの、はかない夢の花を一心につむアリスの姿を、ずいぶんしつこく描写するところ、そしてそのはかなさを話者がちょっと嘆いてみせたりするところ。

でも、キャロルの予想は、うれしい形ではずれたみたいだ。昔仲良くしていた女の子たちは、大きくなってからもキャロルと手紙のやりとりをしたりして、キャロル/ドジソン先生のことを忘れてはしなかった。そしてだれ一人「実はあたし、ドジソン先生にいたずらされて云々」なんてことも言い出したりせず、みんなとってもやさしくて楽しい人としてドジソン先生のことを覚えている。

なんか、いいよね。

――2000年8月10日
ウランバートルにて
山形浩生